# ソードアート・オラトリオ

スバルック

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

《黒の剣士》キリトと《女神》ヘスティアとのファミリアが織り成す冒険譚

＊この作品の番外編である《ガールズ・オラトリア》もよろしくお願いします！

# 目次

始動
プロローグ 1
第1話 4
第2話 9
第3話 15
第4話 20
第5話 27
第6話 33
第7話 40
第8話 49
第9話 60
第10話 70
第11話 79
第12話 89
うそつき
第13話 99
第14話 113
第15話 125
第16話 135
第17話 146
第18話 155
黒の剣士
第19話 162
第20話 174

第２１話 184
第２２話 194
第２３話 205
最後の一人
第２４話 215
第２５話 225
第２６話 233
第２７話 245
第２８話 253
第２９話 260
予期せぬコンビ
第３０話 267
第３１話 272

# 始動

## プロローグ

薄暗い通路。
ここ『ダンジョン』と呼ばれる地下迷宮の中だ。
この地下迷宮は幾つもの階層に分かれており、下に降りる毎に過酷さが増していく。
数多の凶悪なモンスターに武器一つでのし上がり、求めるのは富か名声かはたまた未知なる景色を見るためか。
冒険者の目的は冒険者の数だけあるだろう。
ここ第５層で現れるモンスターはＬＶ．１でも多数対一の状況を作らなければ、十分に探索は可能だ。
そのはずだったのだが…

「うおおおおおおおお！」

現在絶賛全速力で逃走中。
俺は今まさに修羅場を迎えている。
なぜなら…

「くっそ！あり得ないだろ！こんな上層でＬｖ．２のミノタウロスにエンカウントするとか！」

Ｌｖ．（レベル）それは冒険者やモンスターの強さをより明確に表したもので、ひとつのレベル差は圧倒的なステータスの違いを意味する。俺はひたすら走り回ったが、この階層には今日来たばかりで土地勘などさっぱりだ。故に逃げた先が行き止まりであるなんて知るはずもない。

『グルルルルルルルル！』

「くっそ！」

ジリジリと詰め寄ってくる。

いつあの２Ｍを越す巨体で突進してきてもおかしくない。

「こうなったら一か八かだ！」

俺が叫んだのを機に突進してくるミノタウロス。

俺はそいつに背を向け壁に向かって走る。

その勢いのままジャンプし、壁を蹴って後方に宙返りした。

思惑はうまくいき、ミノタウロスはそのまま壁に激突して動きが鈍り、俺は奴の背後をとることに成功した。

俺は背中に装備している片手剣を右肩に背負うように持ち、左手を前に出し、助走をつける。そして、左手と右肩に背負うように持つ片手剣を入れ替えるように身体を捻り剣をおもいっきり突き出す。

片手剣 剣技（ソードスキル） 重突進技《ヴォーパルストライク》だが、無情にも剣先が欠けてしまいミノタウロスには刺さらなかった。

「なっ…」

絶望。

思考が一瞬途切れる。

その間にミノタウロスが襲いかかる。

（もうダメだ…）

次の瞬間ミノタウロスの身体が真っ二つに切れていた。

「大丈夫…？」

そこに立っていたのは女神のような女の子だった。

蒼色の軽装に身を包んだ細身の身体。
俺を見る瞳の色は金色。

蒼い装備に身を包んだ、金髪の女剣士。
半月前に冒険者になった俺でもわかる。

【ロキ・ファミリア】に所属する第一級冒険者。
全ての種族間の女性の中でも最強の一角と謳われるＬｖ．５。

「あの…大丈夫ですか？」
これは一つの眷族（ファミリア）の物語。
《黒の剣士》キリトが歩む冒険譚。

# 第1話

「それで？どうして私の言いつけを破って5層なんかに足を運んでるの？」

「いや、だってステータスでは適正値でしたよ。そもそも、上層でＬｖ．２のミノタウロスが出るなんてイレギュラーはそう起きるもんじゃないですし…」

「ほう…反省してないみたいね。これはもう一度ダンジョンの恐ろしさを一から教育しなきゃダメかしらね、キリト・クラネル君？」

「それは…すいません俺が間違っていました、エイナさん。」

彼女はダンジョンを運営管理をする『ギルド』の窓口受付を行っている、エイナ・チュール。

ほっそりと尖った耳にエメラルドの瞳。セミロングのブラウンの髪はとてもキレイだ。

彼女の種族はハーフエルフ。ヒューマンとエルフのハーフでエルフの美しい特徴を残しながらも、角がとれた親しみやすい雰囲気で周りからは人気が高い。

彼女はキリトのアドバイザーとして任を受けてから半月経っている。

彼女の中でキリトは男の子だが、どこか中性的な雰囲気で線が細く冒険者には明らかに向いてなさそうというのが第一印象だった。

髪や瞳も真っ黒で東洋の男性の特徴に似ている。

そんないかにも冒険者に向いてないように見える彼は半月で急激な成長をしている。

正直彼女はこの仕事に就いて長くはないが、短くもない。

したがって、稀にこんな急成長する冒険者がいるのか調べたが彼を除いてそんな急な成長曲線を描く冒険者はいなかった。

「はぁ…君のその急成長はホントにスキルとかのせいではないのね？」

「そうですね。神様はそう言ってるのですが、エイナさんから聞いた冒険者のステータス上昇のしかたから考えると、俺は多分スキルの影響だと思います。」

「それじゃあ、スキル申請してもらわないと…いえ、ステータスの強制的な開示はマナー違反よね。それにあなたの神様の考えもわからなくはないわ。」

「と、いいますと？」

「神様というのは珍しいものに目がないからよ。天界の生活に飽きた神様たちは娯楽を求めて下界に降りてきた。そこで、新たに新スキルなんてものが現れたら、キリト君はしばらくは彼らのおもちゃにされるわね。」

神様。彼らは昔は天界に住んでいて、下界で死んだ人の魂を転生させていた。

彼らは不老であり、誰もが美男美女である。

そして彼らには神の力（アルカナム）という力がありその力は絶大だ。

しかし、彼らはそんな天界の生活に飽きてしまったらしい。ある日神様は下界に降りてきた。

下界の文化という娯楽を求めてだ。

そこで、子である俺達下界のものに神の恩恵（ファルナ）を授けた。これがいわゆる《ステータス》だ。神様達が扱う神聖文字（ヒエログリフ）を神血（イコル）を媒介にして刻むことで対象の能力を引き上げる。そして、経験値（エクセリア）という、今まで経

験した事象を元に能力上昇に反映し、冒険者は強くなるのだ。

「あぁ…わかります。」

俺はおもちゃにされる光景を想像して背筋を震わせた。

「それで、何か私に用があったんじゃない？」

「えっと、そうでした！実はアイズ・ヴァレンシュタインさんについて教えてもらえないですか？」

「え？あの剣姫の？」

「ええ、彼女の強さについて興味があるんです。」

「ちょっと待ってね。そういうことなら、多分資料があるから。」

そう言って、エイナは様々な資料を持ってくる。

そして、なんどかめくっていくうちにようやく見つけた。

「これよ！なになに…幼いころから冒険者をしていたみたいね。そして、レベルアップの最速記録者でもあるみたいね。」

「レベルアップか…」

「む。キ・リ・ト・君？彼女みたいに早くレベルアップしようなんて考えちゃだめよ。そうやって無茶してまた下の階層なんかに行ったりしたら、どうなるかわかるよね？」

その言葉をいうエイナの眼はまったくといっていいほど笑っていなかった。

「ははは…いやだなエイナさん。俺がそんなことするはずが…」

「わかった？」

「はい…。」

以前の鬼のようなダンジョン知識の講習を受けたあとで、彼女に逆らおうと思わなかった。

ここは素直に頷いておくことが大事である。

「とりあえず、アイズ・ヴァレンシュタイン氏のことは置いておいて君は君自身のペースで強くなっていけばいいんだからね。」

その言葉に先ほどの怒気はなかった。

むしろ、子供成長を見守るおねえさんのように優しい表情をしていた。

「わかっています。俺は俺自身のペースで強くなります。そして、必ず…」

「最後、何か言った？小さくて聞き取れなかったけど…」

「いえ、なんでもないですよ。それじゃあ、今日はこの辺で失礼します。」

「ここにはダンジョン潜るたびに顔を出していってね。」

「そうですね。美人のエイナさんの顔をみるためですから、それくらい当たり前ですよ。」

キリトのお世辞だとわかってはいるが美人と呼ばれて悪い気はしないエイナは緩ませる。
そして、それを悟られないように誤魔化していく。
「美人って……！もう年上をからかわないの！ほら、行った行った！」
「はは！それじゃあ、また」
キリトは今日集めた魔石を換金所でお金にしたあと、夕暮れ街に足を運んで行った。

# 第2話

あの日のダンジョン内で俺は彼女と会話した。

「ふぅー…助かったよ。ありがとう。俺の名前はキリト・クラネル。よろしく。」

俺は剣を背中の鞘に戻そうとしたが。そういえば、剣が折れてるのを思い出して落ち込む。

(借金してまで買った武器だけど、ギルドからの支給品だとこの程度が限界か…)

街に戻ったら新しい武器を買い直そうと思い、とりあえず折れた剣を背中に納めた。

「…私は、アイズ。アイズ・ヴァレンシュタイン。」

彼女は俺が無事なのを見てか少し顔を緩ませた。

基本的に感情表現に乏しそうな人でなかなか考えてることが読めなさそうではあるが、悪い人ではなさそうだ。そしてなにより彼女に惹かれるものがあった。

「一つ聞いてもいいかな?」

「…なに?」

「君はなぜそんなにも強いの?」

「私も強くなりたい。今よりもっと。」

質問の答えになってはいなかったがそれは彼女の願望であり、悲願であった。
恐ろしいまでに貪欲に更なる力を得るために。
遥か先に至るために。

「私はもっと強くなる。あなたはどうなの？」

「俺も強くなるさ。あなたを抜かすぐらいにね。」

「うん、待ってる。」

そして、彼女はキリトに背を向けてダンジョンの出口へと向かって歩いていく。
キリトはその背中を見えなくなるまで見つめてから自分もダンジョンを出るために動き出した。

★☆☆★

エイナさんとの会話を終え、ホームに帰るとそこには既にバイトから帰っていた神様がいた。
神様がなぜバイトをするのかというと、下界での能力の制限がかかっており破ると即天界送りにされるらしい。
その制限はより下界の子である人間の文化を楽しむために設けられたそうだ。

「あれ？キリト君今日は早いんだね。」

「少しトラブルに巻き込まれたんですよ。そのせいで稼ぎも今日は残念なことになってしまいました。」

「まぁ、そういう日もあるさ！それに君に至っては初日から初心者冒

険者ではかなり多くの稼ぎをしてると思うぞ！」

この俺の愚痴のような言葉に笑って返してくる彼女が俺の主神である女神・ヘスティア様だ。見た目は黒髪でツインテールにしており、顔はとても幼く見える。

そして、なによりその幼く見える顔に反して胸はとても大きく主張している。

男神からは《ロリ巨乳》と言われてるとかなんとか。

今は背中の恩恵（ファルナ）を受けた立派な眷族《ファミリア》、つまり家族だ。

「あと、1週間はなにもしないで過ごせるくらいにはお金もあるしな。」

「随分心許ないですね。そうだ、ステータスの更新をしてもらってもいいですか？」

「ん？なんだそんなことお安いご用さ！」

このホームは既に廃墟となった教会の地下にある部屋だ。

正方形と長方形を合わせたような構造で、一人と一神が暮らすには十分の広さだ。このホームはヘスティア様が親友である神様から紹介されたものらしい。

そのおかげでホテルなど借りないでこうして寝食ができるスペースがあるのだから感謝してもしきれない。

俺は上の服を脱いで、ベットに横になる。

神様は俺の腰の辺りに乗っかると、背中の石碑にも紋章にも見える刻印、ステータスに神血（イコル）を媒介にして神聖文字（ヒエログリフ）を刻んでいく。そうすることで様々な能力、可能性を明確な事象として発現させる。

「うん順調だね！欲を言えばもう少し耐久を上げたいね。」

「ただで殴られるのはちょっと嫌ですけど、考えないといけないですね。」

「確かに僕の大事なキリト君の顔がアザで真っ青になられても困るしな！はい、出来たよ！今紙に写すから。」

普通は神様たちが使う神聖文字は読めない。
一部その言葉を教養で身につけている人を除けば。
なので、紙に写す時は人間が使う共通語を使っている。

キリト・クラネル
Ｌｖ．１
力：Ｈ１３５→Ｈ１４０
耐久：ｉ３５
器用：Ｈ１１０→Ｈ１８６
敏捷：Ｈ１６０→Ｈ１９２
魔力：ｉ０
片手剣：Ｈ１０５→Ｈ１１０《魔法》【】
《スキル》
【剣芸（ソード・アート）】
・武器に応じた剣技を発動できる
・各々の技の熟練度によって威力が増す
・使用武器のアビリティが追加され、熟練度によって使用可能な技が増える

これが俺のステータス。
基本アビリティは、『力』『耐久』『器用』『敏捷』『魔力』の五つで、更にＳから、Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｄ、Ｅ、Ｆ、Ｇ、Ｈ、ｉの十段階で能力の高低が示される。
ｉにあたる熟練度数字は０～９９となり、１００～１９９がＨとな

る。
ちなみに９９９が上限値で、その分野の能力を使用すればそれに応じて熟練度は上昇する。しかし、アビリティ評価Ｓに近づくにつれ伸びは悪くなるらしい。

Ｌｖ．は強さを図る上で極めて重要だ。
これが一つ上がるだけで基本アビリティ補正以上の能力強化が行われる。
故にＬｖ．の差は能力の圧倒的差を意味しており、今回戦ったＬｖ．２のミノタウロスに傷もつけられなかったのもある意味当然ではあるのだ。

手に取ったキリトは歯痒かった。まだこの程度なのかと。
あの圧倒的な力を見た俺は心の中で焦りを隠せない。

（もっと…もっと速く強くならないと）

「神様…俺もっと強くなります。誰よりも速く。」

「なれるさ！君は誰よりも強くね。」

神様は俺の焦りを悟ったのか、明るく答えてくれた。
だが、彼女にはそう断言できる理由を持っている。
そう神へスティアだけは知る、彼自身も知らないスキル。

（君は強くなれるよ。他の誰よりもきっとね）

キリト・クラネル
《スキル》
【加速（アクセラレーション）】
・経験値の獲得値の上昇

・強さを求める想いが続く限り効果持続
・想いの丈により効果向上
・格上である相手との戦闘での効果向上

冒険者になってから半月。
彼の冒険はまだはじまったばかりだ。
だが、このスキルは彼の冒険をどのように彩りを与えるか。
ヘスティアにもまだわからない。
今はただ、見守っていこう。

# 第3話

「あら？おはようございます、キリトさん！今日はいつもより早いんですね？」

「おはようございます。今日からさらに気合いを入れていこうと思いまして。」

彼女の名前はシル・フローヴァ
1週間前偶然にも彼女の働く店の前で出会ってからこうして会話をするようになった。

「あんまり無茶しないでくださいよ。キリトさんは大事なお客さんなんですから。あっ、これいつものお弁当です！」

彼女に初めて出会った時もこうして弁当をもらい、お返しにお店に顔を出すという約束を取り付けられたのだ。
彼女はいい人なのだが、かなりしたたかな方ではある。まぁ、こうして出会ってから毎日お弁当をもらっているのだからお店の売り上げに貢献するのはやぶさかではない。

「いつもすいません！近いうちにまたお店に顔出しますよ。」

「その時はたくさん注文してくださいね！」

「ははは…そのためにもしっかり稼がないといけないですね。」

今の俺の顔はひきつってるに違いない。
いってらっしゃい、という言葉を受けて俺はダンジョンに足を向ける。

★☆★☆★☆

現在第1層

もしものために買っておいたスペアの片手剣を手にモンスターと戦う。

エイナさん曰く、冒険者は冒険してはいけないらしい。

一見矛盾している言葉だが、この言葉の意味は冒険者がダンジョンで死なない為のお約束みたいなものだ。例えば、モンスターを複数相手にとらないとか不用意に下の階層にいかないなどだ。

またキリトは半月前に冒険者になったばかりで、仲間もおらずソロでの活動しかできない。

普通ならパーティーを組んで複数の冒険者で挑むのがセオリーである。

基本的なパーティーは4～5人が理想だそうだ。

そしていま、

『『『ガアアアツ！』』』

「ちっ！」

鋭い牙や爪を武器にする犬頭のモンスターの名前はコボルト。始めは2匹を相手にしていたのだが、背後からまた2匹増えていき、計4匹になっている。

（これ以上増えると厄介だな…）

本来は一度引いて、1対1状況を作った方が安全ではある。

だが、そういった安全策が頭によぎる度にあの剣姫の強さが頭をよぎるのだ。

この程度で逃げてはならない。強くなりたいなら多少のリスクを冒す覚悟が必要なのだ。

キリトは右手の剣を真横に構える。
すると、刀身はきれいなブルーエフェクトに包まれ、右後方に引き絞られた剣は深い角度で一匹のコボルトの胸に撃ち込まれる。
撃ちきった剣は左腰で一瞬静止し、足を蹴って加速し左から右への二撃目を横一文字に薙ぎ払われた剣先が二匹目の敵に痛撃する。
そして、その勢いのまま時計回りに体を回転させ、再び左後方に剣を構える。
思い切り右足を蹴り飛ばし、再び左から右への残撃を三匹目に叩き込む。
そして四撃目、右からのフォアハンドによる斬撃により正方形を描く光を水平方向に拡散させつつ打ち出される。

水平四連撃技―《ホリゾンタル・スクエア》

四匹のコボルトは技をくらい斬られた部分からは血が飛びだし、その場に倒れた。
俺は剣を背中の鞘に戻してコボルト達の死体に足を運び胸を抉る。胸部の中心にある、小さく輝く紫紺の欠片を摘出する。
これが、『魔石』。

モンスターから獲得出来る魔力のこもった結晶という風に考えられている。
この結晶には不思議な力が宿っており、ギルドへ持ち帰れば換金が出来る。
これがダンジョンでの直接の稼ぎとなる。

俺達のホームにもあった『魔石灯』などが例に当てはまるが、『魔石』はヒューマンの技術で加工する貴重な資源で、ここ迷宮都市(オラリオ)はこの魔石製品を他の地域や国に輸出することど莫大な利益を上げていると聞く。
ここではギルドというのが正しいかもしれないが。

コボルトから取れたこの魔石は正確には『魔石の欠片』。
手の爪ほど程度で、1～4階層のモンスターから出るのはこんなものだ。
魔石のサイズが大きければ換金額も高くなる。

魔石を取り除くとコボルトの体は色素が抜け落ちたと思えば、全身が灰となり跡形も消えていく。
魔石はモンスター達の核であり、これを基盤として活動しているらしい。
故に魔石を狙うのはモンスターを倒す上で有効打になりうるのだ。
だけど、魔石が砕けると換金が出来ないのでそこは相手の強さ次第ではある。

最後の死体を処理すると全て灰になるはずの肉体の中で、右手の爪だけが残った。
これが『ドロップアイテム』。魔石を除去しても希に体の一部が残ることがあり、そのモンスターの中で異常発達した部位らしく、魔石を失ってもなお独立する力を備えている。
これも換金の対象になりうる。具体的には武器や防具の材料として使用され、ものによるが大半は魔石の欠片よりは高く換金出来る。

これらのアイテムを背に背負っている黒色のバックパックに放り込む。
本来なら魔石やドロップアイテムは『サポーター』と呼ばれる非戦闘員が回収し確保してくれるのだが、あいにく【ヘスティア・ファミリア】の構成員は今のところ俺一人なので割愛。アイテムを全て自分で背負っての戦闘はなかなか窮屈ではある。そろそろフリーのサポーターを雇うべきかと考えていると、再びモンスターが現れる。

「まずは第5層まで行って攻略してからだな」

再び剣を構えてモンスター迎えうつ。
今日のダンジョン攻略はまだ始まったばかりだ。

# 第４話

「どんどん注文してくださいね！キリトさん♪」

「はは…了解です。」

ダンジョンから帰ると、神様はどうやらバイト先で飲み会があるらしく出掛けていったので一週間振りにシルさんが働く酒場『豊穣の女主人』にやって来た。

この酒場は名前の通り店のスタッフはみんな女性だ。

ネコ耳を生やした獣人キャットピープルの少女や高貴なエルフなど様々な亜人（デミ・ヒューマン）の美女美少女で構成されている。

ちなみにドワーフの女将はのぞいてだが。

以前シルさんにこのお店について少しだけ話を聞いたところ、女将であるミアさんは昔冒険者だったらしいが、今は【ファミリア】からは半脱退状態らしく、神様の許しをもらって建てたらしい。

従業員は女性のみ受け付けと徹底しており、何でも訳ありな人を気前よく雇っているらしい。

ならシルさんも？

と、疑問に思ったのが顔に出たのか、「私は働く環境が良さそうだったので」と先に答えてくれた。

「このお店、冒険者さん達には人気あるんですよ。お給金もいいですし。」

「わかります。毎日人がいないときなんてないですもんね。それにみんなかわいいですから。」

「ふふ…キリトさん？あんまり他の子に色目使ってはダメですよ。」

俺がいつ色目を使ったのかと問いたいところだが、生憎彼女の笑みが怖くて苦笑いしかできなかった。

そんなシルさんとのやり取りをしていると、どっと十数人規模の団体が酒場に入店してきた。

予約していたのか俺の位置とちょうど対角線上の空いた一角に案内される。

その一団は種族が全く統一されておらず、しかし全員が全員、生半可じゃない実力を感じさせた。

（あっ…）

その中にいたのは先日出会った彼女。

アイズ・ヴァレンシュタイン。

つまり、この団体は【ロキ・ファミリア】であるということだ。

それに周囲の客もざわめきを広げていく。

「ここって【ロキ・ファミリア】の方も利用するんですね。」

「【ロキ・ファミリア】さんはうちのお得意さんなんです。彼等の主神であるロキ様に、私達のお店がいたく気に入れられてしまって。」

「よっしゃあ、ダンジョン遠征みんなごくろうさん！今日は宴や！飲めぇ！」

そのロキ様が乾杯の音頭をとったことで、団員達が騒ぎ出した。

【ロキ・ファミリア】が宴会一色の雰囲気になると、他の客も気にせず自分たちの酒をあおり始める。

ロキファミリアが酒を飲みはじめて盛り上がりが最高までに高まった時にある獣人の狼男が上機嫌に話始めた。

「そういやアイズ！お前あの時の話を聞かせてやれよ！」

「あの話…？」

「あれだよ。帰る途中で何匹が逃したミノタウロス！最後の一匹をお前が５階層で始末しただろ?!」

その話が耳に届いた時、俺は平静さを保つことが難しかった。

「ミノタウロスって１７階層で襲いかかってきて返り討ちにしたら、集団であっという間に逃走したやつ？」

「それそれ！奇跡みてぇにどんどん上層に上がっていきやがってよ！俺達が呆気にとられて追いかけたやつ！こっちは遠征の帰りの途中で疲れてんのに面倒だったよな～」

今の話だと深層まで遠征していったロキ・ファミリアが帰路のの際に遭遇したのがミノタウロスで、仕留め損ねが５層までやってきたらしい。

そしてそこにいたのが…

「それでよ、いたんだよ。いかにも駆け出しで女みてぇな細っちい野郎が！」

俺のことだ。

「いやぁ、腹を抱えちまったよ！そいつ初期の装備でミノタウロスに切りかかってよぉ、そしたら突き刺さるどころかぽっきり剣先から折れちまって、あんときの奴の顔はウケたぜ！」

悔しかった。

何も言い返せない。

力がない自分に。

「ふむ？それで、その冒険者はどうしたん？」

「アイズが間一髪でミノタウロスをやったんだよ、なっ？」

「…」

俺は彼女が一言も話さないので目だけ動かして彼女を見ると、僅かに眉をひそめていた。

「それでそいつ、あろうことかアイズに話しかけて強くなるにはどうしたらだの聞いてやがったな～。まったく身のほどしれって感じだよなぁ？レベルが違いすぎるっての。」

獣人の青年はさも当たり前のように話す。

確かに、ファミリアが違うのだしレベルも向こうが遥かに高い。

だが、そこまで言われる筋合いはないと感じた。

強くなる。

一日でも早く。

彼女に追い付き、追い抜く。

「キリトさん？」

「ごめんなさい、シルさん。今日は帰ります。お代はここに置いていきますから。」

「えっ…？えっ、ちょっとキリトさん？」

俺は後ろからの声を聞かずに、店を出た。

これからだ。
もっと早く、速く。

☆★☆★

キリトが店を出た後も彼らの話は続いていた。

「しかしまぁ、久々に駆け出しのやつみたが弱いのなんのって。情けねぇたらないぜ。」
周りのメンバーもこれには同意できずに微妙な顔をしていた。
「弱いだけの雑魚が下の階層に降りてくるなよな。大人しく1層の雑魚と雑魚同士なかよくやってればいいのによぉ。」

アイズは先ほどよりも余計に眉をひそめていた。
そして、彼女の表情を察知したエルフが彼を責める。

「いい加減にしろ、ベート。ミノタウロスを逃したのは我々の不手際だ。巻き込んだ少年に謝罪することはあれ、酒の肴にする権利はない。」

ベートと呼ばれた獣人はなおも悪びれた態度はなく暴言を吐く。

「流石エルフ様、綺麗事並べてお偉いこって。でもよ、そんな救えねぇやつを擁護してなんになるってんだ？それはてめぇの失敗を誤魔化すための自己満だろ？雑魚に雑魚といって何が悪いんだよ？」
「君だって、はじめは弱かっただろう？」

「あぁん？誰だよてめえ？」

彼らの会話に突然入ってきたこの男。

顔や種族、体格などは青いローブとフードでわからない。

「彼の友人さ、昔のね。彼は僕の剣の師匠でもある。」

「なんだただの雑魚かよ。雑魚に用はねぇ、失せろよ。」

彼はその言葉に「ふん」と鼻で笑うと、ベートは勘にさわったのか、

「てめぇ、今鼻で笑いやがったな？」

「ごめんごめん。でも、そうだね…少なくとも君よりは強いかな？」

「調子に乗りやがって！」

彼の言葉にキレて飛び掛かるベート。

並の冒険者なら目で追うことすら困難なスピードだ。

ロキ・ファミリアの団員もベートの力を知っている。

そう、だからあり得ないと思ったのだ。

ベートが地面に倒れていたことに。

「なっ…なんだよ、てめぇ一体なにもんだ？」

彼はあのベートの突進をいとも容易く地面に叩き伏せたのだ。

Ｌｖ．５である彼がやられたのだ周りもざわつき始めた。

彼は何者なのかと。

「あなたは一体何者なのですか？」

先ほどのエルフが彼に訪ねる。

彼はベートから離れてゆっくりとした歩調で出口に向かいながら

質問に答えた。

「僕のことは青《ブルー》とでも呼んでよ。それと、これだけは言っておくよ。」

ブルーと名乗った彼はドアに手をかけながら話した。

「彼を、《黒の剣士》を甘く見ない方がいいよ。彼ならすぐに上がってくるよ。それもものすごいスピードでね。その時、足元をすくわれないように気をつけて。それじゃあ。」

笑ったような明るい声で忠告をしたあと、彼は店を出た。それから、彼は何者なのか不審感が拭えなかったが、とりあえずベートを絞めようとエルフと彼と仲の悪いアマゾネス姉妹がベートを店の前にロープで縛って吊し上げたのだ。

# 第5話

「どうしよう…キリト君とうとう帰ってこなかったよ…まさか彼の身に何かあったんじゃ…」

昨夜バイトの飲み会に参加して、キリトとは別々に夕飯を取ることにしたのだがあのあとから彼はホームに帰っていないらしい。

彼の身に何かあったのではないかと嫌な想像しか出来なくなってきており、いよいよ自分がダンジョンに行って探してくるしかない、とそこまで思考が進んだ時、ホームのドアがゆっくりと開いた。

「ただいま帰りました。」

そこにいたのはぼろぼろになったキリトだった。

「キリト君…何があったんだい!?」

「実は昨日の夜にまたダンジョンに潜ってまして…」

「どうしてそんなことを?稼ぎやステータスだって順調じゃないか。」

「昨日酒場でちょっと…すいません、話は後でいいですか?もうくたくたで…」

「えっ…あっ、うん。」

「すいません、おやすみなさい神様。」

言い終わる前に既にベッドに倒れ込んでいた。

彼をよく見ると一応シャワーを浴びてきたようだが、ギルドからの装備品である防具や服、剣も傷みきっていた。

さらに服が破れた部分からは痛々しい傷が見えた。

「ちょっと！キリト君!?傷の手当てしないと！」

「……」

どうやらホントに寝落ちしたらしい。

ヘスティアは棚から救急箱を取り出して、せめて見える傷だけでもと治療を始めた。

「あんまり心配かけさせないでくれよ…君は僕にとってかけがえのない家族なんだから。」

★☆★☆

「それで、何があったか教えてもらおうか？」

あれからキリトが起きてからすぐにヘスティアは何があったのかを問い詰めた。

「いや、その、実は…」

☆★☆★

俺は酒場から出たあとに一度ホームに戻って装備を整えてからダンジョンに向かった。

ドロップアイテムなどは一切取らずにひたすらに先へ進んだのだ。

その結果…

「はぁ…はぁ…ん？ここどこだ？」

いつの間にやら随分と奥に来てしまったらしい。

見慣れない階層。
４階層までは頻繁に出入りしていたので、少なくとも５階層より下になる。

すると、いきなりダンジョンの壁から何か飛び出してきたのだ。
それはモンスターだった。
キリトは初めてダンジョンからモンスターが生まれる瞬間を見て、ダンジョンの秘密に少しだが触れた気がした。

『ギャアアアアアアア！』

「っ！こいつは…」

ウォーシャドウ
６階層から現れるモンスターで、特徴は黒いボディとその両腕の部分が刃物になっていることだ。
今までのモンスターと比べてトリッキーな動きに加えて、能力が一段上がっている。
駆け出し冒険者が最初に迎える山場である。

キリトは今まで５階層の入口付近までしか攻略していない。
正直いって能力的に少し不安がある。

二体か…
そういえばエイナさんに散々一対一を心掛けろって言われてたのに、最近は守ってないな。

心の中で謝りつつも、今はこの場を切り抜けなければならない。
気合を入れ直して剣を構える。

『ギャアアアアアアアアア！』

まず始めに仕掛けてきたウォーシャドウの攻撃を剣で弾く。
続けて追撃を加えようと踏み込もうとした時、
「っ！」
二体目がその間に割り込んできたために再び攻撃を防ぐために剣を振るう。
敏捷の面ではウォーシャドウとそう能力差はないが、二体というハンデがここにきて重くのしかかる。

思った以上にまずいな…
このまま攻撃を防いで少しずつ攻撃を加えていっても、あちらさんはそんな悠長に構える気はないみたいだな。

なぜなら、先ほどと同様にダンジョンの壁がうごめいている。
おそらく、次のモンスターが生まれようとしているのだ。
しかし、
「クソ！」
決定的なダメージを与えるための手数が足りない。
このままじゃジリ貧だ。
焦ったキリトが安易に攻撃を仕掛けた。
だが、ウォーシャドウに防がれて、大きく仰け反る。
そして二体目がキリトに襲いかかる。

能力的には若干上である敵の攻撃をこの無防備な状態で受ければ態勢を整えるのに時間がかかる。
下手したらこのまま押し切れらる。
時間がゆっくりになるのを感じる。
これが命がかかる瞬間。
あの時と同じだ。
あの時俺は何もできなかった。
大切な人を目の前にして。
このまま何も残さないでただ無駄に死ぬなんて、そんなことしたく

ない。
キリトは仰け反った身体を左足で支える。
そして剣を持たない左手を後方に持って、後ろにかかる力を利用して引き絞る。
「うおおおおおおおおおおおおお！」
その引き絞った左手を右足で大きく踏み込んでから前に突き出す。
『ガアアア！』
左手の攻撃をくらったウォーシャドウが後ろにいるもう一体のウォーシャドウの方に倒れこむ。
ー今だっ！
キリトは右手の剣を肩にかける。
剣の刀身赤い光のエフェクトに包まれ、力が溜まっていくような音が鳴り響く。
キリトはウォーシャドウに一気に詰め寄って剣を突き刺す。
片手剣重突進技《ヴォーパル・ストライク》
前回のミノタウロスとは違って、今度は二体重なっているウォーシャドウの身体を剣が貫通した。
『『ギヤアアアアアアアアアアアアアアアア！』』
その剣先がうまく魔石を捉えたのか、二体とも灰になって崩れ落ちた。
だが、さっきの絶叫が合図だったかのように、ダンジョンの壁から次々とウォーシャドウが生まれた。
今度は二体どころではない。
けれど、キリトは不敵にもこの状況で笑う。
さっきので左手での攻撃が有効なのはわかった。
今度は身体こうまく使って手数をもっと増やす！
勝つためなら、なんだって試してやる！
「行くぞ！」
★☆★☆★☆
「ってことまではギリギリ覚えてるんですけど、そこからはあまり…」

キリトがヘスティアにこれまでの経緯を話したのだが、ヘスティアは下を向いたまま動かない。
しばらくすると、彼女のツインテールがワナワナと揺れ始めたと思ったらいきなり顔を上げて、

「キリト君のバカー！」
「す、すいません！」
「ばかばか！死んじゃったらどうするんだよ！君がいなくなった僕生きていけないよ！」
ヘスティアは半分泣きながらキリトに抱きつき、ゆっくり諭すように話す。
「いいかい、今後こんな無茶なことはしないでくれよ。君が強くなりたいの知ってるし、そのためなら僕も全力で応援するし、サポートもする。でもね、死んだらそれまでなんだ。だから約束してほしい。なるべく無茶はしないでくれ。どんなことがあっても生きて帰ってきてくれ。冒険者に向かって飛んでもない約束を頼んでるはわかっている。でもね、僕を一人にしないで欲しい。君と僕はもう家族なんだから。」
「はい、約束します。どんなことがあっても神様を一人にはしません。」
それから二人は互いの想いを確認するかのように、しばらくその場に立ち尽くすのだった。

# 第６話

あれから二日が経った。
俺はこのあいだのような異常なスピードではないにしろ、順調にダンジョンの攻略をしていた。
現在、第４階層になる。
そこで『ダンジョン・リザード』というヤモリ型のモンスター二体と遭遇した。
だが、キリトはこの状況下で慌てたりはしなかった。

『ギヤアアアアアアアア』

まずは冷静に一体目の爪での攻撃を剣で弾く、そして二体目からの攻撃をひらりと躱して一体目に剣技を食らわせる。
Ｖ字に斬り刻む二連撃剣技、《バーチカル・アーク》
二連撃とも食らったモンスターは倒れる。
そこで、剣技の硬直をつくように再び二体目が攻撃を仕掛けようとしてくる。
それを左手の指を揃えると、左手が黄色く光りそれを前に突き出す。
新たに手に入れた、《発展アビリティ》内にある《体術》から《閃打》を繰り出す。
すっかり隙をついたと思ったリザードはその攻撃をモロにくらい怯む。
その隙に、キリトは新たに剣技を発動させモンスターを倒した。
強くなっているよな…
キリトはそう感じた。
まだ第４階層だが二体のモンスター相手にこれだけ余裕を持って戦えたのだ。
それに、ステータス値の上昇幅はキリトの自信にもなっていた。

☆★☆★☆★

あの日の夜。

「さあ、せっかくだからステータスの更新もしてしまおう！またいつキリト君が無茶するかわかんないしね～！」

ヘスティアからの含みのある言葉に苦笑いしながらも、「よろしくお願いします。」と返事をしてキリトは今着ている服を脱いでベットにうつ伏せに寝る。

ヘスティアはそのうつ伏せになっているキリトの腰あたりを跨いですわる。

そして、いつものように神血（イコル）を使ってステータスを神聖語（ヒエログリフ）で上書きしていく。

だが、鼻歌混じりに更新を行っていたヘスティアの手が急に止まる。

（おいおい…本当なのかい？この数値は？）

キリト・クラネル

Ｌｖ．１

力：Ｈ１４０→Ｇ２５８

耐久：Ｉ　３５→Ｈ１９８

器用：Ｈ１８６→Ｇ２３４

敏捷：Ｈ１９２→Ｇ２４２

魔力：０

片手剣：Ｈ１１０→Ｆ３３１

体術：Ｉ　０→Ｈ１５８

《魔法》【】

《スキル》

【剣芸（ソードアート）】

・武器に応じた剣技を発動できる

・各々の技の熟練度によって威力が増す

・使用武器のアビリティが追加され、熟練度によって使用可能な技が増える
【加速(アクセラレーション)】
・経験値の獲得値の上昇
・強さを求める想いが続く限り効果持続
・想いの丈により効果向上
・格上である相手との戦闘での効果向上

トータル８００以上の上昇。
ヘスティアはあまり子どもの成長について詳しくはないが、それでもこの成長のスピードがおかしいことはわかる。
これでは成長ではなく飛躍に近い。
ヘスティアは自分の手が止まっていることに気づいて慌てて作業を続ける。
「出来たよ。いま紙に写すから。」

ヘスティアはいつものようにスキル欄の加速(アクセラレーション)の部分書かずにキリトに渡す。

「ありがとうございます。」
そして今度は、共通語(コイネー)に訳された紙を受け取ったキリトが固まる番だった。
「これってホントですか？」
「いやね、僕も今度ばかりは本気で自分を疑ったんだが紛れもなく真実だ。」

「新しい《発展アビリティ》が出てる…。《体術》か。」
このアビリティはおそらく昨夜の戦闘での影響だろうな。
【剣芸(ソードアート)】というスキルから生まれたんだろう。
ヘスティアはそう予想した。
そこで思い切ってキリトに聞いてみることにした。

「前から気になっていたんだが、君は【剣芸(ソードアート)】というスキルを始めから身についてたんだけど、何か心辺りはあるのかい？」

尋ねられたキリトは少し考えてからハッキリと答えた。

「はい。おそらく俺が小さい頃の出来事が影響してるんだと思います。」

「そうか。その出来事については聞いていいのかな？」

前から彼はあまり過去を話したがらなかった。

なのでヘスティアは気を遣って聞いてもいいのか尋ねたのだが、

「そんな気にしないでください。神様とはもう家族ですからね。訊かれればちゃんと答えます。まぁ、今回のことはそんなに重い話ってわけではないですよ。」

キリトは笑ってはいるが、その実あまり気分良くはないように感じた。

神にとって子の感情はある程度読める。

おそらく【剣芸(ソードアート)】のスキルよりも、【加速(アクセラレーション)】のスキルに関しての話が彼のこの急成長の核心があるのだろう。

だが、その話を聞くにはもう少し後になりそうだ。

ヘスティアはそう感じながら、彼の話に耳を向けた。

「俺の故郷は小さい村だったんですけど、それなりに人はいたんです。特に子供は結構いて、よく近所の子と一緒に遊んでました。ただ、たびたびモンスターが村にやってきて畑や人を襲うことがありました。俺たちは始めチャンバラの感覚で木の棒を使って遊んでいたんですが、次第に歳が増えるにつれて大人に頼るだけでなく、自分達の身は自分で守らなければという考えが生まれました。そこで作ったのが、

《ソードスキル》なんです。と、言っても俺が英雄譚なんかのお話に出てくる英雄はこんな風に戦ってるんだろうなという想像から作った技で、当時のそれはひどく拙いものだったと思います。」

キリトは少し恥ずかしながらも、過去を懐かしんでるようにヘスティアは思えた。

そして納得した。

やはりスキルとはその人が持つ独自の能力が発現したものなのだろう。

ヘスティアは下界に下りてまだ日が浅いが子供達は日々変化していくことで強くなる。

そのように解釈し、同時に【加速（アクセラレーション）】というスキルが彼の冒険者としての才能が溢れているという確固たる証拠なのであり、覚悟なのだろうと考えた。

（これは僕も何かしてあげないといけないな）

急激に成長する彼の助けになりたい。

そうすることで、彼の安全にも繋がると信じてある決断をした。

「キリト君、今夜僕はある神の宴に参加してくるよ。もしかしたら、そのまましばらく友人のところで話をするから帰りは遅くなるかもしれないが、くれぐれも無茶をしないように！いいね？」

「わかりました。今後注意していきます。神様も宴楽しんできてください。」

★☆★☆★☆

あれから2日経ったけど、神様今頃なにしてるんだろう？

キリトはバックパックが魔石で一杯になったので換金するために地上に向かう。

そこである物を見た。

カゴに布をかぶせた物を冒険者が運んでいた。

一体なんだ？
気になってしばらく観察していると、あるカゴの布が取れた。
そこに中には、
「モンスター?!」
ダンジョンに現れるモンスターをカゴに入れて運んでいたのだ。
本来ダンジョン内のモンスターを地上に持ち出してはいけない。
それこそ街には冒険者意外の住人も住んでいるのだ。
もし、モンスターがカゴから出て街を襲ったらパニックになるに違いない。

なぜ彼らはモンスターを持ち出そうとしているんだ？
その答えは地上に出るとすぐにわかった。
ダンジョンの直上には『バベル』という構造物があり、そこには冒険者のために換金場やシャワールーム、食堂なんかがある。
そんなバベルの一階では、モンスターを入れているであろうカゴで溢れていた。
その中にギルドの人間がなにやらカゴの搬送先を指示しているようだった。
辺りを見回すとそこにはポスターが貼られており、見てみると『モンスターフィリア祭』という催しがあるらしく、内容は一流のテイマーがモンスターをテイムするところを鑑賞する祭りらしい。
確かに、あれだけの凶暴なモンスターを飼いならす様は圧巻かもしれない。
そこにはテイマーの名前が紹介されており、さっと目を通しているとある者の名前に目が止まった。
『シリカ・アヤノ』
シリカとは以前故郷で一緒に遊んでいた子の中の一人だ。
出会ったばかりはモンスターに怯えてばかりいたが、俺たちと一緒に剣での特訓を始めてからは次第に慣れていっていた。
以前から動物にはよく懐かれていたし、テイマーってのもうなずける。

「そっか、シリカも頑張っているんだな…」
そう思うと次第に胸の中の魂が燃えるような気持ちになった。
「俺もシリカに負けないよう頑張らないとな！」
キリトは一人決意を新たに、アイテムを換金するためその場から離れた。

# 第７話

「会場はここか…」
キリトに出かけるといった場所、それはとある神による宴に参加することだった。
厳密には違うが、まずは宴の豪華なディナーを楽しもうと、神ヘスティアは早速会場に入る。

（それにしても、ガネーシャの奴あいかわらず派手だな～）

今日の主催者である神、ガネーシャによるファミリアはこの迷宮都市オラリオでもかなり有名なファミリアだ。
しかも、神本人は目立ちたがりときている。
いや、ナルシストといったほうがいいだろう。
中に入ると、そこには今までの生活ではまずお目にかかれない食べ物が並んでいた。
キリトには悪いと感じたが、せっかくの機会だ。存分に食べようとテーブルに向かう。
周りの神とは明らかに食べるスピードが違って、ヘスティアがいるテーブルでは食べ物がみるみる減っていく。

「随分とはしゃいでいるわね、ヘスティア。少し…いや、かなりみっともないわよ。」

「ヘファイストス！」

赤髪で眼帯を付け、すらっとしたモデルのような身長で男装をしている彼女は『ヘファイストス』。
ヘスティアの天界からの親友で、下界に降りてきてしばらくやっかいになっていたが、何もしない彼女にさすがに思うところがあってか自身のファミリアのホームから追い出した。

しかし、それでも古びた教会をホームとして与え、バイトまで探してきくれたお人好しである。

「ファミリア作ってから半月ほどたったかしら？調子はどう？」

「まぁ、それなりに軌道には乗り始めてるよ。ここでもう少し人数がいれば…いや、でもそれだとキリト君との二人きりの時間が減っちゃうな。」

「あら、随分とその子がお気に入りなのね。」

「ああ！僕にはもったいないくらい素敵な子だよ！」

そんな二人で話していると、あたりがざわつき始めた。
よく見ると、入り口の辺りに人だかりができていた。
そこの中心には、

「あれはフレイヤね。さすが美の神ね。男神なんかもう腑抜けもいいとこよ。」

「僕は少し彼女が苦手だな」

「あらひどいわ、ヘスティア。でも私は貴方のそういうところ好きよ。」

「うわっ！いつの間に背後に?!」

ヘファイストスの会話で目を離してたためフレイヤが近づいていたことに気づかなかった。
それにしても女神から見ても、フレイヤは美しく目を奪われそうになる。
雪のような白い肌。身体の構造の黄金比はまるで自分のもである

かような完璧なプロポーション。
見るものを魅了し、子が見たらそれだけで顔をあからめてしまうだろう。

（キリト君には絶対近づけちゃいけないな。）

「いや、あまり気にしないで欲しい。君より苦手な奴は他にもいるし。」

「それはわいのことかいな？」

「げっ！ロキ！」

そこには朱色の髪と瞳をもつロキがいた。
神々の間では、ロリ巨乳のヘスティアと無乳のロキといつも比較されいて、それが影響しているのかどうかロキは貧乳であることを気にしており、巨乳のヘスティアとは何かと相性が悪い。
ヘスティアも毎度突っかかってくるロキを苦手としている。

「あら、ロキ。久しぶりね。聞いたわよ。最近のあなたのファミリアの活躍。」

「いやぁ、ファイたんのとこもすごいやん。それで相談なんやけど、今度の遠征でファイたんのところからの腕利きの鍛治師を同行させて欲しいねん。」

かわいい女の子や綺麗な女の子が好きなロキはよくファミリアの団員にセクハラをしたり、妙な愛称で呼んだりして困らせている。
今もファイたんとよばれるヘファイストスは微妙な顔をしながら会話を続ける。

「あら、いいわよ。私たちのファミリアも深層の素材が手に入れば嬉しいし。その話は今度ゆっくり話し合いましょう。」

「いやぁ、ほんまおおきにな！」

「それしても、ロキが会場にいたの気づかなかった。」

ヘスティアが何気なく言った言葉なのだが、ロキはかなり気にしていたのか

「そこの万年発情女のせいでわいの登場が薄れたんや！」

「心外だわ。節度は持ってるわよ。」

「それで？今日は何が目的なんや？」

「私が何か目的がないと宴に出てはいけないのかしら？」

「今までこういう宴には出てこなかったお前が、いきなり参加したのにはなんか裏があるって考えるのは当然やろ。」

「失礼ね。ただの暇つぶしよ。」

「ふふ。」とロキの質問を笑い流す。

その態度がロキにはどうも気に食わなかったが、これ以上は何もわからないだろうとわかり、標的をヘスティアに変える。

「それにしても、ドちび。なんや貧相な服装してるな？」

（うぜえええええええええええええ！）

いつもそうだ。
ロキとヘスティアは出会ってからそんなに長くはない（不老不死の神基準）。
それなのにロキはヘスティアと顔をあわせる度に煽ってくる。
理由は簡単だ。
ヘスティアにあって、ロキにはないものがある。

ヘスティアは怒りで顔を赤くしてロキに煽り返す。

「ふん！実に滑稽だな！僕を笑うためだけにそんな露出の多いドレスを着て、わざわざ自分の無乳（コンプレックス）を周りに見せつけてくるなんて！君には笑いのセンスがあるよ！いや、笑いじゃなくて穴を掘る才能かな？墓穴っていう穴のさ！」

赤くしていたヘスティアに続いてロキも煽られ返されたことによって顔を赤くする。

「少し黙れや！」

そして、我慢できずにロキはヘスティアの頬を両手でつまみ、引っ張る。

「ふぎゅうううううう」

この二人の神のやり取りはもはや神たちにとっては当たり前らしく、神々の口からは「もっとやれ！」というものがたくさんだ。
ロキが頬を引っ張り揺らすことで、ヘスティアの身体も揺れ、さらにそしてその豊かな双丘も揺れる。

「…ふん！今日はこの辺にしといたるわ！」

(((あ…折れたな。)))

周りの神からはその揺れる胸に耐えきれなかったのは見え見えだった。

のたうちまわるヘスティアに目もくれずにその場を離れようとするロキに、

「うー！今度僕の前に現れる時はその貧相な胸を僕に見せるんじゃないぞ！」

と、止めの一言。

「うっさいわ！ボケえええええええ！覚えとけよっ！」

そんな捨て台詞を吐いてロキは会場から出て行った。

騒ぎが収まると、野次に来ていた神たちもヘスティア達の元から離れていった。

「ホントに丸くなったわね、ロキ。」

「小物臭しかしないんだけど…。まぁ、でも確かに神々に殺し合いをけしかけていた頃よりは安心できるかしらね。」

ポツリと呟かれたフレイヤの言葉にヘファイストスは呆れつつも同意するのだった。

背後では未だにふらふらしているヘスティアの背中をヘファイストスが支えてやる。

そしてヘファイストスはフレイヤに再び顔を向けて尋ねる。

「そういえば、貴方とロキって付き合い長いんだっけ？」

「ええ。貴方達と同じくらいかしら。」
「私たちの場合は腐れ縁よ。」
と、苦笑いでヘファイストスは答える。
「ロキは子供達が大好きみたいだな。だから今みたいに変わったのかもしれない。」
「甚だ遺憾だけど、子供達が好ましいというのだけはロキに賛同してあげるよ。」
「へぇ、前までは『私のファミリアに入ってくれないなんて、子供たちは見る目がなーい』、なんて言ってたのに。貴方のファミリアに入ったキリトっていう子のおかげ？」
「ふふん！自慢の僕の子さ！」
「確か、黒い髪に黒い目をした東洋人みたいな子よね？あと、少し女の子みたいに中性的な顔立ちしてたかしら？それにしても、貴方がファミリアを作ったと言ってきた時はびっくりしたわ。」
「女の子っぽいとかそういうのあの子の前で言っちゃダメだよ！気にしてるんだから！」
「あらそうなの？」とヘファイストスが言っている横で、手に持ったグラスをコトンとテーブルに置く動きをみせる。
「それじゃあ、私も失礼させてもらうわ。」

「え？もう？フレイヤ貴方何か用事があったんじゃないの？」
「もういいのよ。聞きたいことは聞けたし。」
「貴方ここにきて誰かに尋ねるようなことしてないじゃない。」
パーティーの始めから一緒にいたヘファイストスは怪訝そうな顔を隠さない。
そんな彼女の態度には気にも留めずにヘスティアに今までとは違う笑みをみせる。
「それにここの男神は食べ飽きたもの。」
そんなとんでもない発言をしてフレイヤはこの場から離れていった。
残った二人は微妙な顔をお互いに見合った。
お互いに思うところがあったがそっと胸の奥にしまった。
「それで、貴方はどうするの？私はもう少しみんなの顔を見に回ろうと思っているのだけど、帰る？」
ヘファイストスがそう尋ねると、びくっと肩を揺らす。
ここでようやくヘスティアは自分の目的を思い出した。
「もし残るならどう？久しぶりに飲みにでもいかない？」
「あー…えっと…そのー…。」
急にシドロモドロになったヘスティアにヘファイストスは不思議に思う。
なにやら緊張しているらしく、うなじからは汗が見える。

「そのぉ…ヘファイストスに頼みたいことがあって…」

「……」

先ほどとは違って目を細め、軽蔑の視線を送る。

まるで汚物を見るかのような親友の視線に早くも前言撤回をしたくなったがキリトの顔を思い出し、それを思い止め胸を振るいい立たせる。

今度こそこの親友に愛想を尽かされるかもしれないなと、覚悟しながら目的遂行の為に決意を新たにする。

「はぁ～……。一応聞いてはあげるわ。私に何を頼みたいの。」

目の前に立つこの神、ヘファイストス。

天界では火の神と称されていた彼女が作った、【ヘファイストス・ファミリア】は、このオラリオにおいて唯一冒険者業での収入で運営されていない。

迷宮都市でダンジョンで生計を立てないという珍しいこのファミリアは、しかしこの都市に住んでいれば誰でも知っている大ファミリア。

多くの人材を抱え、育成し、何をも変えがたいブランドの一品を世に生み出すことで有名なファミリア。

そうだ、彼女のファミリアは『鍛治師』のファミリアだ。

ヘスティアはそんな大手のファミリアの長に向かって、大きな声で頼み込む。

「キリト君の…僕のファミリアの子に、武器を作って欲しいんだ！」

# 第8話

「いつまでそうしてるのよ…。」

「……」

あの神の宴から2日程経過した。
現在はヘファイストスのホームにある自室でヘスティアが地面に座って頭を下げている。
ここに来てからずっとこの姿勢のままだ。

「いい加減やめなさい。このままで居られるのは私にとって迷惑でしかないのよ。大体、その姿勢はなんなのよ?」

「タケから聞いた。これはドゲザといって、お願いをするときの最終奥義だって。」

「はぁ…余計なことを。何が貴方をそこまでさせるのよ。」

「キリト君はいま急激に成長している。その成長速度に装備のレベルが追いついていないんだ。このままじゃ、彼の成長を妨げることになってしまう。彼は近い将来必ず一級冒険者になれる才能を持っている。だから、僕は今の彼に何か出来ることをしてあげたいんだ。そのためならいくらでも頭を下げたり、恥をかく覚悟がある。」

あの下界から降りてきて、ダラダラとヘファイストスのホームで過ごしていた時からそこまで時間は経っていない。
それにもかかわらず、ヘスティアをここまで変える存在。
キリトとは一体どんな子なのか。
ヘファイストスは個人的に気になってきた。
それでも、それとこれとは別の問題なのだ。

ここで、武器を作る事は他の客に示しがつかない。

（やはり、ここは諦めてもらうしかないわね…）

「ヘスティ「ヘファイストス様、ちょっといいですか？」

ヘファイストスがヘスティアの願いを再度断ろうとした時、部屋のドアから声が響いた。

「ええ、入ってちょうだい。」

「失礼します。…って、どんな状況ですか？」

入ってきた人物はピンクの髪に、髪留めをしている。

服装は赤い色のメイドのようなかっこうだ。

顔にはそばかすが見える、しかしそれが愛嬌を感じさせる。

「私の知神が少しね…。それでリズ、なんの用かしら？」

リズと呼ばれた子は不審に思いながらも、ヘファイストスの方に顔を向け直す。

「店の売り上げの収支の計算が合わないんですよ。誰か間違えたんじゃないかと。それでどうするか困っていて…。」

「私が後で調べておくわ。わざわざ手間を取らせたわね。ご苦労様。」

「いえ、そんないいですよこれくらい。では失礼します。」

用が済んだ彼女は頭を下げてからもう一度ヘスティアを見てから、ドアに向かって歩き出す。

「頼む！キリト君に武器を作って下さい！」

「しつこいわよ。無理よ。私にも立場というものがあるの。それに、お代を返すあてはあるの？」

ガタッ！っとドアの方から音がした。
どうやら、リズという子が音の原因のようだ。
彼女は再び部屋に入ってきて、ヘスティアに尋ねた。

「今、キリトって言いましたか？それってもしかして、キリト・クラネルのことですか？」

「え?!ああ…そうだけど、どうして？」

いきなり詰め寄られたヘスティアはたじろぎながらも答える。
それで気付いたのか、彼女は距離を置いて自身の自己紹介をする。

「失礼しました！私は、リズベット・シノザキと言います。あいつとは、旧い友人でして。」

「もしかして、彼の故郷でよく遊んでいたっていう？」

「ええ、その一人です。」

ヘスティアはこんな偶然があるのかと思った。
しかし、彼女がこのファミリアにいるという事は鍛治師であるということ。
さらに、店の収支を確認できるほどの子だ。
腕もあるだろう。
ここに好機を逃したらダメだとヘスティアは悟る。

「そんな君に頼みがある！キリト君の武器を作ってはくれないか？」

「ちょっと待ちなさい！」

ここで先ほどまで黙っていたヘファイストスが話を遮る。

「うちの子まで巻きこまないでちょうだい。これは私と貴方の話でしょう？」

「ぐっ…そうだけど…」

確かにヘファイストスの言う通りなのだが、ここで引き下がるわけにはいかない。

彼のためならここでヘファイストスの子に頼み込むのは千載一遇のチャンスなのである。

ヘスティアがなんとか食い下がろうとすると、

「いいですよ。」

「へ？」

「ですから、あいつの為に武器を作ってもいいと言ってるんです。」

なんとリズベットからの思わぬ援護射撃にヘスティアは驚く。

ヘファイストスもこれには唖然とする。

「待ちなさい、リズ！そんなことしたら、顧客に対して示しがつかないわ！」

ヘファイストスはリズベットに武器の作製にやめるように促すが、彼女は首を横にふる。

そしてリズベットはヘファイストスの目をしっかりと見据えて話す。

「確かに店商売としてはいけないとは思います。ですが、私は決めていました。あいつがまた前を向いて歩き出した時、あいつの武器を作って戦ってもらうと。」

彼女たちは見つめ合う。
しばらくしてヘファイストスが痺れを切らして溜息をつく。
彼女が本気であることがわかったからだ。
子は神には嘘がつけない。
つけないのではなく、ついたことを神はわかるのだ。

「わかったわ。私がダメだと言っても、その様子じゃ勝手に作ってしまいそうだし。ならいっそ、私もその武器作成に立ち会うわ。」

「それじゃあ、武器を作ってくれるんだね？」

ヘスティアが顔を上げて、再度ヘファイストスに確認する。
ため息を一つ漏らしながらも、諦めたように苦笑いしながら、ヘファイストスは頷く。

「ただし、お代はキッチリ払ってもらうわ。何年かかってもね！」

「うぐっ！も、もちろんだとも！」

「そこは心配ないですよ。あいつならバンバン稼いで来ますから！それで私にどんどん貢いでもらわないとね！」

「ははっ…ハハハハハー…」

こうして、ヘスティアはキリトの武器を作ってもらうことに成功したのだ。

☆★☆★☆★

「さて、それでどんな素材で作るつもり？」

現在、ヘファイストスの工房にやってきて武器の製作に取り掛かろうとしている。

リズベットは自分の工房からなにか素材を持ってきていて、ヘファイストスは尋ねてみる。

「これは、私たちの故郷で何百年もその地に立っていた大樹、その長年に渡って周りの地面から栄養を吸収し成長を続けた超硬度の巨木『ギガスシダー』。それを2年前から少しづつ削って、この間やっと剣一本作れる程度まで削れたんです。」

「2年って、そんな樹がホントにあるのかい?!」

「Ｌｖ．３の貴方が2年かけてそれだけしか取れない樹って…とんでもないわね。それがホントならきっと素敵な剣になるわね。」

ヘスティアは信じられないというような顔をし、ヘファイストスは興味深そうにギガスシダーの欠片を眺めている。

リズベットもこの素材の採取の苦労を思い出したのか、苦い顔をしている。

「それじゃ早速…」

「ちょっと待ちなさい。」

作業を取り掛かろうとしようとするリズベットをヘファイストスが止める。
そして、ギガスシダーの欠片に向かって工房にある棚から取り出した宝石を掲げる。
するとその宝石が光りだし、ギガスシダーの欠片も光に同調する。
しばらくすると、光が弱まり宝石が突然消えた。
それに伴って、欠片の色が先ほどの漆黒から黒紫色に変化した。

「ヘファイストス様、これは一体…？」

「この素材の能力を制限したのよ。それをしないと、貴方の作る剣ではＬｖ．１の彼の力に合わない。だから、私が天界から持ってきた『呪縛の宝石』で力を抑えさせてもらったわ。」

「『呪縛の宝石』って…それじゃあ、剣はどうしたら元の力に戻るんですか？」

「簡単なことよ。ヘスティア、この欠片に神聖文字（ヒエログリフ）を刻んで頂戴。」

「え？でも、それがなにを意味するんだい？」

「神聖文字（ヒエログリフ）を刻むことでこの素材にもステータスが生じる。そして、経験値（エクセリア）を積むことでこの素材の本来の力が解放していくはずよ。それに伴って剣の色がより漆黒に近づいていくでしょうね。」

「なるほど、それはいい考えですねヘファイストス様！それならあいつもこの剣でずっと冒険できそうね！」

ヘスティアもそれに納得し、欠片に神聖文字（ヒエログリフ）を刻んでいく。
それに反応して、欠片も一時青白く光る。
これでこの欠片はヘスティアの眷属（ファミリア）でないと力が解放されないよ

うになった。

「あとはリズ、貴方の役目よ。最高の剣を作りなさい。貴方の想いを乗せてね♪」

「はい！…ってちょっとヘファイストス様！あいつはそんなじゃないですって！」

「はいはい、そういうことにしておいてあげるわ。ヘスティア、一度ここから出るわよ。」

「わかった。君、確かリズベットだったね？キリト君の武器頼んだよ！」

「任せてください！」

「それと、キリト君に色目使うんじゃないぞ！」

「ははは…もう突っ込むのも疲れたよ。」

こうして、キリトの武器作成依頼のミッションはクリアした。
ヘファイストスの部屋に戻ると、気が抜けたヘスティアはその場で倒れてそのまま寝てしまった。
ヘファイストスはやれやれと思いながらもソファーに運んで、毛布をかけてあげるのだった。

★☆★☆★☆

「出来た！」

「おお！」

出てきたのは黒紫色一色に染まった一本の片手剣。
リズベットが工房に篭ってから1日経ってようやく完成した。
やはり、あの硬さに苦戦したらしく途中ヘファイストスも加勢してようやく今朝方に完成した。
そのせいかヘファイストスは眠そうにしていたが、反対にリズベットは完成した喜びで今がテンションＭＡＸのようだ。
「さて、それじゃあこの剣に名前を付けないといけないわね。」
ヘファイストスがそう提案すると、
「僕とキリト君の愛の結晶ってことで、ラブ・ソードなんてどう？」
「駄作臭しかしないからやめてちょうだい。」
ヘファイストスはヘスティアがここにきてから何度目かわからないため息をつく。
そこにリズベットが話の間に入ってくる。ー
「名前は実は考えてるんですよ。」
「あら、用意がいいわね。聞かせてくれるかしら？」
「僕の採点はキビシイよ！」
「ヘスティアは黙ってなさい。」
リズベットは一度わざとらしくコホンと咳払いをして発表する。
「《夜空の剣》名前の由来はこのギガスシダーの色が私たちの故郷で見

た夜空と同じって理由です。まぁ、今はその色じゃないですけどいつかその色を取り戻すって意味も込めて。」

リズベットの答えを聞いても二人の反応がない。
不安になったリズベットは顔を赤くして何かごまかそうとしようとすると、

「いいじゃん！よし、それでいこう！」

「私もそれでいいと思うわ。」

「ほ、ほんとですか？よかったぁ～。」

この黒紫色の剣は《夜空の剣》と命名された。
そしてリズベット心の中で思うのだ。
（ホントは私の命名じゃないんだけどね…。あいつが考えた名前。キリトは気付くかな？）

ヘスティアはよっぽど嬉しいのか、さっきから夜空の剣の何度も何度もなでている。
顔には早くキリトに渡したくてウズウズしているようだ。
ヘファイストスはそれを悟ってかヘスティアに帰って早く手渡すように提案する。

「わかった！いろいろありがとう！それじゃ、またね！」

「さっき部屋で話したローンの返済の件忘れるんじゃないわよ。」

「うっ…わかってるよ～」

恨めしそうな声を出してヘスティアはこの場から去っていった。

リズベットもさすがに眠気がきたのかあくびをしながら後片付けをしていると、ヘファイストスから声がかかる。

「それにしても、キリトって子は一体どういう子なの？」

その質問をされたリズベットは一度固まって、考えた。

そして、笑いながらこう答える。

「なんかとんでもないことを平然とやってのける変人ですかね？」

そにリズベットの反応にヘファイストスもつられて笑うのだった。

# 第9話

今日はモンスターフィリアの日だ。
いつもより通りも賑わっているようだ。
俺は今日はどうしようか？

「にゃ？お前は！」

キリトが悩みながら道を歩いていると、いつの間にか『豊穣の女主人』の前まで来ていたらしい。
そこで猫の獣人であるウエイトレスに指を刺された。

「えっと…なにか？」

キリトが恐る恐る尋ねると、

「ちょうどよかったにゃ！シルがモンスターフィリア祭に出かけたんにゃけど、財布を忘れたのにゃ。そこでお前に財布を届けて欲しいにゃ！」

普段からお弁当を貰っている身としてこの願いは無下には出来ない。
それに、祭にも興味があり、今日はダンジョンにこもるのは休めという神からのお告げだと思い、獣人のウエイトレスからシルの財布を預かった。

「頼んだにゃ！」

「わかりました。しっかり届けます。」

キリトは向かう足の方向をダンジョンから、祭の会場に向けなおし

て小走りに移動を始めた。

折角だ、シリカのテイムも見てみようかな？

★☆★★☆

ここはとある通りの喫茶店。

そこに黒いフードを被った女性、もとい女神がいた。

「待たせたな。」

そこに来たのはアイズを連れたロキだった。

彼女はフレイヤをこに店に呼んでいたのだ。

「ふふ、そうでもないわ。今日は『剣姫』も一緒なのね。会えて光栄だわ。」

挨拶されたアイズは軽く会釈をして、ロキの後ろに立つ。

ロキはフレイヤの向かいの席に座ってからフレイヤがロキに尋ねる。

「それで何の用かしら？」

「お前、何企んでるんや？」

「なんのことかしら？」

「とぼけんなや！お前が何にも企みなしに神の宴なんかに出るわけないやろ？」

「…ふふ。伊達に長年付き合いをしているわけではないわね。そうよ、一人気になる子がいるわ。」

「どこのファミリアのもんや？」

「まだ弱いわ。でも、弱さの中に隠れる強さを私は感じている。あの純なる黒の奥には純白の輝きを放っている。それは打てば打つほど輝きを増していく。」

フレイヤがこれほどすんなり認めたことにも驚いてはいたが、これほど男に対して評価の言葉にしたことにロキは驚いていた。

それほど子とは一体どこのファミリアなのか。

「彼を見つけたのは本当に偶然だったわ。そういえば、あの日もこうしてカフェの窓から…」

話していたフレイヤの口が突然止まり、窓の方をジッと目つめていた。

ロキはその視線の先を追って見ると、そこには黒髪のヒューマンが走っていた。

もしや、あれがフレイヤの…

「急用を思い出したわ。これで失礼させてもらうわよ。」

そう口にして、フレイヤは店を後にした。

聞きたいことも聞けたし、どんな子かも遠目だが見ることができた。収穫はあっただろう。

それにこれからアイズとのデートがあると考えロキも店を出ようとアイズを促そうとすると、アイズもまた窓の外を眺めているのだ。

「ア、アイズたん？どうしたんや一体？」

「え…なんでもないです。」

「そうか?・ならええんやけど…」

どうにも腑に落ちないがそれよりもこれからのデートが大事。
そう考えて、ロキはアイズの手を取り店を後にした。
★☆★☆★☆
小さな身体によって大きく見える白い包みを持つロリ巨乳娘、ヘスティア。
見た目では分かりづらいが、天界の神である。
神は普段は抑えているが、少なからず神気というものを発しているのでその存在が神であることを認識することが出来る。
彼女が持つ白い包みに入っている黒紫の剣を一刻も早く手渡したく、普段では通らないような路地裏を通っていく。

(ふふふ!・これをあげれば、キリトくんとの仲も急接近しちゃって、もしかしたら…グフフ♪)
側から見たら気味の悪い笑みを浮かべながら、路地裏をすすんでいくとフードを深く被った人物とぶつかってしまった。
よく見ると、

「フレイヤじゃないか?!こんところで会うなんて奇遇だね!」

「ごきげんようヘスティア、大きな通りだとなかなか前に進めないのよ。」

美し過ぎるフレイヤの美貌はこうやってフードで顔を隠して、路地裏などを通らないとたちまち男の人だかりが出来てしまうのだ。
そのことを思い立ったヘスティアは少し想像してゲンナリする。

「美の神も大変なんだね…。あ、そうだ!・僕のファミリアの子見なかったかな?・真っ黒な髪に目をして、かわいい感じの顔立ちなんだけ

ど？」

「……」

フレイヤは左手を右手ににひじに手をかけ、右手で頬をあてると少し考えているような雰囲気を出す。

少しの間があって、先ほどの問いに答える。

「…そういえば、見たかもしれないわ。」

「ホントかい?!どっちに行ったかわかるかな？」

「多分モンスターフィリア祭の会場の方だったかしら？今ならまだ間に合うんじゃないんかしら？」

「ありがとうフレイヤ！それでは失礼するよ！」

ヘスティアは大きく手を振って大きな通りに出るために走り出す。

それを後ろからヒラヒラと手を振りながら薄っすらと口角を釣り上げる。

★☆★☆★☆

大きな通りに出たヘスティアは馬車で送ってもらい、気前よくチップをあげて料金を払うと辺りを見回しながら歩く。

そこには見慣れた後ろ姿を見つけた。

ヘスティアはゆっくり背後に忍び寄り、背中に飛びつく。

「うお！な、なんだ？」

「ははは！どうだいびっくりしたかい？」

「その声はもしかして神様ですか?!」

驚いたキリトは後ろを振り向く。

そこには満面の笑みを見せているヘスティアがいた。

「どうだい驚いたかい?」

「それはもう、驚きましたよ。それで、神様は何をしていたんですか?」

「ん?気になるかい?」

「3日も家を空ければ心配にもなりますよ。」

(キ、キリト君が心配してくれてる!こ、これは今がチャンスじゃないのか?今、この剣を彼に…)

ここまで考えたヘスティアはキリトに全てを教えようとした。

だが、寸前のところで思いとどまった。

「ふふふ!内緒だよ~♪また後でゆっくり話してあげる。それより、今はこのモンスターフィリアという催しを一緒に楽しもう!」

ヘスティアはキリトの手を繋いで歩き出す。

「か、神様!ちょっと?!」

そうだ。

今ここで剣を渡してしまっては、ダンジョンに行って試したいなんて彼は言いかねない。

ここまで来るのにそれなりに頑張ったのだし、これくらいのご褒美

あってもいいよね？
ヘスティアはそう考え、これから始まるデートに心を踊らせるのだった。

「あの、神様？実は俺頼みごとを受けていて、人探しをしているんです。」

「そうか。それなら、店を回りながら探せばいいんじゃないかな？うん、それが一番だよ！」

この調子だと神様に付き合わないと機嫌を損ねてしまうだろう。
シルさんごめん。と、心に中で合唱をして、どうせなら楽しもうと心を切り替える。

「はい、アーン！」

いつに間に買ったのか、ヘスティアの手にはクレープがあった。
それをキリトに差し出す。

「うえ、あ、アーン？」

「おいしい？」

「はい、おいしいです。ちょっと待ってくださいね。」

キリトも売店に並んで、ヘスティアとは違う味のクレープ買ってくるとさっきと同じことをヘスティアにする。

「うーん！おいしい！色んな意味で！」

「へ？どういう意味です？」

この後もしばらく売店巡りは続いた。

★☆★☆★☆★

「よっ！シリカ久しぶり！」

「あれ？リズさん！どうしたんですか急に？」

ここはモンスターフィリアに参加する【ガネーシャ・ファミリア】の女性控え室。

リズベットはシリカとの親交があるため、ガネーシャ・ファミリアの女性メンバーとも顔見知りでこうして控え室に挨拶に来る程度は許可をもらえれば可能なのだ。

「あんたに耳寄りな情報があるのよ。」

リズベットは気持ち悪い笑みを見せる。

こういう時の彼女にいい思い出がないシリカはジト目で身構える。

「へー…。一体なんです？」

「今オラリオにキリトが来てるのよ！」

それを聞いたシリカは鳩が豆鉄砲を食ったように固まった。

口をパクパクさせながら、なんとか声を出す。

「ほ、ホントですか?!キリトさんがこのオラリオに?!今どこに?!リズさんはもうあったんですか?!」

「ちょっと、落ち着きなさいよ！」

興奮状態のシリカをなだめる。
そして、一回咳払いをして仕切り直す。
「私も実は直接はまだ会ってないのよ。ただ、この前あいつのファミリアの神様がうちのファミリアに来てね。武器を作って欲しいって頼みに来た時知ったのよ。」
「そうなんですか…」
「なに？やっぱり会いたい？愛しのキ・リ・トに？」
「べ、別に愛しの人とかじゃないですよ！」
顔を真っ赤にして否定するシリカ。
これを見るのがリズベットの密かな楽しみである。
「あらら、顔真っ赤にして～！もしかしたら、今日のモンスターフィリア見に来るかもね～♪」
「もう！からかわないで下さい！」
シリカは頬膨らませてそっぽ向く。
リズベットは両手を頬に当てて、顔を正面に向かせる。
「ごめんごめん！そんな拗ねないでよ！今日はその報告抜きで応援にも来たんだからさ！」
「うーん、うん。」
どうにも憎めないリズベットのこの性格。
いつもこうして流されてしまうのを何度もやめようと決意するの

だが、うまくいかない。

「今度、シノンとユウキも誘って食事にでも行こうか！積もる話もあるだろうしね！それじゃあ、今日頑張ってね！」

そう言い残して、リズベットは控え室を後にした。

「キリトさん…戻ってきたんだ！」

手を胸に当てて、昔を思い出す。

いつかまたお話できることを夢見て、今日の催しの準備に取り掛かるのだった。

# 第１０話

「神様、そろそろ人を探さないと。その人に財布預かっていて、ないと困るものだし。」

「むぅ…仕方ないな。」

店を回ってからは１０分程度経過している。

一応店を回りながらもキリトは辺りを見渡して探してはいるのだが、未だ発見できない。

そろそろ探すことに専念すべきだと考えてヘスティアに提案してみたのだが、やはり少し機嫌が悪くなってきている。

「見つけたらまた回りましょう！今日はダンジョンに行く予定はないので。」

「ホントかい？よし、探そう！すぐ探そう！さっさと見つけてデートの続きだ！」

「え？デートって？って神様！一人でどんどん進まないで下さい！」

移動速度が上がったヘスティアについて行きながらシルを探す。

なかなかいっぺんにやることが多くてほとほと困る。

しばらく歩くと、そこは今日のメインイベントであるモンスターのテイム行う会場の付近に来ていた。

そこにはギルドの設営場所があり、中にはエイナの姿があった。

「エイナさん！こんにちは！」

「あら、キリト君！こんにちは。今日はモンスターフィリアを見に？」

「実は人を探しに来ていて。どこかに財布で困っている人見ませんでしたか？」

「さすがにそれはわからないかな？」

「ですよね。」

我ながら無茶な質問をしたものだ。

エイナさんも苦笑いしてるし、悪いことしたな。

キリトは反省しつつも、いよいよ手詰まりな感じになってきていた。

もしかしたら行き違いで豊穣の女主人に戻っているかもしれない。

ヘスティアはエイナに何か話しているようだったが何を話しているのかはわからない。

切りの良さそうなところでヘスティアに声をかけて一度豊穣の女主人に向かおうと促す。

ヘスティアもそれに同意して道を引き返す。

「さっきエイナさんと何を話していたんですか？」

「女の秘密ってやつだよ。」

「はぁー…」

どうやら教えるつもりはないということだけはわかったので、これ以上追求することはしなかった。

★☆★☆★☆★☆

エイナはモンスターフィリアでの運営で会場の運営で働いていると自分が担当しているキリトとその神ヘスティアに出会った。
キリトと少し話すと、続いてヘスティアに話しかけられた。

「君はギルドの者か。キリト君とはどういう関係だい？」

「初めまして、神ヘスティア。私はキリト君のアドバイザーをしております、エイナと申します。」

「そうか、いつもウチのキリト君がお世話になっているよ！」

「いえいえ、そんな。」

こうして彼の神様に会うのは初めてだ。
なんとも可愛らしい神様で優しそうである。
彼の神様が彼女でよかったと思っていると、

「ところで、君は彼に色目を使っていないかね？」

「へ？」

いきなりぶっつけの質問に面食らってしまったエイナ。

「どうなんだい？」

しかも、それを大真面目に質問されているので答えないわけにはいかない。

「えっと…公私の分別はしているつもりです。」

「君のその言葉を信用したからね。」

ヘスティアはエイナの肩に手を置いてウンウン頷いている。
どうやら納得してもらったみたいだ。
「神様！そろそろ行きましょう！エイナさん、またギルドでお会いしましょう。」
「そうだね！行こうかキリト君！それじゃあ君、今後もよろしく頼むよ。」
「はい！」
ヘスティア達が離れていったあと、ふと今の会話を振り返ってみると
（あれ？もしかしてさっきのって私釘刺されてたの？）
彼もまた大変だなぁなんて呑気に考える。
大体彼と自分がそんなことあるわけがない。
あるわけがないと考えるのだが、かなりの頻度で彼のことを思っていることに気づく。
（違う違う！あの子がしょっちゅう危ないことやっているから、心配している時間が多いだけ！それだけ！）
首をぶんぶん横に振って考えをやめたとき、同僚が隣に来て話しかけられた。
「さっきのってエイナが担当してお気に入りの冒険者だよね？結構可愛い顔してるんだ！」

「こーら！からかうのはやめなさい！ほら、さっさと仕事に戻る！」

「はーい。」

どうにもまだからかい足りなさそうな顔をしている同僚だが、こちらとしては付き合うつもりは毛頭ない。

仕事に戻ろうとすると、

「大変だ！カゴに収容していた魔物が脱走した！」

「え？どういうことですか？ガネーシャ・ファミリアの人たちが管理しているはずじゃ…」

「何者かによって意識を奪われていたんだ！」

どうやら、何者かの犯行であるらしい。

でも、いったい誰が？

なんて今はそんなことを考えている余裕はない。

至急ガネーシャ・ファミリアの冒険者に事態の収拾を依頼しないと…。

だが、今モンスターフィリアで活動している者が多いため事態の収拾に当たれる人が少ない。

「なんや？なんかトラブルかなんかか？」

話しかけてきたのは神であるロキ。

そして後ろには剣姫アイズもいた。

「神、ロキ様！いえ…どうやらモンスターフィリアで扱うモンスターが逃げ出してしまいました。」

事態の状況を伝えると、いつも薄目である彼女が一瞬目を見開いた。
なにやらこの事件について知っているのかもしれない。
「ロキ様、失礼ですが事態の収拾に力を貸していただけないでしょうか？」
「おい、エイナ！それは…」
「それはギルドからの正式なクエストってことでええんかな？」
「そう捉えてもらって構いません。責任は私が取ります。」
今は事態の収拾が第一。
その後の事はなんとかなるだろう。
「わかった。そのクエストをロキ・ファミリアが引き受けた。アイズ、いけるな？」
「はい。これから現場に向かいます。」
剣姫がいれば大方のモンスターは倒せるはず。
だが、どうにも嫌な予感が消えない。
それは、先ほど彼に会ったからかもしれない。
願わくば何も起こらないことを祈るしかエイナに出来ることはなかった。
☆★☆★☆★☆★
「なんだか辺りが騒がしいですね。」

「祭りなんだから騒がしいのは当然じゃないか。」
「それとは少し違う騒がしさを感じるんです…。」
エイナと別れてからさほど時間は経ってはいないが、周りの様子がどうにもおかしい。
気になって少し見回してみるとそこには、
『ガアアアアアアアアアアアア！』
「なっ?!シルバーバック?なんでこんなところに?」
白い体毛に包まれ、ゴリラに似ているがそれよりも一層凶暴で爪なども凶悪な形状をしている。
奴は本来１１層レベルのモンスターでミノタウロスなどと同様キリトにとって格上の敵だ。
「神様！今すぐここから離れます！」
そう口にした瞬間、シルバーバックはこちらに狙いを付けたように向かってきた。
「危ない！」
キリトがヘスティアを横に押して庇おうとする。
だが、シルバーバックはキリトではなくヘスティアの方に向かっていく。
「狙いは神様か?」
キリトはすぐさま走り出して、シルバーバックの横腹にタックルを

する。
それで吹っ飛ぶことはなかったが、バランスを崩すことに成功した。
そして、神様の手をとって走り出す。
それをシルバーバックは追いかけてくる。
「神様、あのモンスターになんかしたんですか?!」
「知らないよ!初対面なはずだけど!」
正直今の能力値では勝てる見込みは低い。
敏捷はほぼ同等ではあるだろうが、力は足りない。
ヘスティアを連れているこの状況では逃げるしか彼女を守る手はない。
「おいおい!キリト君?!ここは一度入ったら二度と出れないともっぱらの噂の迷宮住宅街じゃないか?」
「そうですね!ここから離れて…ってうわっ!」
住宅街の前で足踏みしていると、既にシルバーバックが背後に接近していた。
もはや迷っている場合じゃない。
「神様いきますよ!」
「うわああ!もうどうにでもなれ!」
終わりの見えない逃亡劇が始まる。
この危機をどう乗り越えるか。

★☆★☆★☆★☆

その状況を遠目から眺めている神がいた。

「ごめんなさいねヘスティア。でも、どうしても見たいのよ。彼の輝きを…彼の勇姿をね。」

「なんであんな真似したんだ？」

その神の近くには青いローブを着た男もまた眺めながら神に話しかける。

「ふふふ。貴方も見たいでしょ？彼の戦ってるところ。」

「あんな程度じゃ、あいつの力はわからないよ。」

「あら？ふふふ、ますます楽しみだわ～。」

まるで新しく玩具を買ってもらった子供のようだ。

こんな神に気に入られてしまった旧友を気にかけながらも、この出来事でまた一つ成長するであろう彼に対して自分も楽しみを感じていないわけではない。

今はただ、彼の成長を見守ろう。

# 第11話

『ガウ！』

『ここでテイム成功！シリカさん見事でした！さすがはテイマーの中でもトップクラスの実力者です！』

「応援ありがとうございました！」

シリカがモンスターのテイムに成功したことで周りの観客が大いに沸く。

シリカは駆け出しの頃からこの祭りに参加していたが既にその頃から人気はあった。

その可愛らしい容姿からモンスターを手懐ける様はどんなに怖いモンスターでも自然と恐怖を感じなくなるというのが客から好評だったらしい。

「ふぅ～…」

（キリトさん…わたしの出番見てくれたかな？）

ふと、そんな考えが浮かんで顔が自然と赤くなり首を振る。

「私ったら、すぐキリトさんのこと！でもでも、今日この会場には来ているみたいだし可能性がないとは言えないわけで…。うう…もっとかわいい衣装にすればよかったかな？それとももっとセクシーな…」

「なにあんた一人でブツブツ言ってるのよ？」

「はうううううううう！」

控え室には自分一人しかいないと思っていたシリカは突然話しかけられて飛び跳ねる。
ゆっくり振り返るとそこにいたのは先ほどひやかし（応援）に来たリズベットだった。
「もう！リズさん！驚かさないでください！」
シリカは顔を真っ赤にして抗議する。
どうせまたからかってくるのだろうと身構えていると、
「そんなことは今はどうでもいいわ！それよりも、祭りで使うモンスターが檻から抜け出したらしいわ！」
「え？」
突然の報せに頭が追いつかないシリカ。
リズベットは追いつくのを待つつもりはなくさらに話を進める。
「大半はあんたのファミリアとロキ・ファミリアの剣姫が倒したらしいわ。けど、一体だけ取り逃がしたらしい。」
ほとんどが倒されたと聞いて少しは冷静さを取り戻したシリカは今の話ぶりだとさほど被害は少ないと判断し、これからリズベットが提案してくるであろうことを先に口にした。
「なら、一刻もその逃げたモンスターを追って倒しましょう！リズさんも手伝ってくれますか？」
「いや、それが事はどうも単純じゃないみたいなのよ。」
「どういうことですか？」

「なんでもそのモンスターは背が小さくてツインテールで胸が大きい神様と黒髪の冒険者を追いかけてるって話なのよ。」

「それがどうかしたんですか？」

そんな被害者の明確な情報があるならなおさら早く助けなければならないのに。

そして、若干その神様が自分の特徴と似ていて、なおかつ一部分が大きく異なることに妬みを感じてしまっている。

「キリトの主神であるヘスティア様もまさにその特徴なのよ。加えて、黒髪の冒険者なんてこのオラリオにはそうそういない。」

「じゃあ、もしかして…」

「そう、キリトが狙われてる可能性が高い。」

それを聞いたシリカは今度こそ思考がストップした。

★☆★☆★☆★☆★

少しずつだが追いつかれている。

理由はわかっている。

ヘスティアを抱えて逃走しているからだ。

逃げ始めてから少し経つとヘスティアは徐々にペースが落ち始めたのでキリトが彼女を抱えて逃げることにした。

結果、同じ敏捷であった両者に差がほんの少し生まれた。

このままじゃ逃げきれない！

どうすれば…

「キリト君?」

自分の腕の中で心配そうに見上げてくるヘスティアの目をじっと見つめるキリト。

そこで決心がつき、ヘスティアに話しかける。

「神様、このままだと追いつかれるのは時間の問題です。どうしても戦闘は避けられないでしょう。だから、神様は先に逃げてください。」

「君はどうするんだい?!」

「俺は戦います。」

「そんな無茶だ!一緒に逃げよう!どこまでも!」

「狙いは神様です。俺が足止めしている間に奴が追いつけないところまで逃げ切れば俺も逃げることができます。だから…」

キリトの決意がひしひしと伝わるヘスティアはどうにかしてこの戦況を変えられないか考える。

「そうだ!あれを使えば!」

「何を使うんです!」

「君のために作ってもらった取っておきを…ってあれ?あれ?あれあれ?!ない!!!!」

どうやら、モンスターから逃げる際にキリトの手を握ることに意識を取られて落としたらしい。

しかし、あれさえあれば勝てる見込みがある。

「キリト君、わかった。君の案に乗ろう。ただし、僕は必ずここに戻ってくる。その時君に渡したいものがある。それはきっと君の助けになるものだ。」

「わかりました。それまで必ず生き残ってみせます。」

二人はもう一度目を合わせる。そして、タイミングを見計らってヘスティアはキリトの腕から離れ走り始める。

そして、キリトは後方を振り返り背中の剣を抜いてシルバーバックと対峙する。

シルバーバックはやはりヘスティアに狙いを付けているためキリトの横を抜けようとするが、

「行かすかよ!」

水平方向に斬撃を繰り出す剣技。

《ホリゾンタル》を繰り出し、シルバーバックに攻撃を当てる。

やはり、ステイタスと剣の切れ味が足りないのかソードスキルでも大きなダメージは入らなかった。

しかし、奴のヘイトが自分に向かってきたので成功だ。

あとは時間を稼ぐだけ、生き残るだけだ。

こうして、倒す為ではなく生き残る為の戦いが始まった。

☆★☆★☆★☆★

「ホントにこっちの方なんですか?」

「ええ、そのはずよ!」

リズベットとシリカはモンスターが暴れたという最初の現場に向かっていた。
そこから、情報を集めようと考えていたのだがその現場にはロリ巨乳神ことヘスティアがいた。
「ヘスティア様！」
リズベットがヘスティアを呼ぶと向こうもすぐに気づいてくれた。
「何があったんですか？」
ヘスティアはこれまでの経緯を手短に話す。
幸い彼女達は素早く状況を理解してくれた。
「そこで頼みだが、落としてしまった剣を一緒に探してもらえないか？」
「もちろんです！」
「せっかく私が作った剣を使わずに死なれたらたまったもんじゃないわ！」
「二人とも恩にきるよ！」
ヘスティア二人の好意に心から感謝した。
そして三人は辺りを探し始めた。
が、なかなか見つからない。
確かにモンスターが暴れたせいで木材や商品なんかが散乱している。
だが、探し物は片手剣だ。
落としてからさほど時間が経っていない中で、あれほどの大きさの

ものが見つからないのは不自然だ。
もしかしたら、混乱に乗じて誰か持って行ったのかもしれない。
そんな不安をリズベットが感じていた。

「探し物はこれか？」

そんな時不意に声をかけられ下を向いていた顔をあげるとそこには青いコートにフードを深く被っている者がいた。

「それよ！どこで見つけたの？」

「お前達が来る少し前にここで見つけたよ。」

「そうなんだ、ありがとう！」

こんな非常事態に剣を拾って届けてくれる人がいるのだと感心した。
しかし差し出された剣をリズベットは受け取ろうとすると、取られないようにその者は手前に引いたのだ。

「ちょっと?!あんたどういうつもり？」

リズベットが怪しげな人と話しているのに気づいたシリカは二人に近づいて話しかける。

「何があったんですか？」

「こいつが剣を見つけてくれたんだけど、どうやら渡す気がないみたいよ。」

「そ、そんなぁ…困ります！なんでもしますからどうかその剣を返し

てくれませんか？」

「ちょっと、シリカ！なんてこと言ってるのよ！こんな奴に何かすることなんてないわ！渡す気がないなら力づくで奪い返すだけよ！」

リズベットが片手棍を構えると、その青いコートの者は両手を前に広げ大げさに降る。

「やだなぁ、渡さないなんて一言も言ってないじゃないか。ただ、一つ条件があるんだ。」

「条件？」

「そう、これを渡す代わりに君達は彼の手助けをしてはならない。どうだい？簡単だろ？」

そんな条件、むこうにどんなメリットがあるのかさっぱりわからない。

それになぜ奴はキリトのことを知っているのか？

様々な憶測が頭に中でぐるぐると回っているが、今はこの要求に従っておいた方がよさそうだ。

「わかったわ。」

「わかっているとは思うけど、もし手助けした場合は…」

その瞬間目の前にいた奴が姿を消した。

そして、

「容赦はしない。今ので大体の力量の差はわかってくれたとは思うけどね。」

突如背後から聞こえてきた声に恐怖を感じた。
現在彼女たちのレベルは3だ。
一般的に一流冒険者と呼ばれるのもこの辺りだ。
その二人が全く目で追えなかったのだ。
一体いくつレベルを上げればこんなにも速く動けるのか。
リズベット達は奴の言葉に黙って頷くしかなかった。

「それじゃ、彼によろしくって伝えておいてよ。またね。」

言葉を終えた瞬間既に気配がなくなっていた。

「おーい！二人とも剣は見つかったかい？」

「え…ああ」

剣は彼女達の背後にちゃんと置かれていた。
これで、キリトに加勢することはできなくなった。

「あれ、二人ともどうしたんだい？すごい汗だよ？」

ヘスティアに指摘され、二人は初めて自分が汗をかいていることに気づいた。
たった一瞬の出来事だが、それだけ奴の殺気が凄かったのだ。

「え？いや、なんでもないですよ！」

「そ、そうです！それより早くキリトさんを助けに行きましょう！」

「ん？そうかい？なら、急ごう！」

あいつは一体何者なのか？
もしかしたらどこかであっているのではないか？
そんなことをリズベットは考えながらもヘスティアとシリカとともにキリトが戦っている市街地に向かった。

# 第12話

「くっ！」

『がああああああああ！』

決定打に欠ける今の状況でこいつに勝つのは難しい。
ましてや、単純な力は奴が上だ。
攻撃を喰らわないように多くは躱すが、躱しきれないものは剣を当てて流すがその度に身体のバランスを崩される。
そして、大きく距離をとってまた対峙する。
それをひたすら続けているが、そろそろ体力の限界が近づいている。
また、終わりが見えないのも精神的な疲労が募っていく。
なんとかして攻撃を当てていくが、徐々に刃こぼれを起こしはじめている。
この時ばかりはギルドに対して剣の品揃えと金額の設定への不満が爆発しそうだ。
それでも、諦めないのはヘスティアとの約束があるからだ。

神様…信じてますよ！

★☆★☆★☆

「むむ！」

「どうかしたんですか？ヘスティア様？」

「今キリト君の心の声を聞いたような気がする！」
そんな馬鹿な…なんて二人してそんなことを思うのだが、神の力を使えずとも彼女は神様なのだ。

ありえないことはないかもしれない。

「はは…」

同じ事を考えてたのか、リズとシリカは顔を合わせて苦笑いをする。

そうこうしているうちに三人は先ほどキリトと別れたという地点に来たが、彼の姿は見当たらない。

「もしかしたら移動したのかもしれないわね。」

「だとすると、ここからは手分けしたほうがいいですかね？」

「よし！では、僕はこっちを担当するよ。君達はあっちを頼む。」

「わかりました。」

ヘスティアでの担当を振りわけられ、三人はそれぞれ違う方向に探しに行く。

リズベットは自分の勘を信じてすすんでいく。

しかし、この住宅街はホントに迷路だ。

何度か立ち寄ったことはあるが、それでも道を覚えることはなかった。

『…ドーン』

「今の音…もしかして！」

少し遠いが、確かに普段のこの市街地では聞かない音が聞こえた。

リズベットはその音の方向へ向かう。

そしてそこに行くと、

「キリト…」

そこにはシルバーバックを相手にギリギリの攻防をしているキリトがいた。

側から見ても勝つのは厳しそうに見える。

「リズさん！」

立ち止まってその光景を見ていると、シリカが後ろからやってきた。

「キリトさん！」

「ちょっと待ちなさい！」

シリカはキリトを見つけると側に駆け寄ろうとする。

それをリズベットが止める。

「なにするんですか！早く助けないと！」

シリカはキリトを助けに向かうことしか頭にないのか、リズの制止を振りほどこうと必死に動く。

「あんたさっき青い奴に言われたこと忘れたの?!今行ったらどうなるかわからないわ！」

「だからって、何もしないで見てるだけなんて私には出来ません！」

それを聞いたリズベットは心が痛む。

だが、ここでみすみすシリカを向かわせるなんて出来やしなかっ

た。

「あいつを…キリトを信じましょう。あいつは昔からとんでもないことを平然とやってのける凄い奴なんだから。」

その言葉にシリカも納得したのかしていないのかわからない。けれど二人のやり取りに区切りがついたその時、ヘスティアがキリトの元に辿り着く。

★☆★☆★☆★☆

「キリト君！」

「神様！」

ヘスティアが現れると、それまで向かっていたヘイトが向こうに切り替わる。

シルバーバックはヘスティアに向かって襲いかかる。

「危ない！」

キリトは助けに向かおうとするが、ちょうどシルバーバックを間に挟んでいる状態で助けに向かおうにも奴と同等の敏捷しかないキリトは奴には追いつけない。

「ま、待ってろよ！キリト君！必ずこれを君の元に届けるからな！」

そう言うと、ヘスティアは剣を抱えシルバーバックに向かって走り出す。

「そんな無茶ですよ神様！」

そんなキリトの言葉には耳を貸さずに突っ込んでいく。

「うおおおおお！」

シルバーバックがヘスティアに飛びかかる。
しかし、ヘスティアは足を止めずに向かっていく。
そしてギリギリまで引きつけ、

「今だっ！」

ヘスティアはシルバーバックが飛んだことで空いている下の部分を抜けようとヘッドスライディングをする。

「ぶう！」

躱すのはうまくいったが、顔から地面を滑っていく。
正直かなり痛そうだ。

「か、神様あああ！大丈夫ですか?!」

ヘスティアは地面に突っ伏したまま動かない。
どこか当たりどころが悪かったのか？

「うう…」

「か、神様？」

「痛い…」

顔から思いっきり地面を滑ったのだから、当たり前といえば当たり

前である。
キリトはヘスティアの身体を支え起こす。
『ガアアアアア！』
ヘスティアの傷を治療したいのは山々だが、今はそれどころじゃない。
一刻も早くこの状況なんとかしないといけない。
「キリト君これを！」
ヘスティアが布を取ると、そこにあったのは一本の黒紫の剣だった。
鞘にはヘファイストス・ファミリアの紋章がある。だが、その剣に凄みは感じない。
試しに剣の柄を握る。
すると、剣に刻まれているヘスティアが描いたステイタスの紋章が光り出す。
「これは…」
先ほどまで全く感じられなかった重さや切れ味がみるみると加わっていく。
いや、取り戻していくというような気がした。
この剣の力の底が見えない。
一緒に戦えばもっと見えるような気がして胸が高鳴る。
そして、どことなく懐かしさを感じる。
「いける…」
先ほどヘスティアに躱されたせいかより苛立ちを見せて、キリトに

襲いかかる。
けれど、先ほどの焦りを彼には感じない。
『ガアアアアア』
シルバーバックが右手の爪で切り裂こうとするところに合わせて、斜めに軌道を描くソードスキル《スラント》を繰り出す。
それをただ当てるだけでなく、より斜めに剣を当てることで攻撃を弾く。
今まで常に攻撃を躱すか、剣で防ぐだけだったので弾かれたことにシルバーバックは驚く。
そこをキリトは見逃さない。
今度はキリトがシルバーバックの懐に潜り込み、V字に切り込む《ヴァーチカル・アーク》を打ち込む。
『ギャアアアアア』
攻撃が通ることによって大きく戦況が変わりつつある。
シルバーバックもそれを感じ取っているのだろう。
ここで奴は自身の最大の力を使って両爪を振り下ろし、戦いを終わらせようとする。
だが、奴が今まで見せたことない大きなモーションに身体が反応する。
身体を回転させ、奴の左脇腹に回り込む。
そこに今持っている最大連撃の剣技を叩き込む。
「はあああああああああああ！」
右斜めに切り下げた後、反対側にも切り下げる。
次に右斜めに切り上げると、反時計回りに身体を回転させた勢いで剣を左斜めに切り上げる。

垂直４連撃剣技《ヴァーチカル・スクエア》。

『ギャアアアアアアアアアアア』

凄まじい悲鳴とともにシルバーバックは倒れ、動かなくなった。
そして斬り込んだ身体から魔石が飛び出し、灰となって消えた。
これでようやく安心したのかキリトはその場に座り込んで一つため息を吐くのだった。

★☆★☆★☆★☆★

「イテ！イテテテ！キリト君？もう少しお手柔らかに頼むよ。」

「傷が染みるの仕方ないことなんで諦めてくださいよ」

あの戦闘の後、神様を抱えて市街地を出てホームに向かっている最中にシルと出会い奥の一室で休憩させてもらうことが出来た。
シルから受け取った救急箱を手にお互いに傷の治療を始めたのだった。

「それにしても、よくこんな武器を持ってましたね。どうやって手に入れたんですか？」

「そ、それはほら…僕とヘファイストスは親友だからね！親友割引で特別にだよ！」

若干神様の声が上ずっているのは気のせいではないだろう。
相当苦労して作ってもらったんだろう。

「すみません、神様。迷惑かけてばかりで。」

「迷惑なんてとんでもない！僕は君の家族だ！むしろこれくらいさせて欲しい！」

ヘスティアは親指を立ててウィンクを決めてくる。

そんなヘスティアの思いやりに心が温まる。

「神様…ありがとうございます。まだまだ迷惑かけるかもしれないですけど、これからもよろしくお願いします。」

「ああ！末長く幸せになろう！そして…」

（結婚しよう！）

「そして？」

「な、なんでもないよ！」

「気になるじゃないですか！教えてください！」

「嫌だ！こういうのは男性の方から言って貰わなきゃね！」

仲良く戯れる二人をシルがそっと覗いて微笑みながら、少し羨ましいと思っていたことはここだけの話。

★☆★☆★☆★☆★

「あのモンスターじゃ少し物足りなかったかしら？」

「だから言っただろう。あの程度じゃあいつを死にかけるまで追い詰めやしない。」

「次はどんな試練を彼にさせようかしら？貴方の意見を聞かせてちょうだい？《ブルーム》」

# うそつき
# 第１３話

ここはとあるカフェ。
ここで注目を集める４人の冒険者がいた。

「このメンツで集まるのも久しぶりね。」

「そうですね。４人で集まるのは久しぶりかもしれません。」

ピンク色の髪にそばかすがチャーミングな女の子。
頬杖つきながら話しているのはヘファイストス・ファミリアの《マスタースミス》リズベット。
そして、リズの言葉に同意しているのはガネーシャ・ファミリアの《ドラゴンテイマー》シリカ。
見た目は茶髪にツインテールをしている。

「そうね。最近は遠征なんかで忙しいからね。リズとはよく武器のメンテで会うけれど、シリカは久しぶりになるわね。」

「ほんとだよ！みんな元気そうでなによりだよ！」

これに答える２人。
ここでは知らない人はいないであろう大手ギルドロキ・ファミリア所属している。
青い髪とつり目の少女、《スナイパー》の異名を持つシノン・アサダ。
そして、長い黒髪に額に赤いヘアバンドをつけた少女。見た目からは想像できないであろう剣の達人。ついた二つ名は《絶剣》ユウキ・コンノ。

「それで、面白い話ってなにかしら。」

目を細めて、微かに笑うシノン。

それにつられて、リズもいやな笑顔を見せる。

「知りたい？」

「もったいぶらないでよ！はやく教えて！」

ユウキはもう待てないといった感じでリズを急かす。

それを見て、リズは「どうしよっかな～」なんて言い出す。

それを見かねたシリカがさっさと答える。

「このオラリオにキリトさんが来てるんです！」

「それ本当？」

「ほんとにいるなら、久しぶりに手合わせしたいな♪」

「ほんとよ。それと、ユウキ。あいつのレベルは1だから、あんたと戦うと死ぬわよ。」

シリカにさっさとバラされておもしろくないというような顔をしながらリズが答える。

「ならなおさらね。いまのあいつなら火矢を鼻に当て放題よ。」

「そうゆうことよ。」

『キュル！』

そんなことを満面の笑みでシノンがとリズが答えるのでみんなもつられて笑う。

「今日はピナを連れてきたんだ。」

「はい！ピナも強くなってきたんですよ！」

シリカがピナを見つけたのはちょうど1年前。

ダンジョン内でもセーフティーゾーンと呼ばれる階層がある。

だが、そのセーフティゾーンにも比較的少ないがモンスターはいるのだ。

ピナはその階層の綺麗な湖で出会ったのだ。

ダンジョンのモンスターはダンジョンの壁から生まれるのが普通だが、環境がいいと稀にダンジョン外のモンスターと同様に生殖をするみたいである。

そこで、数ある卵から一個だけ孵った子ドラゴンであるピナと顔を合わせたことがきっかけで、ピナはシリカを親と勘違いしそのまま一緒にいるのだ。

「この間やっとレベル2にあがったんだよ！」

その後連れ帰ってからシリカの主神であるガネーシャに頼んだ結果、ピナもガネーシャの恩恵であるステイタスをもらっている。

ステイタスをもつモンスターというのはこのオラリオには他にいない。

そして、そんなモンスターをテイムしてつれまわす冒険者も他にいないので、称号ととして《ドラゴンテイマー》となったのだ。

「へぇー。ピナも強くなっているのね。それに比べてキリトはどうかしら？」

シノンがキリトについて知ってそうなリズとシリカに尋ねる。

「あいつもかなりの早さで強くなってるわよ。この間なんてシルバーバックをソロで倒したしね。」

それをリズが答える。

しかし、その答えには拍子抜けといったような感じだ。

「それぐらいなら、ある程度ダンジョンで鍛えれば倒せるじゃない。」

「それが、キリトさんなんと冒険者になって半月だそうですよ！」

それを聞いたシノンと飲み物をストローで飲んでいたユウキは目を開けて驚く。

シノンは胡散臭そうな目で二人に抗議をするが、二人はニコニコするだけである。

「それが本当ならすごいね！僕だってシルバーバック倒せるようになるのに2ヶ月かかったのに。」

「それでも十分すごいですけどね…」

ユウキの答えに、自分があのモンスターを倒したのにかかった期間を考えて勝手に落ち込むシリカ。

ユウキがあわてて身振り手振りでフォローをする。

「ところで、あの話聞いた？」

流れを変えるためにリズベットが話を変える。

ユウキもこれに乗って流れを変えようとする。

「なんの話？」

「最近、あるサポーターをパーティーに加わるとダンジョンで稼いだものを盗まれる被害が出てるらしいわよ。」

「それ聞いたことあるよ！でも、被害が出てるのはレベル1から2のパーティーが多いみたいだね。」

「こういう厄介ごとに巻き込まれそうよね、あいつは。」

「「はははは…」」

シノン言葉に否定できない彼の巻き込まれ体質を知ってる3人は苦笑いしかでないのだった。

☆★☆★☆★☆★

「シルバーバックを倒したぁ?!」

あれから2日経って、ギルドを訪ねたキリト。
一昨日の経過を報告するとエイナにものすごい形相で睨みつけられている。

「ほ、ほら！この魔石とドロップ品の奴の毛皮が証拠です。」

キリトがそれを提示すると、エイナはそれを手にとって凝視する。
じっくり観察をすると、諦めたようにため息をつく。
シルバーバックの討伐の報告は聞いていた。
その時に討伐をした冒険者の特徴も聞いてはいたのだが、まさか本当にキリトがこのモンスターを倒したとは思わなかった。
いや、ありえないのだ。普通は。

それほどのステイタスをすでに持っているのはもはや何かレアなスキルが発動しているせいであるにちがいない。

「それで今日から7階層に向かおうと思うんですけど、その許可を頂きたくて…。」

「その前に、キリトくんのステイタスを見せてもらえないかしら？」

「え？」

「わかってる。同じファミリアの人間以外にステイタスを見せるのはマナー違反であることは。でも、ほんとに君が7階層にいくだけのステイタスを持っているのか知りたいの。こんなに早く成長した冒険者は前例がない。無理にとは言わないけど…。」

「わかりました。エイナさんなら誰かに言いふらすこともないと思いますし。」

「そのことは約束する。もし、情報が漏れた場合は私が責任を取ります。」

その言葉を聞いたキリトは自身の装備を外して、上着を脱いで背中の神聖文字で書かれているステイタスを見せる。

「それにしても、エイナさん神聖文字読めるんですね。」

「少しだけね。」

キリト・クラネル
Ｌｖ．１
力：Ｄ５０１

耐久：Ｅ４８２
器用：Ｆ３８９
敏捷：Ｅ４３２
魔力：０
片手剣：Ｄ５３２
体術：Ｅ４８７
《魔法》【】
《スキル》
【剣芸（ソードアート）】
・武器に応じた剣技を発動できる
・各々の技の熟練度によって威力が増す
・使用武器のアビリティが追加され、熟練度によって使用可能な技が増える

（なにこのステイタス値?!）

半月でのステイタス値ではない。
それにこの剣芸（ソードアート）というスキルは、ロキ・ファミリアや、ヘファイストス・ファミリアの一流冒険の数名しか発動していないスキルではないか。
この数値に驚いていて目に入っていなかったが、

（あれ?ここの部分だけ読めない。ヘスティア様の癖字かしら?）

神様にも癖というものがあり、文字にその神独特の書き方があるときがある。
しかし、それはヘスティアの偽装でもしキリトがステイタスを見られたときのことを考慮してあらかじめ細工していたのだ。

「ねぇ、明日空いてるかしら?」

「俺の方はいつでも予定は調整できますけど、エイナさんは空いてるんですか？」

「私は明日非番なの。それより、明日装備を買いにいきましょう。７階層にいくのなら、防具を新しく買い換えた方がいいと思うし。」

それはキリト自身も感じていた。

武器に関してはヘスティアがくれたこの黒紫の剣（名前を知らない）があるが、防具に関しては未だにギルドからのバリバリ初期装備なのだ。

「お金なら、その魔石とドロップ品を売ればそれなりになるだろうし大丈夫そうね。」

「それじゃあ明日１０時にバベルでいい？」

「わかりました。では、また明日。」

「明日の防具を整えるまでは７階層いっちゃだめよ！」

「うっ…ははは、はい。」

☆★☆★☆★

次の日ー

バベルの前でエイナを待つキリト。

そういえば神様、新しくバイトを増やしたって言ってたけど…

一体今度はどこで働いているだろうか？

待っている間朝早く働きに出るヘスティアのことを考えていると、

遠くから手を振って近づいてくるエイナを見つけた。

「おまたせー！待ったかしら？」

「そんなことないですよ。」

今日の彼女は普段のギルドの支給の制服ではなく、スカートなどを履いている。

女性は化粧や服装なんかで雰囲気が変わると言うが、今日のエイナはいつものキリッとしたものはなくとても可愛く見えた。

「その服とても似合ってますよ。」

「えっ?!あ、ありがとう！」

エイナは顔をそらしながら返事をする。

自然な感じで言ったつもりだがもしかしたらすこし上ずっていたかもしれない。

キリトは失敗したかな？と、思いながらも続けて話しかける。

「そ、それで今日はどこに買いに行くんですか？」

「このバベルの中よ？」

「バベルの中ですか？でも、ここって換金所とシャワールームぐらいしか…あとは食堂？」

「その他にも上の方は神様のホームになっているのよ。そして、それより下の階はファミリアなんかに貸し出しなんかしてるの。そして、そのうちのいくつかのフロアはあのヘファイストス・ファミリアが武器や防具の販売で使用しているの。」

「へー！それじゃあ、今日はそこで防具を買うんですね？」

「そういうこと！おっと、話している間に着いたわね。ここから全てヘファイストス・ファミリアのお店よ！」

エイナの説明を聞きながら移動しているといつの間にかお店にたどり着いていた。

そこで、どこか見覚えがある姿見えた。

「いらっしゃいませー！」

「…神様？なにしてるんです？」

「な?!なんでキリト君がここに?!」

「それはこっちのセリフですよ。」

まさかヘスティアがここで働いているとは思っていなかった。

そして、なんだかこっちに気づいてからあまり機嫌が良くないように思う。

「僕がこんなに必死で働いているのに、君は仲良く女の子とデートとは…。許せない！」

「デートとかそういうんじゃないですよ！今日はこれから向かうダンジョンの階層に向けて装備を買おうと…」

「おい！新人！さっさと向こうにこれを運べ！」

「は、はなせ！僕はキリト君のデートを邪魔をするという重大な仕事

がぁあああ！」

「ははは…」

キリトが弁解をしていると、他の店員さんに首根っこを掴まれて連れて行かれた。

その光景を二人はは苦笑いしながら眺める。

「なんかすいませんエイナさん。」

「おもしろい方よね、ヘスティア様って。」

少々トラブルがあったが、新人冒険のために売っているフロアに移動する。

そこには名の知れわたっていない。いわゆる無名の鍛冶師が作ったものが置かれている。

だが、無名ではあるがさすがヘファイストス・ファミリアの眷属が作った品だ。

どれも良品である。

「これだけあると目移りしちゃいますね。」

「そうね～。一旦別れて探してみましょうか？」

「そうですね。」

こうして、別れて探すことに。

キリトがしばらく店の中で探してみると、あるものに目を奪われた。

そのあるものとは、黒いロングコートだった。

き、着てみてもいいかな？

そこで近くに通った店員に尋ねて試着をの許可を取り、キリトはその黒のロングコートを着る。

鏡をみて自分の姿をみてなんとも言えなくて顔を緩ませていると、後ろにエイナが突然現れた。

「キリト君って黒色好きだよね？」

「えっ？あ、いやその別に意識してるわけではないんですけどなぜか全部黒になってますね…」

「いっつもキリト君のインナー黒だったもん。まぁ…お洒落とは言い難いけど、キリト君に黒はあってるとは思うわよ。」

「髪の毛的にもね」なんて付け加えながらエイナは笑いながらそう伝える。

キリトもこのロングコートを気に入ったのでこれを買おうと思っていたのだが、

「それを買うのはいいけど、防具を買いに来たこと忘れてない？確かにそのコートは丈夫にできてはいるけど、モンスターの攻撃を防ぐには無理があるわよ？」

「うっ…そ、そうですね。」

キリトは今日買いに来た目的を思い出し、このコートを仮に買うとして使えるお金を計算し目に見える範囲で防具を探すと、ある防具にめが止まった。

「このチェストプレートなんてどうです？」

キリトはカゴに入っている胸防具を取りだして、エイナに見せる。
それをみてエイナは呆れたような顔をする。
「はぁ～…。キリト君ってホント防具に関しては軽いものばかり選ぶのね？」
「本能的に早く動くために重いものを避けてるのかもしれませんね？」
「うーん…確かにこの防具はしっかりしてる。値段の割にいい素材使ってるし。うん、これでいいんじゃないかしら？」
キリトがほっとしたのも束の間エイナがここぞとばかりに押してくる。
「そのかわり、そのコートにも肩の所に鉄のプレートをつけさせてもらうわよ？」
「は、はい！」
キリトはエイナの勢いにただ頷くしかなかった。
そして、無事？買い物が終わり現在帰路についている。
「それにしても、その胸防具の名前すごかったわね。兎鎧でぴょんきちなんて名前なんてね。」
「笑い事じゃないですよ。あんなにいい防具なのに売れないわけだよ…。」
エイナは笑いながら言うと、キリトはややテンション低めに答え

る。
その防具を作った者の名はヴェルフ・クロッゾ。
これからも利用すると思うし、覚えておこうとキリトは心の中で思う。

「今日は買い物に付き合ってもらってありがとうございました。これから食事なんてどうですか？おごりますよ？」

「あら？それじゃあ、おいしいものでも食べに行きましょうか。私が知ってるお店に行きましょう！」

「え？あんまり高いのはちょっと…」

「ふふふ、期待してるわよ？キ・リ・ト君！」

「ははは…」

今日でもしかしたら全財産なくなるかもしれない。
覚悟だけはしておこう。

# 第１４話

「こんにちは！」

「あら、キリトさん！」

エイナとの買い物から次の日、ダンジョンに行ってからの帰りにキリトは豊穣の女主人に顔を出していた。

そこには夜の開店前に準備をしているシルがいた。

「これ、お弁当いつもありがとうございます！」

毎回ダンジョンに向かう際にもらっている弁当をシルに返す。

「いえ、もう習慣ですし。いつもうちをご贔屓してもらってますので。それにしても…」

シルはキリトを下から上までゆっくり眺めるとなんとも言えない顔になっている。

「あ、これですか？この黒コート似合ってませんか？」

おそらくこの間買ったコートをみてこんな顔になっていると感じたキリトは恐る恐るきいてみる。

シルはなんと言ったらいいのかというような顔で困りながらも声に出す。

「えっと…キリトさんにしか似合わないというか、なんというか。うん、真っ黒っていうのはいつものことですしね。」

出た言葉がいかにも似合ってない。センス悪いとしか言われてな

いように感じてキリトは泣きたくなる。
今日はヘスティアは例のバイトで忙しいらしく、夜ごはんはヘファイストスと済ますらしい。
なので、今日はこの豊穣の女主人で済まそうと考え寄ったのだ。
だが、まだ準備で忙しそうなのみて

「なにかお手伝いしましょうか？」

「いいんですか？それでは、掃き掃除をお願いします♪」

「反応早いですね…」

シルの反応の早さにもしかしたら自分からいかなくてもうまいことやらされてたかもしれない。
しかし、実際店が始まるまで暇ではあるので文句もあるわけではなく手伝うことに。
しばらくすると、働きながら余裕が出てきて会話を続けることに

「そういえば、街で騒ぎになってましたよ！あのシルバーバックを街から救った黒髪の冒険者って！」

「そんなほとんどまともにやりあってなかったですけどね。かなりギリギリで。」

「そんなキリトさんに見てほしいものがありまして…」

「へぇ～なんです？」

「実はこの本なんです！」

「えーっと…『猿でもわかる魔法の本』？なんですこれ？」

「実はあるお客さんが、私がキリトさんと知り合いだって教えると是非この本をみせてやってほしいと頼まれまして。」

「俺は本とかも読みますけど、このタイトルはまた斬新ですね…。帰ってから読んでみたいんですけど、持ち帰ることはできますか？」

「ええ、構いませんよ。でも、それはうちでごはんを食べてから…ですよね？」

「ははは…もちろん。」

このシルのしたたかな笑顔にはどうにも逆らえる気がしない。

将来奥さんができたら、きっと尻にひかれるだろうなと考えてしまうキリトだった。

★☆★☆★☆

早めにダンジョンの攻略を切り上げて食事をしたので、外はまだ日が沈んだばかりで若干明るい。

帰ったら借りた本をすぐに読もうと考えていると、

「待ちやがれー!!!」

「きゃっ！」

「ん？おわっ！」

声がしたと思ったら突然ぶつかってきたものがいた。

その子は小人（パルウム）の女の子だった。

「おい！そこの黒いの！そいつをこっちによこせ！」

「そう強制されて素直に渡す気はしないな。」

「なんだと?!テメェなめてんのか?!」

一触即発の雰囲気に屈強な冒険者たちは武器をとる。

それに応じてキリトも背中に収めてる《黒紫の剣》(名前はまだ考え中）の柄に手をおく。

「やめなさい。」

そんな雰囲気を一蹴させた人物はなんと豊穣の女主人で働いているエルフの女性。リュー・リオン。

シルとは仲がいいのは知っていたが、あまり話したことはなく知っていることはほとんどない。

それにしても、これほどのプレッシャーはただものではないことを感じさせる。

「彼は私の友人の大切な人です。わかったならさっさと失せなさい。」

「てめぇ、さっきから偉そうだな。こっちは3人。勝てると思ってるのか?」

彼女の力を感じ取れないなんて鈍感すぎる。

それぐらい俺たちとはかけはなれた力を持っている。

「ですからこうして貴方がたに言っています。もう一度いいます。失せなさい。」

「うっ…」

今度は自身威圧感をまったく抑えず彼らに向ける。
向けられていないのにもかかわらず冷や汗が出てくる。

「ふん…おい、いくぞ！」

ここでようやく男たちも力の差を感じ取ったのか引き上げていった。
しかし、今のを間近で感じたキリトはシルの親しい人とはいえ、気が抜くに抜けなくなっていた。

「そんな警戒しないでください。その…若干傷つきます。」

「そうですよ！リューは優しい人です！是非仲良くなってほしいです！」

「すいません。ただならぬ力を感じたので。」

シルが介入することでようやく緊張が解けた。
それを感じ取ったのかシルもご満悦な様子だ。

「それにしても、なんでここにいたんですか？」

「ちょうど、食材が切れているのを私が忘れていてそれを買うのに付き合ってもらっていたんです。」

「そういうことです。それにしてもクラネルさん、貴方は随分変わった武器を持っていますね。そんな色の剣初めて見ましたよ。」

「これは、神様がくれたものなんです。名前はまだなくて、《黒紫の剣》って呼んでるんですけど。」

「みたところかなり貴重な素材を使っていますね。ただ、その力を完全に引き出してはいないようです。おそらくはそのステイタスのような神聖文字が影響しているのでしょう。」

そのことはキリトも感じていた。

この剣がいつか本当の力を出せるように自分も頑張っていこうと心に決意する。

「ところで、クラネルさんはなぜ奴らに絡まれていたんですか？」

「キリトでいいですよ。えっと、小人（パルウム）の女の子が追われていたんですよ。俺の後ろに…ってあれ？」

先ほどまでいた彼女はすでにどこにもいなかった。

多分先ほどの冒険者が怖くて逃げてしまったのかもしれない。

結局彼女はなぜ追われていたのだろうか？

☆★☆★☆★

ホームに着くと早速シルから借りた本を読んだ。

が、なんだかよく分からない問いばかりであまり楽しい話ではなかった。

なんでも、魔法に対するイメージを答えよなんてものばかりだった。

キリト自身魔法を一度も使ったことがないので、どんなものなのかは分からない。

ただ、漠然とイメージできるのは剣から火や氷を出して相手を斬るなんてものだ。

斬った相手は炎で燃え、氷で凍りつく。

なんて、

「キリトくん、こんな場所で寝てると風ひくぜ！」

「あれ？神様？お帰りなさい。」

本を読んでからいつの間にか寝ていたらしい。
ヘスティアはいつの間にか本を手に取っていた。

「へぇーキリト君は本を読むのか。感心、感心！ん？」

「どうかしたんですか？」

「これ、魔法書（グリモア）じゃないか!?」

「ぐ、ぐりもあ？ってなんです？」

「魔法書（グリモア）を知らないのかい？」

「はい、それってなんですか？」

キリトがヘスティアに教えを請うと、ヘスティアは咳払いをコホンと一つ。
そして手を腰に当て、胸を張って答える。

「魔法書（グリモア）とは、言っちゃえば読めば必ず魔法が発現する本ってことだよ！」

「え？それだけですか？」

「そ、それだけ?!今それだけって言ったかい?!その本を読んだら必ず魔法が発現するんだよ！」

「あははは、すいません。確かにすごいと思います。」

英雄の冒険譚（オラトリア）を読んでいたキリトだが、剣での戦闘が好きであまり魔法に目が入っていなかった。

「しかし、なぜこれがこんなところにあるんだい？」

「それは…」

キリトはその本を借りた経緯を伝えると、ヘスティアはなにやら考え込む。

「一回ステイタスを更新してみよう。」

一度ベットに移動してキリトの背中に神血（イコル）をたらしてステイタスを更新する。

キリト・クラネル
Ｌｖ．１
力：Ｄ５０１→Ｄ５３２
耐久：Ｅ４８２
器用：Ｆ３８９→Ｆ３９４
敏捷：Ｅ４３２→Ｅ４４２
魔力：０
片手剣：Ｄ５３２→Ｄ５４０
体術：Ｅ４８７→Ｅ４９４
《魔法》【】
《スキル》
【剣芸ソードアート】
・武器に応じた剣技を発動できる

・各々の技の熟練度によって威力が増す
・使用武器のアビリティが追加され、熟練度によって使用可能な技が増える

（あれ？）

魔法の欄に新しく増えたものはない。
まだ発言していないのか、もしくは…

「どうやら、その魔法書はすでに効力を失っていたみたいだね。魔法のスキル欄にはなにもふえていない。」

「そうなんですか？まぁ、一応読みましたし明日返してきますよ。」

キリト自身魔法に関してはあまり期待してはいない。
自分に合っているとは思っていないからだ。
ただ、それだとあの夢は一体なんだったのだろうか？

☆★☆★☆★

「シルさん、これ昨日借りた本です。」

「あれ？もう読んだんですか？」

「この本実は…」

ヘスティアから聞いた話をするとシルは驚いた様子でその本をまじまじと見始めた。
そして、その本が特別なスキルがないと作製できないこと、購入するとかなり高価なものであることを昨日あの後ヘスティアに教えてもらったことを伝える。

「そんな高価のものをキリトさんに譲るなんてよっぽど気に入られたんですね。それじゃあ、魔法を覚えたんですか？」

「それが、その本実はすでに効力を失っていたみたいで魔法は出なかったんですよ。」

「それはおかしいね。」

「ミアお母さん？」

キリトがシルに魔法が出なかったと話していると、豊穣の女主人の店長ミアが話に入ってきた。

そして、魔法発現についておかしいという。

「なにがです？」

「その本はシルが渡す前はしっかり効力を持っていたということだよ。お前さん、その本を自分で読む前に誰かに読ませたんじゃないかい？」

「そんなことはなかったはずですけど…」

「とにかく、効果を失ったその本はガラクタ同然さ。それは私が処分しておくから、あんたはさっさとシルから弁当もらってダンジョンに行きな！」

そういって、キリトの肩をバンと叩く。

彼女は気合を入れてもらおうしていることだろうが、内心かなり痛がっているのは黙っておく。

「それじゃあ、今日もがんばってくださいね♪」

「ありがとう、いってきます。」

★☆★☆★☆

「変ね…」

「あいつは昔から変なやつだよ。今回魔法が出なかった理由は皆目見当もつかない。」

「そろそろ魔法があってもいい頃だと思ったのだけれども…これじゃあ今後厳しくなるでしょうね。」

フレイヤ自身キリトに厳しい試練を与えて殺したいわけではなく、それによって輝く彼の魂とそのかっこいい姿をみたいのだ。

それでもし彼が死んだときは…

（そのときは魂になったあの子をしっかりと愛でてあげるわ。）

「そんな心配しなくていいと思うがな。」

「あら？声に出てたかしら？」

「別に。声に出さなくたってわかるさ。」

（あんたがキリトを見るときの表情で考えてることはすべてな…）

遠目からキリトをみてみる。

すると、大きなバックパックを持つ小さな女の子がいた。

（あいつは今回はどんなトラブルに巻き込まれるのかな？）

小さく微笑みながら彼はその場から離れるのだった。

# 第15話

「こんにちは！」

「ん？君は…」

ダンジョンに向かおうと足を運んでていたら突然話しかけられたキリト。

そこにいたのは小さな獣人の女の子であった。

だが…

（どっかでみたような…）

「サポーターをお探しではありませんか？」

「へっ？」

ダンジョンでさえあまり人との接点がないキリトがこうやって街の中でいきなり話しかけられるのも珍しい。

ましてや、そこでサポーターなんてものは今までなんの縁がなかった。

「そんな難しく考えることはありません！貧乏なサポーターが自分を売りに来ているんです！」

「はぁー…」

とりあえず、元気があるのはわかった。

話を聞いてみるだけ聞いてみよう。

「それで、サポーターってなに？」

「あれ？もしかして冒険者様はサポーターをご存知ではありませんか？」

「いやぁー…ははは。」

実はエイナに聞いたような気はしている。

だが、連日の濃厚な毎日がそのような知識を記憶の片隅に追いやっているのだ。

キリトは説明を求めると、若干「こいつ大丈夫か？」みたいな顔をしていたので多分かなり当たり前なものなのだろう。

ここでしっかり覚えておかなきゃ。

「サポーターというのは、簡単にいうと冒険者様の荷物持ちです。冒険者様が倒した際にドロップする魔石や素材を私が今背負っているようなバックパックに入れて換金所まで運ぶことが仕事です。」

「へー、それは助かるね！」

実際ここのところモンスターを倒せても魔石を回収しきれないことが多々あった。

しかも、今日から7階層に挑もうというのだ。

彼女がいれば安心して戦闘に集中できると思う。

「それじゃあ、お願いしようかな？報酬はどのように払えばいい？」

「いえいえ、そんな！今日は冒険者様にサポーターがどんなものか知ってもらうのが目的ですから、気になさらないでください。」

（…ん？）

サポーターっていうのはこういうものなのか？
サポーターだって一応冒険者分類だろう。
もっと報酬をせまってくると思ってたんだけど。
それとも、

「つまり、今日これからの働きで雇うかを判断してくれってことか？」

「そういうことです。」

この子もなかなかしたたかである。
俺の周りの女の子はしっかりしてるんだな。

「わかった。でも、早い段階で雇いたいって俺が思ったら今日の分の報酬を払わせてくれ。一緒にダンジョンに潜って危険を冒しているんだ。ただ働きなんてさせたくない。」

「…綺麗事を」

「ん？」

「わかりました。その方がリリにも嬉しいですし。そういえば、自己紹介がまだでしたね。私の名前はリリルカ・アーデでございます。リリとでもお呼びください。」

「俺はキリト・クラネルだ。キリトでいいよ。」

「それではキリト様、早速ダンジョンに向かいましょう！」

「キリトでいいって。それじゃあ、さっそくいこうか！」

★☆★☆★☆

ここ7階層では敵の種類もまた変わってくる。
キラーアントとよばれるモンスター。
こいつはアリの姿をそのまま大きくしたような外見。
だが、その巨大化は見た目だけのものではない。
甲殻の強度もまた強大なものになっており、ここに到達したばかりの冒険者は苦戦を強いられることが多い。

（はずなんですが…）

目の前の光景が信じられない。
聞けば彼は冒険者になってから、半月程度しか経っていないという。
それが、

「はっ！」

4，5体のキラーアントを相手に剣でうまく弾いて立ち回り、奴の弱点である側面甲殻の隙間に剣を突き入れ屠っている。
しかも、彼のスキルなのだろうか？剣先が光出すと通常では動けないような力やスピードで斬っていくのだ。
なんて、側で考え事をしていたら周辺には1体残らず魔石と化していた。

「ふぅ～。」

キリトは剣をしまうと落ちている魔石を拾い始める。

「あっ！キリト様！それはリリの仕事です！キリト様はゆっくりしていてください！」

「おっと！つい癖で。でも、今はモンスターはいないし手が空いてるから一緒に集めようぜ。」

「そんなわけにはいきません！冒険者様とサポーターの区別はしっかりしませんと！」

「さっきから思ってたんだけど、なんでそんな冒険者とサポーターの立場にこだわっているんだ？サポーターだって冒険者じゃないか？」

キリトがそんな質問をすると、リリは鳩が豆鉄砲をくらったような顔をして固まった。

なにかまずいことを言ったのだろうか？

「…なんで、そんなこと平然と言えるんですか。」

そして、リリはギリギリ聞き取れない程度の小言が多い。

なにかと謎が多い彼女。一番の謎はなぜ自分のファミリアの団員とパーティーを組まないかだ。

通常自身の所属するファミリアでダンジョンを探索するのが当たり前だと思う。

たまに、フリーで出かけることもあるだろうが契約まで狙ってる素振りがある。

そんな彼女がそういう理由でやってるとは思えない。

そして、なにより始めの貧乏なサポーターといった。

彼女の能力的にダンジョンの3階層程度なら十分通じそうな知識と力はありそうだった。

それなら、自分の稼ぎくらいはそれでまかなえるはず。

それよりお金が欲しいということはなにかお金が必要なことがあるのかもしれない。

『ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！！！！！！！』

魔石の回収をしているとダンジョンの壁が揺れ始めた。
どうやら、モンスターが生まれているらしい。

「キリト様！」

「わかっている！はああ！」

生まれてくるモンスターがダンジョンの壁にいる間に倒してしまおう。
そんなことができるのか試したくなったのが運の尽き。

「これ…どうするんだよ？」

「胴体を切って魔石を取り出すしかないんじゃないですか？」

「うへぇ～…」

「この剣をお使いください。そちらの剣はリリが預かります！」

「ん？ああ、ありがとう。」

キリトが黒紫の剣を渡すと、リリはとても不思議そうな顔する。
気になったキリトはリリにどうしたのかと聞く。

「いえ、あまりにも軽くて驚きました。あれだけのモンスターを倒していた剣ですからてっきり重いものかと。それに、これ切れ味が…。」

「ああ、どうやらその剣に神聖文字が刻み込まれているだろう？それは多分俺のファミリアの神様が刻んだもので特殊な術をかけているみたい。それのせいでその剣本来の力は抑えられているんだ。だけ

ど、俺が…いや、推測だけど俺のファミリアの神様の恩恵を受けているものが触れればっと」

キリトが剣に指先で少し触れると、刻まれた文字が光出す。
すると、突然剣の重さが変わった。
その重さにリリの身体はよろける。

「おっと！」

それをキリト自分の胸で受け止める。
剣を抱えたリリはそこにすっぽり埋まる。

「大丈夫？」

「も、申し訳ありません！」

キリトから大きく飛びのいて謝ってくる。
キリトとしては飛び退き距離が大きかったことが地味にショックだった。
確かに汗をかいているので臭うかもしれないが…。

「じゃ、じゃあ俺はこいつの魔石を取ってくるね。」

キリトが離れると、リリはもう一度剣を見るとやはり剣は死んだかのように重さや切れ味も落ちている。
このまま鑑定に出しても大した価値にはならないだろう。
彼が使うととてつもない力を発揮するというのに。

（こうなったらヘファイストス・ファミリアの紋章が書かれているあの鞘と一緒に持っていけば…）

「ぼーっとして、どうしたんだ？」

「いえ、なんでもないです！さ、どんどん先に進みましょう！」

そのためにはそれを手にする機会を作り出さないといけない。

少し準備が必要になるだろう。

歩きながらリリは盗む算段を立てていくのだった。

★☆★☆★☆

あれから、しばらく探索を続けた。

シルバーバックとの戦闘もそうだが、ここいら戦闘での経験値が大きく働き伸びたステータスのおかげでスムーズに攻略ができている。

一番の不安材料だった武器だが、ヘスティアからもらった剣も多くの戦闘をこなしているが刃こぼれひとつしない。

それどころか、切れ味は増しているようにも感じる。

これなら到達階層が増えていくのも早いかもしれない。

一番の問題はレベルだ。

１３階層からは適正レベルが２にカテゴライズされている。

そこに至らない限り、Ｌｖ．１のままじゃいずれ限界がくるだろう。

「なぁ、リリはどこのファミリア所属なんだ？」

「リリは《ソーマ・ファミリア》の所属ですよ。」

帰り道、キリトはリリにこんな質問をした。

聞くと結構あっさり教えてくれた。あまり問題ではないのだろうか。

もし、そうなると一層自分のファミリアの人といかないのか疑問になる。

リリに運んでもらってギルドの魔石換金所までいってお金にしてもらった。

「3…3万2千ヴァリスぅぅぅ?!!!!!!」

「おお、結構いったな！」

リリが大きく驚いている中、キリトがあまりにもあっさりいったのでお金を見て固まっている首を上に持ってくる。

それを見てキリトはニッコリと笑うだけだ。

「反応薄くないですか?!3万2千ですよ！普通の5人パーティーなんかより多いなんて普通じゃないです!?」

「ん？まだまだ！そのうちリリのその大きなバックパックを一杯にしてやるくらい魔石を貯めてやるからな！」

笑顔でそんなとんでもないことをいうキリトに開いた口がふさがらない。

しかし、それを実行できてしまいそうな力を彼は持っている。

「はい、これリリの分な。」

「ふぇ？」

差し出された金額は今回の額の半分入っている袋だ。

「そんな?!独り占めしようとか考えないんですか?!」

「ん？なんで？これからも二人で潜るんだ。パートナーとして当然だろ。明日はもっと期待してていいぞ！」

これが大真面目に言ってるからリリもどう反応していいか困る。
この方は本当に冒険者なのだろうか？
自分の知っている冒険者とは態度が根本が違うきがする。
強い。確かに強いのだ。そして、彼はしっかり強さを求めている。
けれど、その強さは名声や大金を欲しているそれではない。
一体彼はこの迷宮都市オラリオに、何を求めているのだろうか？

# 第16話

「こんにちは！」

「あら、キリト君。調子はどう？」

キリトはエイナに現状のダンジョン攻略進行を報告をするためにギルドに訪れていた。

「実は…」

この間からサポーターを雇ったことをエイナに報告した。

それで、ソーマ・ファミリアのことリリのことを聞いてみた。

「リリルカさんのことは情報ないけど、ソーマ・ファミリアについては知っているわ。」

なんでも、ダンジョンの冒険を主とするファミリアでお酒の製造を少しおこなっているそうだ。

そこまではおかしいところはないんだが…

「でも、冒険者の雰囲気が異様なのよ。何か必死にお金を稼いでいるみたいな…」

「お金…」

お金。

リリもお金を欲しがっていた。

ソーマ・ファミリアでは毎回何かしらノルマを課せられているのか？

「キリト様？」

「んっ！リリ？いつからそこに？」

「たった今です。ところで、そろそろ向かいませんか？」

「そうだな。それじゃあエイナさん、また今度。」

★☆★☆★☆

リリと一緒に攻略してから3日ほど経過している。
すでに第９階層に差し掛かっており、キラーアントなどのモンスターを相手にはだいぶ慣れてきていた。
本日１１体目のキラーアントを倒すと、

「キリト様、確かにお強いですがさすがにその剣に頼りすぎでは？」

「えっ？そうかな？俺としてはそんなつもりはなかったんだけど。」

「リリが、今回レベル１でこの辺りの階層相当の片手剣を持ってきたのでこれを使ってみてください。」

キリトは腑に落ちない感じだったが、リリに言われるままに手に持った剣を背中に収めて別の剣を受け取る。
その剣の軽さに驚いた。

「か、軽すぎないか？」

「ちなみに、多分切れ味も比べ物にならないとおもいますよ。悪い意味で。」

タイミングよく前方にキラーアントが現れた。
キリトはそのモンスターに狙いをつけて、斬りかかる。
すると、

「なっ!?こいつこんなに硬いのか?」

今まで切れていた甲殻もこの剣で斬るのは骨が折れそうだ。
この得物で戦うにはまず硬い甲殻の間にある柔らかい部分を狙うしかないのだろう。
しかし、それは《黒紫の剣》でも同じことをしていたし然程影響はない。

「せいっ!」

『ギィィィィィィィィ!!!』

剣がうまく間に刺さり、首を跳ねる。
そして、キラーアントは
灰になり魔石が残る。

「おお!さすがですねキリト様。その剣でそこまであっさり倒すなんて。」

「こいつとはもう結構な数の戦闘やったからね。」

「それにしてもですよ!普通はキラーアントの甲殻の隙間をあんなに綺麗に狙うなんＬｖ．１ではそうそういないです。」

（…これなら大丈夫そうですね。）

「あれ?君は…」

「あなたは…」

そこにいたのは剣姫、アイズ・ヴァレンシュタイン。

隣にはエルフの魔導師がいた。

「もうここまで来たんだね。」

「あなたに置いていかれるわけにはいかないからね。それで、あなたがそこまでボロボロになってるんだ。よほどすごいやつと戦ったんだろう？」

「うん…階層主を倒した。」

「しかもソロでな。まったくヒヤヒヤさせる。」

「ソロで?!」

アイズの隣にいたエルフから教えてもらった事実に衝撃をうけた。

階層主とは文字どおりその階層の主で、他のモンスターはいない代わりにそのモンスターの強さはしっかりステイタス、レベルを上げていてもそれだけでは撃破できない。

その名に恥じない強さを持つ階層主をよもやソロで撃破するとは噂どおりその強さは本物なのだろう。

彼女に追いつける日は来るのだろうか？

★☆★☆★☆

アイズたちと別れた後、リリはキリトに気になっていたことを聞く。

「キリト様って…その…剣姫と知り合いだったんですか？」
「え？ああ、以前にちょっとね。」
「へぇ、そうなんですか。あ、ちょっとキリト様にお願いが…」
「なに？」
リリがこうしてお願いを言うのは初めてだ。
一体なにをお願いされるのだろうと思っていると、
「明日1日お休みをいただけないかと…」
「なんだ、そんなことか。気にしないで休みたい時は言ってね。俺なんかそうやって言ってもらわないと休まないからむしろ助かるよ。」
キリトは笑いながら言う。
そんなことを言ってくるリリは再度思うのだ。
変なの、と。
どうも彼は他の冒険者とは違うのかもしれない。それくらいは理解できてきた。
しかし、彼との冒険もそろそろ終わりを迎える。
今はこのぬるま湯少しでも浸かっていたい。
そんな感情が生まれている自分に嫌気がさす。
自分がそんなことを思っていいはずがない。それだけ、自分は汚れている。
彼を見ていると余計感じる。彼は今の自分にはまぶしすぎるのだ。
「どうしたんだ、リリ？」
「なんでもないですよ。なんでも…ないです。」

（…）

そんなリリの態度にキリトはただ心配そうに見つめることしかできなかった。

★☆★☆★☆

1日開いて、次の日。

いつものように待ち合わせの場所に向かうと、リリの姿が見えなかった。

代わりに以前小人（パルウム）の女の子を追いかけていた冒険者達がそこにいた。

「あんたはこのあいだの…」

「お前か？ちっこいサポーターを連れているのは？」

「だったらなんだよ。」

「なら、気付いているだろうヤツの本性に。」

「なんのことかな？」

「とぼけやがって。まぁいい。それより、俺たちであいつをはめる。お前も手を貸せ。冒険者ならサポーター風情にいい気にさせておけないだろう？」

だまって聞いていれば好き勝手言う奴らにキリトの怒りがふつふつ湧いてくる。

「俺には関係ない。俺とお前達を一緒にするなよ。」
「ふん、調子乗りやがって。俺たちに協力しなかったことをすぐに後悔するからな。」
奴らはそういってこの場から離れていった。
それよりも、リリをはめると言っていた。
もしかしたら、ダンジョン内でなにか仕掛けてくる気なのかもしれない。
今日のダンジョン探索は十分に気を引き締めていいたほうがいいだろう。
「遅れてすみませんキリト様。」
キリトがそう考えていると、奴らと入れ替わるようにリリはすぐに現れた。
「いや、俺も今来たところだから。さ、今日も元気に行こうぜ！」
「…今日でさよならですキリト様。」
☆★☆★☆★
「今日は１０階層に行きませんか？」
この間まで7～9階層の間で戦闘を行っていた。
しかし、それより下に行かなかったのは１１階層からまた敵の種類及びダンジョンの性質がまたかわるからだ。
白い霧に覆われており視界が悪くなるのだ。
さらに、豚の怪物のようなオークと呼ばれる今までより大きなモンスターがエンカウントするのだ。

「構わないけど、いきなりどうして？」
「キリト様の実力なら問題ないと判断いたしました。それに、より下の階層でなら魔石の大きさも変わりますし。」
「そっか。わかったならそうしよう。」

そして、１０階層の入り口まで問題なくたどり着く。
やはりそこには霧がかかっており、見えづらい。
油断するとリリともはぐれてしまいそうだ。
「リリ、俺から離れるなよ。はぐれたら大変だからな。」
「ええ。わかってます…。」

バリーン。
そんな音がキリトは聞こえた。
まるでなにかガラス製の容器が割れたようなそんな音。
「リリなにか落とした？」
「いえ、リリはなにも知らないです。それよりオークがこちらに向かってきてます。」
「みたいだな。」

モンスターを確認したキリトは剣に手をかけようとした。
だが、無情にも剣を手に取ることはできなかった。
「ごめんなさい、キリト様。」

「なっ?!がっ！」

なぜなら、リリの手の剣から火が発生しそれを受けて壁に吹っ飛ばされたからだ。

魔剣。剣に魔力を宿しそれを振るうだけで魔法が発動する代物。

ただいくつかデメリットもあり、何度か使用すると剣が折れてしまうだ。

それゆえかなり高価なものとなっている。

威力は本来の魔法より劣ると言われているが、それでも至近距離で受けたキリトは身体をうまくうごかせない。

その間にリリはキリトの剣を鞘ごと取っていく。

「リリ…どうして？」

「すみません。私にはどうしてもお金が必要なんです。この剣を売れば相当な額になるでしょう。だから…」

そういうリリの顔は悲しそうだった。

そんな顔をキリトもまた悲しい表情で見つめる。

「先ほどの音の正体は、モンスターが寄ってくる成分を含む液体です。じきにここに多くのモンスターがやってくるでしょう。以前使っていただいた剣は置いていきます。この剣を使って生き残ってくださることを祈ります。」

そう言い残してリリは走り去っていく。

まずい、このままリリを一人で行かすのは危険だ。

先ほどの冒険者たちが待ち伏せしているかもしれない。

こんなことなら、来る途中で忠告しておくんだった。

キリトは重い身体をなんとか起こして、リリが置いていってくれた

この少し頼りない剣を手に取る。
そして、すでに囲まれているオークに向けて剣を構える。
「お前たちの相手をしている暇はない。そこをどいてもらうぜ。」
狙うは一撃で仕留めることができる弱点魔石だ。
現状魔石を回収する余裕はない。
なら、それを破壊することでモンスターを早急に倒すことが最優先だ。
エイナの情報だと、二足歩行をするモンスターの多くは胸のところに埋まっていることが多いらしい。
キリトはオークが持つダンジョンから生成される自然武器（ネイチャーウエポン）である斧から繰り出される攻撃をうまく受け流して懐に入る。
そこで剣をオークの胸につき刺そうとするが、うまく刺さらない。
刺さっても若干場所がずれるのだ。
キラーアントでの戦闘ではまだギリギリ使えたがこいつ相手だと少しきつい。
しかも、敵はまだぞろぞろ現れる。
このままだとリリの前に自分がくたばってしまう。
「なにやってるのよ。」
すると、突然聞こえてきた声のあとにオークの一体が灰となって消えた。
それに気をとられたキリトは背後からのオークの接近に気がつかなった。
「しまっ…！」
「おっと！あぶないよ！」

そのオークの攻撃を受け止めたのは黒い髪に赤いバンダナをしている少女。
そして、いつのまにかとなりに近づいてきていた青い髪に目元がすこし鋭いこの少女。

「シノン…それにユウキ…。なんで…ここに？」

「そんなことは今はどうでもいいでしょ？急いでるならさっさと行きなさい。」

「ここは僕たちに任せて！」

シノン、ユウキの順に背中を押されキリトは頷く。

「ありがとう二人とも。今度ゆっくり話そうぜ！」

キリトはこの場を二人に任せて走り出す。
そこで、もう一人誰かとすれ違う。
首を動かして確認すると、金髪の女の子だった。
見間違うはずがない。彼女だ。

「…行って。」

「ああ！」
キリトは必死に走りだす。
もう誰も死なせないために。

# 第17話

「がっ！」

「見つけたぜ～。まさかこんな簡単に見つかるとはな。」

キリトから剣を奪い、地上に戻ろうと階層を上がるとそこにいたのはソーマ・ファミリアのメンバーだった。

まさかこんなにタイミングよく出くわすなんて…。
いや、おそらくこれは計画されていたものなのだろう。
あの時彼に話しかけていたのはこれが目的だったのか？

痛みで思考がまとまらない。
なんとかしてこの場を切り抜けなくてはならないのに。
すると、彼らが持つ袋がなにやら動く。

「ん？これが気になるか？」

言うより早いかその袋の中身を見せてくる。
すると中に入っていたのは、

「キラーアント?!そんなキラーアントは…」

「そうだ、瀕死になったこいつからの体液は仲間を引き寄せる。これだけやればわかるだろ？死にたくなければ、お前が溜め込んでる金品全部よこしな。」

「くっ…」

リリが今まで何のためにお金を溜め込んだのか？

それはこのファミリアを抜けて自由になるためだ。
それなのに、そのファミリアの人間にお金を渡すとはなんて皮肉だろう。
だが、ここで死ぬわけにはいかない。
彼を裏切ってここまで来たのだ。今さら引けない。

「これを…。ノームの貸金庫の鍵です。お金は全て宝石に変えています。」

「それだけか？」

「あと、この魔剣です。」

「あとはないのか?!」

「ひっ！あ、ありません！」

「嘘つくんじゃねえ！その背中にある剣はなんだ?!」

リリの背中にあるキリトの剣を無理やり奪う。
鞘を抜いて剣を調べるが刀身が死んでおりただのガラクタだと感じたのだろう。
機嫌を悪くして、剣を叩きつけようとする瞬間鞘にあるエンブレムが目に入った。
それはあのヘファイストス・ファミリアのエンブレムであることはすぐに分かった。

「なんだ？この珍品は？なんでこんなクソ武器にヘファイストスのエンブレムがあるんだ？答えろ！」

「その剣を返してください。」

「あん？」

「その剣に触るなぁぁぁぁぁ！」

リリ自身も初め自分の行動を理解できていなかった。
しかし、身体は勝手に動く。
だけど、ホントは心の奥底ではわかってた。
ホントは誰かに認めて欲しかった。自身の存在を。
彼は、キリトは認めてくれたのだ。サポーターである自身を。同じ冒険者だと。
あの剣まで取られたら全てをなくす。そんな気がしたのだ。

リリは必死に剣を奪った奴の腕にしがみつく。
だが、奴らの方が当然ステイタスが上だ。
すぐに振り落とされる。
けれど、めげずにまた腕にしがみつく。

「しつけえ！」

「ぐふっ！」

いよいよ痺れを切らしたのか、リリに殴りかかる。
それを奇跡的にうまくかわすと、殴りかかる動作のために剣を持つ手が緩んだところに噛みつき、剣を奪い返す。

「テメエ！殺してやる！」

「おい！そろそろここを離れないと俺たちまでやばいぞ！」

「ちっ！まぁ、いい。せいぜいアリンコどもの餌にでもなるんだな。」

奴らは今のやりとりの間で集まったキラーアントに囲まれる前に逃げ出していく。
すでに逃げるだけの体力も気力も残っていない。
ここでどうやらリリの人生は終わるのだろう。
出来ることなら彼に謝りたかった。もちろん許されるとは思っていない。
人間死ぬ間際には走馬灯を見ると言うが、本当だった。
彼との冒険があんなに楽しかったなんて、この瞬間まで気づかなかった。
あんなに辛い人生だったのに今は彼との楽しい思い出しか浮かんでこない。
最後まで最悪だ。
死ぬなら死ぬでそれでいいとも思った時期もある。
それなのに、今はもっと生きたい彼に会いたいと思ってしまうのだ。

「さよなら、キリト様。ごめんなさい。」

迫り来るキラーアント。
だが、唐突に歩みを止める。リリを囲むキラーアント後ろの方でいきなり仲間が消えたのだ。
キラーアントにとって脅威としての認識がそちらの方に移ったのだ。
その者とは、

「リリ！生きてるか?!」

「キリト様…。…なんで。なんで?!」

「待たせたな！」

☆★☆☆★★☆
ー死なせない。

『ありがとう、キリト』

死なせない。

『ごめんね、キリト君。』

ー絶対に死なせない！

キリトは走る。
今までリリとのダンジョン攻略での経路の傾向からどの道を通るかおおよその予想を立てる。
そこに向って走り出す。

『ー燃やせ』

心の中で何かが語りかける。
その正体をなんとなくはわかっている。

『ー己の想いを剣に込めろ』

これは自分の声だ。
自分では気づいていなかった新しい自分。
あの本は確かに自分の中の何かを変えていたのだ。

「待たせたな！」

どうやらギリギリ間に合ったらしい。

しかし、状況は危険だ。
キラーアントの数が異常だ。
「燃やせ、己の想いを込めろ…か。」
やってみる価値はある。
己の闘志を刀身に込める。
剣は武器である。しかし、ただの道具ではない。
自分の命を預けるパートナーのようなものだ。
『それが答えか？』
ーそれが答えだ！
「はあああああ！」
キリトが自身の答えを見出したとき刀身に炎が纏っていく。
キリトの答えは結局は自分の力は剣であるということだ。
剣の力をさらに高めること。
さらにここで剣技を発動させる。
水平四連撃スキル《ホリゾンタル・スクエア》
キラーアント4体にそれぞれ攻撃を当てると、刀身からの炎がキラーアントに燃え移り他のキラーアントを巻き込んでいく。
ーこれならいける！
キリトは再び、剣技を発動させる。
今度は違うイメージをする。
そうだ、予想が正しければイメージするもので魔力として送られる種類が変化し剣に付加される魔法も変わる。

今度は静かなる闘志をイメージし、敵の弱点に正確に射抜く。
剣先をキラーアントの甲殻の隙間に突き刺し、抉っていく。
その際に刀身から冷気が発し、キラーアントの体内が凍りついていく。
凍りついたものを体術スキルである《閃打》で打ち砕いていく。
ー次！
次々とモンスターを倒していく。
その度にキラーアントらはキリト対しての脅威度を上げていく。
そして、いつの間にかリリの周りにいたモンスターはキリトを標的に変えて襲ってくる。
リリからヘイトを稼ぐことに成功した。それはいいことなのだが…
「少し多すぎるな…」
ダンジョンの地面から壁まで視界がキラーアントでいっぱいだ。気持ち的にはしばらくはこいつの姿を見たくはない。
そんな悠長なことを思っている場合じゃない。まず、手数がこのままじゃ足りないのだ。
いくら魔法を剣技に付加させようとしても、発動させると硬直が発生してしまう。
それを《体術》のスキルで補っていくには限界がある。
一体どうすればいい？
★☆★☆★
（凄い！）
リリは子供みたいな感想だがそう思わずにはいられなかった。
初め魔剣を使っているようにしか見えなかったが、剣から直接魔法

が出ているのではなく彼の魔力を剣に纏わせているみたいだ。
その圧倒的な威力にキラーアントが倒されていく。
それにしたがってリリに集まっていたものが減っていく。
だが、反対にキリトのほうに次々と群がっていく。

そうだ。確かにあの魔法は凄い。
だが、通常の魔法と違い剣で当たる範囲でしか効果がない。
このままじゃ単純な数が原因でいずれ限界がくるだろう。

（何かないだろうか？）

リリにできること。
それが彼を救うこととなると思い浮かばない。

（どうしたら…）

ふと手にある重さを感じた。
そう、先ほど彼から奪ったもの。彼の剣だ。
リリが一人で持っていても何も力を発揮しないこの剣が彼を救う切り札になる。
問題は彼がこれを手にしたところで手数が増えないというこだ。
彼が剣を二本扱えるというなら話は別だが…

（賭けてみるしかない！）

彼は冒険者になってからたった半月ここまで成長している。
それにこれはリリの偏見だが剣での技術だって新人とは思えないものだ。
キリトを信じるしかない。

「キリト様！これを！これを受け取ってください！」

# 第18話

「くっ…」

そろそろ限界が近づいてる。

この魔法のおかげでなんとかなっているが、徐々に攻撃をかすってくるもの増えてきた。

そして、魔法自体が初めてであるキリトは精神力の最大値が少ない。

このままだと魔法の使い過ぎで精神力が疲弊した状態である精神疲弊（マインドダウン）を引き起こすだろう。

なんとか活路を見出そうと考えてはみるが、こうも戦闘に余裕がないと思考がまとまらない。

そんな時、

「キリト様！これを！これを受け取ってください！」

リリから投げられたもの。それはキリトの《黒紫の剣》。

キラーアントの上を通過していく。

だが、おそらくこれは届く前に奴らの群がっているところへ落ちる。

ー　一か八かだ！

キリトは剣を受け取るために少し助走をつけて跳躍をする。

キリトはその剣を鞘から取り出す。

そして、オラリオに来てから使うのは初めてとなる剣技を発動させる。

空中で回転しながら剣をモンスターに向かって叩きつける剣技（ストームストライク》。

真下にいたキラーアントの数体は灰となって消滅した。
他の虚をつかれたキラーアントはキリトが着地した地点から一時的にスペースを空ける。
そのおかげでスキル硬直の間、攻撃されずに済んだ。
一瞬虚を突かれたが、数で圧倒的に勝っているキラーアントの群れは再びキリトに襲いかかる。
しかし、先ほどの違いはキリトが剣を二本装備しているのだ。
剣技での隙を体術で補っていたが、体術では決定打にかけていたものを二本目の剣でとどめをさせるようになり、戦況が大きく変化した。

右手にある剣で一体目を倒す、その際に二体目がやってくるのを左手の《黒紫の剣で》で受け止め、再び右手の剣で倒す。
次々と前のペースより早く倒せるようになったが、まだ多くのキラーアントがいる。
もはや、こいつらと長く相手をする気はキリトにはない。
今、片手剣を二本装備しているいわゆる《二刀流》だ。
なら、剣技も変わってくるはずだ。
試す価値はある。

キリトは両手に持つ剣を左脇に抱えるように構える。
が、

「あ、あれ？」

なんにも反応がない。
もしかするとこの構えじゃなかったか。

『ギシャアアアアア！』

あちらさんは待ってくれるはずなんかない。

キリトは仕方なく路線を変更して片手剣剣技での範囲技、水平に斬りつける《ホリゾンタル》を発動させる。

「せやあああ！」

『ギィィィィィィィィ！』

「まだまだぁ！」

そうだ。もう一つの試み。

それは、剣技の連続の発動だ。

剣技は発動のモーションが必ず存在する。

それを剣技の発動中に次の剣技のモーションをすれば硬直なしで剣技ができるといううことだ。

今回は初めての試みだ。この体制で一番繋げやすいのは先ほど使った《ホリゾンタル》。

それに加えて《黒紫の剣》に魔法を纏わせるあの魔法を使う。

今回加えるのは火。奴らに次々と燃え移らせるべくありったけの魔力をつぎ込む勢いでモンスターにたたきこむ

「終わりだ！」

キリトのありったけの魔力をつぎ込む勢いでモンスターに叩き込む。

そして、すべてのキラーアントに燃え移り灰とかす。

「ふう～…。」

ようやく戦闘が一区切りつき、ため息をつきながら剣をしまう。

「さっきは助かったよ。ありがとう。リリは無事？」

そして、さも当たり前のようにリリに話しかけ心配そしてくる。
そんな彼に対して本当はうれしいはずなのに、どうしても感情が言葉が彼への疑問で溢れてくる。

「どうしてなんです…」

「ん？」

「リリはキリト様を魔剣で攻撃しました。そして、さらにはあなたの剣まで盗みました。」

「うん。」

「それだけじゃありません！報酬のお金を半々ではなく６：４にしてたりしていました！調子に乗って７：３にした日もあります！」

「うん…って７：３?!そ、それは気づかなかったな。はは…」

「リリは悪い奴です！盗人なんです！なのに、どうして？どうしてそんな平然としていられるんですか?!」

本当はなんにも気づいていないように装ったほうがよかったかもしれない。
でも、今まで人を騙し騙されきた彼女だ。
キリト自身、自分の嘘などすぐにバレるだろう。
だから正直に答えることにした。

「本当は初めから薄々は気づいていたよ。あのぶつかった小人（パルウム）がリリだってことも。そして、君がお金が欲しがっていたのも。冒険者を忌み嫌っていることもね。」

「え？」

「ソーマ・ファミリアの噂は少しだけど耳にしていたからね。何度か彼らを尾行したり、あのリリが休みが欲しいって言った日は悪いと思ったけど後をつけさせてもらったよ。」

「そう、だったんですか…。なら、なおさらキリト様は私とダンジョンに？」

「君が俺と同じ顔をしていたからだよ。」

その答えにリリはよくわからないと言った風に首をかしげる。

その顔をみたキリトは微笑みながら話す。

「俺は君のすべてを理解することはできない。でも、時折みせるあの暗い表情は見覚えがあったんだ。」

「…」

リリはキリトの言葉ただただ黙って聞く。

なのでキリトは続けて話す。

「だからわかったんだ。リリはほんの少し間までの俺と同じだって。この世に絶望しきってなにもかもがいやだったあの日の自分と。でも、ある人が俺に希望をくれたんだ。だから、今度は俺が君に希望をあげたいんだ。冒険者も捨てたもんじゃないぞってね。」

「無理です。今更冒険者を信じるなんて…」

そう言うとリリはキリトに背を向け走り出す。

「リリ！ちょっと待っ…くっ」

先ほどの魔法の酷使ですでに精神疲労（マインドダウン）寸前だったキリトは立ちくらみを起こしその場に座り込む。

そして再び顔を上げてリリの姿を探すがすでに目に見えるところにはいなかった。

★☆★☆★☆★☆

やってしまった。

キリトに対してあれだけのことをして、さらには逃げ出してしまったのだ。

いよいよもって愛想つかれてもなんら不思議ではない。

それなのに、

「それなのにどうしてこんなところに来てしまったんでしょう…」

そこはいつもキリトとダンジョンに行くために決めていた待ち合わせ場所だった。

あの時冒険者なんて信じられないとは言った。

けれど、彼なら…

「リリルカさん、リリルカさん。」

そう、彼なら。

「冒険者が信じられないなら俺を信じてくれないか？」

「いいんですか？リリ、またキリト様を裏切るやもしれません。そんな奴を側において。」

「俺はリリを信じているよ。だからもう一度俺を信じて欲しい。」

そう言うと、彼は手を差し出してリリに言うのだ。

「俺ともう一度一緒にダンジョンに潜ってくれないかな？」

今、リリはどんな顔をしているでしょうか？

泣いているんでしょうか、それとも顔を真っ赤にしているのでしょうか。

多分、両方ですね。

彼へのもう答えは出ています。

もう一度この世界で生きていくために、リリは彼の手を取るのだった。

# 黒の剣士
# 第１９話

ここはバベルの塔の最上階に位置する部屋。
ここに住居を構えるのは美の神フレイヤ。
そして、側には青いコートを着ている者が一人いる。

「ここ数日で彼は見違えるように強くなったわ。」

「ステータス的にはな。だが、このままじゃランクアップには時間がかかるな。」

「そうね…。彼にはもっと早く強くなってもらわないと。」

「それに関しては俺も同意する。あいつにはもっと強くなってもらないといけない。」

「任せてもいいのかしら？」

「ああ。」

その者はその場から静かにその場を離れる。
フレイヤには彼の魂の輝きを見ることを楽しみにしている。
だが、あの子の目的は一体なんなのか？
常にコートについているフードをかぶっていて表情が読めないのだ。

「まぁ、でも…」

そんなことはどうでもいい。

彼に対して恨みなどを感じなかった。
ただ、彼を強くしたいという目的は同じなのだ。
だが、

「あの子もいつか私の虜にしてあげたいわね。」

今はまだその時ではない。
時が来るのを待つのだ。

★☆★☆★☆

「それにしても…」

「なんですか？」

今日はリリをヘスティアに会わせようと思い、現在キリト達のホームに連れて行っている最中だ。
しかし、改めて見て思ったのだ。

「まさか変身できる魔法があるとはね～。いや～いろんな魔法があるもんだなと。」

「はい。これでリリをリリとは誰も思わないでしょう。」

いや、それはどうだろうかとキリトは思う。
なぜなら、今のリリの変身した姿は小人（パルゥム）の姿にただ、犬耳をつけただけのようなものだ。
知り合いから見れば一目瞭然なのだが…。

「しかし、キリト様？本当にリリはキリト様と一緒にいてよろしいのでしょうか？」

「ん？なんで？」

「だって…リリは一度キリト様を裏切りました。そんな私を、その…なにか罰を与えて下さらないと示しがつかないと」

「なら俺からリリに罰をやろう！」

「は、はい。」

「俺のことを様づけで呼ばないこと。キリト様なんて背中の方が痒くなってしかたないんだよな～。」

キリトがそんなことを陽気な口調で言うもんだから、開いた口がふさがらない。

そんなことを罰と言うのだこの人は。

やっぱり少しおかしな人だ。

「そんなことはできません！」

「なら、この話はなしだ。リリは示しがつかないまま俺と一緒に冒険することになる。」

「うぅ…ずるいですよ！キリト様！」

「はい、それ早めに直してね。ほら、着いたよ！」

隣でまだぶつくさ何か言っているが、ようやくホームであるボロい教会に着いた。

そこにはすでにヘスティアが教壇の上に座って待っていた。

「初めまして、神ヘスティア。リリルカ・アーデと申します。」
「やぁ、君が噂のサポーター君だね？話は，僕の，キリト君から聞いているよ。」
「は、はぁ…」
なにやらキリトの名前を呼ぶ時だけ妙に強調されていたが、意味がわからず混乱するリリ。
それを悟ってか、今度は露骨にキリトの腕に抱きつき話を続ける。
「いいかい、サポーター君。僕は君のことが嫌いだ！一度僕の大切な家族であるキリト君を騙したのに関わらず、一緒にいようとするんだからね！」
「そ、それは…」
「か、神様！そんな言い方は…」
「キリト君は少し黙ってて！」
キリトがヘスティアを止めようと口を挟もうとするが、ヘスティアはそれを止める。
そして、わかっていると言わんばかりにキリトにアイコンタクトを送るのをみて、任せるしかないとキリトは感じた。
「人がいい彼のことだ。何にも言わずにただ黙って許されて罪悪感を感じてるだろう？そんなのは僕からしたら甘えだね。そんなに許されたいなら僕が罰をやろう。」
任せようと思っていたがこれはまずい流れかと止める覚悟をした

キリト。
だが、罰の内容は予想外のものだった。
「キリト君に恋愛感情を持たないことだ！いいね！それが罰だ！」
「「なっ!!!!」」
全くの予想外の言葉に二人で固まる。
ぶち込んできた当の本人は清々しいくらいなドヤ顔である。
少しの間固まっていたリリは徐々に思考を取り戻し、そしてニヤリと笑ってヘスティアとは反対に移動して、キリトの腕に抱きつく。
「なっ！何をしているんだ君は！今の僕の言葉を聞いていなかったのかい?!」
「残念ですがヘスティア様、リリは既に罰をいただいています。」
「な、なんだと!?それは一体なんだ?」
「それは、様を付けずにお呼びすることです。ですよね?キリトさん?」
「ん?お、おう。」
「むー！キリト君！」
「あ、あはは…。俺、ちょっとギルドに用があったの忘れてました。行ってきますね！」
言うがはやいか、キリトはヘスティアとリリから離れ、一目散に走りだす。

「あ、キリト君！逃げるな！あとでおぼえてろよー!!!」

★☆★☆★☆

ギルドにやってきたキリトは早速エイナを探す。
すると、エイナを見つける前にギルド内には見知った三人の姿を見つけた。

「三人はどうしてここに？」

キリトが見かけた三人は、あの日オークの群れを引き受けてくれた三人。
アイズ、シノン、ユウキの三人だ。

「ダンジョンの下層で少し気になることがあったのよ。それをギルドに報告に来ただけ。ま、今のあんたには関係ないわ。」

「ひどい言い草だな、シノン。こうして、ゆっくり話せる機会なんか久しぶりだろうに。」

「久しぶりだね、キリト！元気にしてた？」

「ああ。ユウキも元気そうでなによりだよ。」

三人のなんとも言えない身内雰囲気にアイズはどうにも居心地が悪い。
それを悟ってかどうかシノンがこんなことを提案してきた。

「あんた、この先暇の日とかあるのかしら？」

「ん？そうだな～…。ダンジョンに行くか行かないかはこの間までその日に決めていたけど、今はサポーターがいてその子と決めてるからなんとも言えないな。」

「ふーん…。また女の子なのかしら？」

「なんで知ってるんだ？」

「はぁ～…」

相変わらずの天然ジゴロに頭を抱えるシノン。
こいつは昔からこういうところ変わらないのだ。
しかし、困った。
こうなるとシノンが考えていたことが実行できない。
なんとかしてこいつの時間を確保しないと。

「なら朝とか夜は？ダンジョンに行く早朝とかなら空いてるんじゃないかしら？」

「あ、空いてるには空いてるけど…。俺、起きるの辛いんだけd「あんたの意見は聞いていないわ。」

「俺の時間の話してたんだろう？」

「朝なら空いてるのよね？なら、アイズの相手してあげてくれない？」

「相手ってなにをすればいいんだよ？」

「もちろん戦いよ。私たちのファミリアは今遠征前でダンジョンでの激しい戦闘をさけないといけないのに、アイズったら目を話すとすぐにダンジョンに行ってしまうんだから。」

シノンにジト目で睨まれてアイズはそっとシノンから目をそらす。
「だから、今のあんたなら体慣らしに最適ってわけよ。」
そしてキリトはその提案に過剰に反応する。
「俺としてはレベル5であるアイズとの戦闘を経験できるのはうれしい。けど、さすがに今の俺とじゃ準備運動にもならないんじゃないか？」
「そんなことないよ！キリトなら十分アイズの準備運動になるって！それにアイズは今レベル6だよ！」
ユウキの何気ない言葉にキリトはまたもや驚かされた。
レベル6なんて現在到達してる冒険者なんか、指で数えれるくらいの数しかいない。
そのレベルに彼女は到達したのだ。
「へ―…」
「今、戦ってみたいとか思ったでしょ？」
幼馴染二人が声をそろえて突っ込まれて、内心「うっ…」っと唸ってしまったが、冷静に装う。
そして、今度はキリトから彼女に申し込む。
「気が変わったよ。もし、アイズさえ良ければ俺と戦ってくれないか？」
キリトからの申し込みにアイズは答える。

「…いいよ。ただし、遠征までの間毎朝私との戦闘に付きあってもらう。それでいい？」

「もちろん！」

キリトとアイズの戦闘訓練が決まると、一人腑に落ちないといった感じの子が一人。

「いいな～！僕もキリトと戦いたい！」

「ユウキはだめよ。あんたどうせ朝起きれないじゃない。」

「そ、そんなことないもん！起きれるもん！」

★☆★☆★

「ユウキ起きなさい。約束の時間よ。」

「うーん…あと、５分。」

「はぁ～…」

案の定といったところか。
ユウキはやっぱり寝坊だ。
彼女これはダンジョンの遠征でもやるから困りものだ。
結局シノンが背負ってあることになったりするのだ。

「先に行ってるわよ。」

今日はわざわざまつ必要がないので先にいってることにした。

既に彼らは約束の場所で戦闘訓練が始まっているらしく、シノンは遠くからそれを眺め見る。
すると、案外彼はアイズの動きについていけている。
昔から反応がユウキと同様に優れていたのを思い出し、妥当かなともシノンは思ったが、どうにも動きがぎこちない。
まるで反応できているのに身体が動いていないように思えた。
その理由はすぐにわかるものだ。

「シノン！置いてかないでよ！」

「ユウキが寝過ごすから悪いのよ。それよりも、もう始まっているわ。」

「ほんとだ！ん？」

どうやら、彼女も気づいたみたいだ。
さすが同じ剣士だ。なにが悪いのかすぐに見極めらるらしい。
さらには、彼女もキリト同様かそれ以上に反応がいいだけはある。
もしかしたら同じ欠点を克服してきたのかもしれない。

「どうする？」

シノンはがユウキに問うと、

「ちょっとアドバイスにでも行こうか！」

★☆★☆★

明朝。
アイズとの戦闘訓練の集合場所に着くと、既に彼女は待っていた。
彼女はなにも言わずにただ、剣を抜いて剣を収めていた鞘を向けて

くる。
彼女がもし剣で戦うなら、おそらくキリトはすぐに死んでしまうだろう。
それだけの力の差は確実にあるのだ。
彼女が鞘で戦う選択をするのは当然のことである。
ただ、頭でわかっていてもそれに対して不満が出てしまうのは剣士としての性なのだろうか？
キリトは《黒紫の剣》を構えると、すぐさま彼女が向かってくる。
その速さは今まで戦ってきたどのモンスターなんかよりも速い。
ふりかざされる鞘をキリトが必死にパリィしていく。
すると、一瞬目の前から消えたように見えるスピードで背後に回って鞘をキリトに向けて突く。
それを目で追うが、身体が反応しない。

「がっ！」

見事に脇腹に突き刺さり、キリトは後方に吹っ飛ばされる。
地面を転がってうまく体勢を立て直す。
そして、今度はキリトからアイズに向かっていく。

「はあぁぁぁ！」

なるべく隙を作らないように大振りはしないように攻める。
しかし、全て余裕でパリィされ攻めきれない。

ーもっとだ！もっと速く！

剣の振るうスピード上げる。
自身の力のステータスの限界まで。
剣戟の応酬が始まる。
スピードの差を少しでも埋めるべく体術を利用するが、アイズも体

術を使って防いでくる。
残された駆け引きで出し抜けないか試し見るがそれも決まることはなかった。

「そろそろ、決めにいくよ。」

この言葉を合図にアイズの怒涛の攻めが始まった。
突きの連発に必死に防ごうとキリトは躍起になるが、全て防ぎきれずに何発かもろに入る。
くらう度に反応が鈍くなり、また当たる。
もはや、負の連鎖だ。
一瞬よろめいて後ろに下がると、いつのまにか懐に詰め寄っていたアイズに鳩尾を射抜かれてしまった。
その瞬間、キリトの意識は途切れてしまった。

# 第２０話

「いつまで寝てるのよ。」

「いてっ！」

いつの間にか気絶していたキリトはどうやらシノンにビンタで起こされたらしい。

このまま寝て過ごしてもいいくらい寝心地はよかった。

それもそのはずだった。

頭の柔らかい感触、それはアイズのふとももであったからだ。

「なっ?!」

キリトは反射的に体を起こして、アイズとの距離を離す。

その光景を見ていたシノンとユウキはニヤニヤとこっちを見てくるのだ。

キリトは一度「こほん」という咳払いをしてから二人に尋ねる。

「二人はいつからここに来たんだ。」

「１０分まえくらいかしら?」

シノンが時計台を見ながら答える。

そして二人の身なりを観察していると、ユウキの髪が少し跳ねていた。

なるほど、

「ユウキがまた寝坊したのか。」

「な、なんのことかな?」

「寝癖、ついてるぞ？」

「はわわわあわわ！」

慌ててユウキがシノンに聞いて寝癖の位置を教えてもらい、頑張って手で直そうとするがなかなか直らない。

もうあきらめたのか、少しふくれっ面になりながら寝癖を手で押さえるという形で治ったらしい。

「それじゃあ、再開しますか。」

「そのまえに。」

始めようとするキリトをシノンが止める。

そして、先ほど気づいたことを指摘する。

「つまり、俺が相手を目で追いすぎてるって言うのか？」

「そうだね。僕も昔キリトと同じことをしていたからわかるけど、目で追えるということはそれだけ反応に優れているってこと。今のアイズは本気を出していないとはいえ、それでもレベル1の冒険者からしたらまず経験しない速さだ。それを目で追えているキリトは凄いんだよ。でもね、目で追いすぎているいるんだよ。だから反応するのにワンテンポ遅れるんだ。」

「なるほどな。言われてみればそうかってなるけど、あの早い剣戟なかで意識してやるとなると…。」

「そこはキリトががんばるしかないね！」

「うっ…」

さらっとユウキに言われると、やらざるを得ないだろう。
確かにここで変な癖を直さずに下の階層向かうわけにはいかない。
今よりもっと強くなるためだ。なんだってやってやる覚悟で挑むしかない。

「改善点はわかった。さっそく後は実戦で修正していくしかない。アイズ頼めるか？」

「もちろん。」

キリトとアイズは再び剣と鞘を打ち合うのだった。

☆★☆★☆★☆★

「……」

「……」

「キリトさん？最近ダンジョンに入る前からなんでぼろぼろなんですか？」

「秘密の特訓のせい…かな？」

「？」

キリトの曖昧な答えにリリは首を傾げる。
ここ数日キリトはダンジョンに来る前からすでにボロボロなのだ。
一体なにをしているのだろうか？
そんなやり取りをしていると、周りにはモンスターが現れていた。

「リリは下がって。」

「はい！」

キリトはリリを下がらせると、新たにダンジョンから生まれたのかキリトを囲むようにさらにモンスターが現れる。

キリトはゆっくりと背中から剣を抜く。

視界を広く持つ。

それはアイズとの特訓で毎回意識していること。

右斜め後ろの奴が襲ってくるのをしゃがんで躱すと、さらに左から別のモンスターが襲ってくる。

しゃがんでいることを利用して、剣を右下から左上に切り上げる。

一体を屠ると、モンスターたちの動きがさらに活発となり、次々と襲ってきた。

キリトはそれに対して、あくまで特訓でのことを復習するように冷静にその攻撃を防ぎ、倒していく。

すると、

「キリトさん！前方に新たにオークが！」

ここでオークが現れた。

それも3体は視認出来るが、霧の奥にはもう2体はいそうだな。

「一度撤退をしたほうがいいかと。」

「このくらいなら問題ないよ。もう少し待っててくれる。」

「なっ！ちょっと、キリトさん!?」

オークに合流した他のモンスターが徒党を組んで襲ってくる。

しかし、キリトに焦りなどはない。
右手に持っている剣をもういちど強く握りなおして、モンスターの群れに向かっていった。

☆★☆★☆★

「す…すごい…」

「ん？」

あれから１０分程度でモンスターが魔石へと変貌していた。
その戦闘を後から見ていたリリは驚いていた。
ここ数日でキリトが急速に強くなっているのだ。
それはステータスだけの話ではなく、技術の上でも当てはまっていた。
一体なにをすればここまで急激に向上したのか？

「キリトさんはすでにレベル1の冒険者の中では群を抜いていますよ！一体特訓ってなにをしているんですか？」

「えっと、実は…」

キリトが早朝にアイズとの特訓をしていることを簡単に説明した。
始めはじと目でこちらを睨んでいたが、なにか諦めたかのように一度「はぁー…」とため息をつく。

「なるほど。キリトさんの最近の戦闘での向上の理由はわかりました。現にこうして目に見えて成果がでてる以上その特訓を全面的に否定することはしませんが、剣姫は《ロキ・ファミリア》の方です。しかも、ファミリアのなかで主要メンバーに位置していますからあんまりこのような接触は控えるべきではないでしょうか？」

リリが言っていることはもっともだ。
ここオラリオではファミリア同士での交流はあまり行われていない。
それはファミリアのメンバーでの問題や神様同士での問題もある。
今回の場合は《ロキ・ファミリア》という大御所のファミリア、片や二人だけのファミリアである。
《ヘスティア・ファミリア》に肩入れしているなどの噂がたてば、周りのファミリアから反感を買う可能性が高い。
さらには、神様二人ヘスティアとロキは犬猿の仲で有名だ。
どれくらい仲が悪いのかキリトにはまだ分からないが、あまり知られない方がいいだろう。

「ロキ・ファミリアは二日後に遠征らしいんだ。だから、それまでの特訓ってことになっているよ。」

「それならいいんですが…」

リリはそれっきりぶつぶついいながらなにか考え込んでいるみたいだ。
やはり、別のファミリアであるリリはリリで色々思う所があるのだろうか？

「そういえば、リリは明日お休みするんだっけ？」

「あ、はい。お世話になっている身なのでお手伝いをしたいと思いまして…。申し訳ございません。」

「いや、気にしないでいいよ。それじゃあ、次のダンジョン攻略は二日後で大丈夫？」

「はい。問題ないです。」

「おっけー！なら、今日は明日の分までもう少しダンジョン探索していいか？」

「はい、お伴します！」

キリトとリリはダンジョンを今いる所からさらに奥に進んで、ダンジョン攻略を続けていった。

☆★☆★☆★

「ふっ！」

「ぐっ！」

キン！という金属音放ちながら今日もまたアイズとキリトとの剣戟音が響いている。

特訓を始めてから数日経っていたが、これも今日で終わりだ。

キリトは今日こそ彼女に一撃を入れようと気合を入れて臨んで来たが、さすがレベル６だ。

自分の攻撃がこうも簡単に防がれると少し自信を失いそうになるが、前より確実にこちらも向こうの動きに合わせられるようになってきている。

「…っ！」

その剣戟の最中、一瞬の隙を見つけた。

もうここしかない！

右手にある剣を後方に引き溜め、それを前方に向かって突き出す。

片手剣剣技重突進技《ヴォーパル・ストライク》。

通常のレベル1ではまずありえない身体の動きをスキルで可能にしている。
これ以上の動きをキリトには出来ない。
だが、その隙を突こうとしたのがそもそもアイズの罠だったようだ。
なぜなら、技の発動した瞬間に既に先ほどの隙など微塵も感じなかったからだ。
まずい、とキリトは感じる。
このまま彼女に攻撃を放っても自身のすきを生むだけだ。
だが、スキルを既に発動している以上ここでやめても隙が生まれるだけだ。
なら、ここで一か八か賭けるしかない。

「うおおおおお！」

ギーン！
今までよりさらに鈍い金属音が鳴り響く。
そう、アイズがキリトの剣技をあっさりと防いだのだ。
突進したキリトがアイズの横を過ぎると、狙い澄ましたかのように追撃を行おうとするアイズ。
だが、キリトは諦めていない。
以前キラーアントとの戦闘でした技、剣技と剣技の連携だ。

「はっ！」

アイズの垂直からの斬撃をキリトが横薙ぎでパリィ出来る剣技《ホリゾンタル》を発動させる。
これにはアイズも驚いたようで、大きく目を見開いてキリトを見ている。
この技はタイミングがシビアで、繋げる剣技の発動モーションと発動している剣技のモーションを合わせなければならない。

故に発動剣技を途中でキャンセルして次の剣技のモーションを取らなくてはならなくなるのだが、キャンセルした場合の成功率は格段に下がる。
連撃数が多ければ多いほどキャンセルしなくては次の剣技に繋げにくいのだ。
よって、より上位の剣技をこの技での連携にどこに組み込むかが肝になる。

「まだまだ！」

ここで止まるわけにはいかない。
《ホリゾンタル》が終わった後、さらにそこからＶ字に２連撃斬り込む剣技《バーチカル・アーク》、そこから繋げやすい垂直４連撃剣技《バーチカル・スクエア》を放つ。
しかし、見事としか言いようがないくらい彼女は綺麗にパリィしていく。
連撃数が少ないものじゃダメだ。
今覚えてる剣技で最も剣撃数が多いものに賭ける。
この技は頭で次の技に切り替えようと頭のスイッチも切り替えるイメージがある。
それは全力疾走しているのかで急停止をしてまた全力疾走するような感じである。
今回既に４回も剣技を繋げているので頭がパンクしそうになるのを感じている。
半ばヤケクソ気味にこれが最後になる剣技を発動させる。
彼女に向けて胸から腹の範囲で５回剣を突き出す。
それもまた彼女は剣の鞘で受け流す。
だが、キリトの剣技はまだ終わらない。
突き終わった剣を振りかぶって垂直に下ろす、それを彼女が鞘を横にして防ぐと、キリトは振り下ろした剣を上に振り上げる。
その際にキリトは上に大きく跳躍する。

身体ごと大きく振り上げたためにアイズはタイミングをずらされ、身体が仰け反る。

これだけやって少し仰け反るだけなのかと、驚くことしか出来ないがラストの一撃を全身全霊をかけて上から叩き込む。

「もらった！」

# 第21話

『オオオオオオン!!!』

「こんなものでいいか？」

青いフード被るこの者。

この者がなにをしていたかというと、ミノタウロスというモンスターの調教（テイム）をしていたところだ。

それもどうやら終えたらしい。

テイムには様々な方法がある。

例えば、シリカのようなテイマーはモンスターにエサを与えたり、話しかけたり、音楽などをかけるなどで手懐けるような方法がある。

だが、これらの方法はかなり特殊の部類に入り、一般的なテイムはモンスターに攻撃を加え、どちらが上かを分からせる。

それによって主従の関係を分からせる方法が主となっている。

彼もまたその方法に則り、このミノタウロスを屈服させ、さらには自身が持ち出した大剣を授けて鍛えたのだ。

そのせいか、通常黒い体表をしているが怒りで紅く変貌しており、自慢の二つの角も片方欠けている。

その見た目のせいかどうかは定かではないが、通常のミノタウロスよりはるかに強力に見える。

「鍛えれるだけ鍛えた。後は、あいつ次第だな。さぁ、行け！」

その者が命令すると、ミノタウロスが上の階層へと移動し始めていった。

「期待しているよ。キリト。」

☆★☆★☆★☆

「はぁ…」

結果だけ言うと、キリトはあのあとアイズに一発も攻撃を当てることが出来なかった。

やはり、ステータスの差はそれだけ大きいというこことだ。

意表をついたとはいえ、あれだけ態勢を崩して一発も入れられないなんてな。

「キリトさん？」

「ごめん。ちょっと考え事してて。それよりさ、なんかモンスターの数が少ないか？」

「それはリリも感じてました。なにかダンジョンであったんですかね？」

不気味な静けさを漂わせているダンジョンを慎重に進んで行く。

しかし、モンスターどころか同業者である冒険者にも会わない。

下の階層に行けば行くほど会う確率が減るのは当然だが明らかにおかしい。

キリトは不安からかリリに一度地上に戻ろうと提案しようとしたその瞬間。

『うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおん!!!』

突如耳に届いた雄叫び。

それはどこか聞き覚えがあるものだった。

「なんですか？今の鳴き声？」

「俺は知っている気がする。そう、あれは確か…」

キリトがなにか思い出そうとするがなかなかでてこない。
するとキリトたちの後方からなにか足音が聞こえる。
二人はゆっくりと後ろを振り向くとそこに立っていたのは、

「ミノタウロス…」

かつてキリトが襲われたモンスター。
レベル2にカテゴライズされるミノタウロス。
あの時は手も足も出なかった。

「キリトさん逃げましょう！今のリリ達には太刀打ちできません！」

「いや…」

「キリトさん？」

リリがミノタウロスからの逃走を提案する。
しかし、キリトは動かない。
なぜなら、キリトはほんの数時間前のことを思い出していたからだ。

★☆★☆★☆★

「こんにちは。」

「あら、キリトさん！お待ちしておりました！今、お弁当もってきますね！」

ダンジョンに向かう前にここ《豊穣の女主人》でシルからお弁当をもらうことがこ毎日の習慣になりつつある。

シル厨房の中に入っていくと、反対にリューが現れた。
軽い挨拶を交わすと、リューはかつて自分が冒険者であることを教えてもらった。
そして彼女はこうも言った。
「あなたはそろそろパーティーを組むべきだ。」
「パーティーならすでに組んでいますが…」
「彼女は確かサポーターでは？」
リリのことに関しては以前ここに立ち寄った時に説明をした。
彼女がサポーターであることがなにかいけないのだろうか？
「サポーターが付いてくれるのはよいことです。しかし、それだけではなく共に背中を預けて戦う仲間を集めなくてはこの先ダンジョンを攻略をしていくことは難しいでしょう。」
そういう彼女の言葉にキリトも薄々感づいてはいた。
このところモンスターの数が多くなっている。
さらに下の階層に行けば、一体だけなら問題無い場合でも処理しきれない数に襲われたら…。
早急にパーティーの強化が必要だとは思うが、この人だ！という人物にはなかなか出会えないものだ。
だが、まだメンバーを集めなくてもなんとかなっている。
ギリギリまでは考えておこうとキリトは思っていた。
それよりも、
「パーティーメンバーについてはおいおい考えるとして、今の問題はランクアップです。ランクアップとはどうすればできるんですか？ただ、ダンジョンでモンスターを倒し続ければいいんですか？」

そのキリトの答えにリューはすかさず答える。

「ただモンスターを倒すだけではレベルは上がりません。ランクアップを果たすには強いモンスターを打ち倒すなどの偉業を為さなければなりません。いわゆる、冒険をしなくてはなりません。」

冒険。

キリトのアドバイザーであるエイナは言った。

冒険者は冒険してはならない。

だが、それは死なないための教えだ。

ランクアップするためには冒険をしなくてはならない。

あたりまえであることを今まで忘れていた。

そうだ、自分は冒険者だった。

「ランクアップするためには冒険しなくてはならない。ですが、ただ無理をすればいいというものではありません。それは無謀というのです。今は新たな仲間を得ることを最優先にしてください。」

★☆★☆★☆★

ごめんなさい、リューさん。

心のなかでキリトが謝り、背中から剣を抜く。

「キリトさん?!」

「リリ、君は早く逃げるんだ。」

「そんな?!キリトさんも早く逃げましょう!今の私たちじゃ勝てません!」

普通ならキリトに勝ち目はない。
ここでの撤退は当然の選択だ。
だが、

「おそらく、俺だけなら逃げ切れる。だが、リリの敏捷では必ず追いつかれる。」

「だったら…！」

だったら、という言葉の続きをキリトはリリの口に手を当て遮った。

「俺があいつと戦って時間を稼ぐ。その間にリリは助けを呼ぶんだ。」

「無茶です！そんなのもつはずがありません！」

ミノタウロスはキリト達に狙いを絞って接近してくる。
それも思ったとおり、かなりの速さだ。

「ふぅー…頼んだよリリ。」

親指を立てた左手をリリに向ける。
一瞬だったがそれがリリにとって、とてもとても長く感じられた。
キリトは走り出す。
ミノタウロスに対峙するために。

「キリトさーん!!!」

リリがもう一度キリトの名を呼ぶ。
だが、キリトは立ち止まらない。
大切な人を守るために。

そして、強くなるために。
今日この日に、キリトは初めて冒険をするのだ。

☆★☆★☆★

リリはダンジョンを走っていた。
一刻も早くキリトを助けてもらわなくてはならないからだ。
やはり冒険者の数はいつもより少なく、また見つけたとしてもミノタウロスという名を聞くと途端に上の階層のへと逃げていった。
当然といえば当然だ。
誰がレベル1でレベル2にカテゴライズされているミノタウロスと戦いたがるだろうか？
しかし、諦めるわけにはいかない。
大切な人を、自分を地獄からひきずりだしてくれた人をなんとしても助けなくては。
どれくらい時間がたっただろうか？
5分か10分か？
もはや時間の感覚が曖昧になり、焦りと不安でおかしくなりそうになった時、ある集団を見つけた。

「あ…あぁ…」

あの集団は《ロキ・ファミリア》のものだ。
そういえば、キリトがもうすぐロキ・ファミリアは遠征に出ると言っていた。
もう、彼らに頼むしか他にない。
リリは急いで彼らに近づき、事情を話した。
そこの集団には同じ小人（パルゥム）男にエルフの魔導師の女性。
さらには、アマゾネスの双子の姉妹に獣人で狼男の青年。
加えて、

「キリトが…⊠」

「おい、アイズ！」

そうだ。あの剣姫、アイズがいた。
アイズはリリの話を聞くと一目散に駆けていった。
それを後を追うように他の人も走り出した。
これだけの上級冒険者がいれば充分だ。
問題はキリトが持ちこたえているかだが。
ただ、彼が無事であることを祈るしかない自分の無力さに泣きたくなる。
しかし、泣いてる暇はない。
リリも彼らの後を必死に追うために走り出した。

★☆★☆★☆★

リリが離れた後、キリトはミノタウロスとの戦闘をしていた。
その戦いは予想以上にキツイというものではなかった。
それは、アイズとの戦闘訓練が大きく影響していた。
だが、唯一絶対的に負けているものがあった。
それは、

「ぐっ！」

何度目か分からない鍔迫り合いが始まる。
モンスターが持つ武器は普通ダンジョンで手に入る自然普通（ネイチャーウェポン）である。
だが、このミノタウロスはなぜが人が作製した大剣を使っていた。
その技術はモンスターとは思えないほどの大剣さばきだ。
だが、それもまだ対処できる。
問題はパワーだ。

アイズはスピードこそ出していたものの、パワーはキリトに合わせていたのだろう。
以前のシルバーバック戦のような圧倒的な差は感じないが、それでもこのように力比べになった時に拮抗できないことでうまく剣技を繰り出す隙を作り出せない。

「この！」

キリトは鍔迫り合いを諦め、刃を滑らせるようにしてミノタウロスの力を受け流す。
そして、そのまま懐に入る。
が、ミノタウロスもすぐに身体を引き始める。
キリトもなんとか攻撃を当てようと剣を伸ばすが、剣先しか当たらない。
あの時、剣技を当てたにも関わらず全く切れなかったがこの《黒い剣》なら攻撃が通ることは先ほどから理解している。
けれど、ミノタウロスもそれに気づいてか剣での攻撃に対して全力で防ごうとしてくるようになっていた。
おかげで、決定的な一撃は与えられない。
キリトが長期戦を覚悟したその時に既に目の前には奴の拳があった。

「しまっ！」

ゴッ！
というような鈍い音が響く。
今まで、剣での攻撃しかしてこなかったミノタウロスがいきなり腕で殴ってきたのだ。
後方に吹っ飛ばされ、唯一防具としてつけていたアーマーが破壊されていた。
それだけでなく、今ので肋骨を何本か折れたみたいだ。

視界が霞む。
強烈な痛みにあまり慣れていないキリトは気を抜くとあっという間に意識を持っていかれそうだ。
剣を杖のようして立ちか上がる。
形勢が今ので一気に傾いた。
警戒していなかったわけではない。
だが、今までのモンスターとの違いに気を取られていたのが大きなミスだ。
ミノタウロスがゆっくりと獲物を確実に仕留めるために近づいてくる。
それに対してキリトもゆっくりと剣を構える。
まだ、やられるわけにはいかない。
まだ、何も成していない。
そう思うと、不思議と痛みは感じなくなっていた。
痛覚を感じないほどアドレナリンでも出てるのだろうか。
久方ぶりに死を感じている。
そうだ忘れていた。
これは殺し合いだったなと。

# 第22話

あの小人パルゥムの話を聞いた瞬間、身体が勝手に反応していた。
レベル1でミノタウロスとの対峙なんて普通に考えたらまず無謀とも言える行為だ。
だが、彼女が彼の元に急いだのは心配もあったが、それが全てではない。
アイズは期待しているのだ。
彼ならレベル1でミノタウロスを倒してしまうのではないか。
そんな期待がアイズをあの場から動かせた。
ならば、それを見届けたい。
そして、アイズは遂にキリトとミノタウロスを見つけた。
果たして彼はどのように戦うのだろうか。

★☆★☆★☆

「ん？」

ミノタウロスが何かに怯え始めた。
一体何に？
不思議に思ったキリトが横を向くと、そこにはアイズがいた。
なるほど、レベル6の彼女の力に怯えていたってわけだな。
すると、後方から次々とロキ・ファミリアの冒険者がやってきた。
中にはあの口の悪い狼男もいた。

「キリトさん！」

そこにはリリの姿もいた。
どうやら、キリトが言った助けを呼んできてくれたらしい。
だが、

「リリ、助けを呼んできてくれてありがとう。これで君を危険にさらすことがなく、安心して戦えるよ。」

「キリトさん、何を言って…」

「手を出すなよ、アイズ。」

「…わかってる。」

「なっ……!」

リリはキリトが何を言っているのかまるで理解できない。
これだけの冒険者が揃っているのに、助けを求めずに一人でミノタウロスに挑むなんて正気の沙汰とは思えない。
こうなれば引きずってでも彼を移動させようと彼の元に駆けようとするリリをアイズが手を出して止める。

「なぜですか?!今キリトさんを助けないと、ミノタウロスに殺されてしまいます!」

「大丈夫。」

彼女は大丈夫と言ってそれ以外は何も言わない。
そんな言葉だけで安心できるほどリリはアイズに信頼を得ているわけではない。
だが、そんな心配など微塵も気にも留めずに彼は戦いを再開し始める。
しかも、驚くことにあのミノタウロスに引けをとっていない。

「な、なんで…?」

驚きを隠せない。
なぜなら、彼はレベル1のはずだ。普通なら相手にもならないはず。
それは他のロキ・ファミリアの者も思ったらしい。
「おいおい、どういうことだよこりゃあ？」
「君には半月前まで彼が駆け出しの冒険者に見えたんだよね、ベート？」
ベートと呼ばれた狼男は、小人パルゥムの青年に以前自分が言った言葉に指摘をされて舌打ちをする。
そしてまた、アマゾネスの双子の姉妹も各々感想を述べていく。
「それにしても彼、凄いわね。あの黒い剣が業物であることもさることながら、腕も中々のものよ。」
「うん。なんだが、昔読んだ英雄譚の英雄みたい。」
「それって『黒の剣士』のことかな、ティオネ？」
ティオネと呼ばれた胸部が少々心もとない双子の片割れの言葉にエルフの女性が問う。
それに対してティオネが答える。
「うん。『黒の剣士』のお話はいくつかあるけど、その中で『青眼の悪魔』って話があったんだ。その話は青い目をした二本角の悪魔に立った一人で立ち向かうって話だったなー…。確か、あの時その『黒の剣士』は…」
「二本の剣を携えて、超絶剣技でその悪魔を打ち倒す、でしょ？」

「シノン！それにユウキまで、一体どうして？」

『黒の剣士』の英雄譚を語るティオネの言葉をつないで話したのはシノン。

そこには一緒についてきたであろうユウキがそこにいた。

「細かい話は後よ。それよりも戦況はどうなの、フィン？」

「キリト勝ってる？」

シノンとユウキの問いに先ほどから戦闘をしっかりと観察していた小人の青年、フィンが答える。

「攻撃は少しづつ入れている。だが、決定打に欠けている。おそらく、ミノタウロスのパワーに身体のバランスを崩されるのが原因だろうね。」

フィンの言葉を聞いたシノンとユウキは辺りを見渡し始める。

すると、そこで小人の女の子を見つける。

その彼女のバックパックには片手剣が入っているのを確認すると、それを取り出して彼女に問う。

「この剣はあいつのもの？」

「え？あ、はい。それはキリトさんの為の予備武器としていつもリリが持ち歩いているものです。」

「御膳だてはどうやら整えられそうだね。」

「ええ、みたいね。」

ユウキがまるでいたずらを成功させた子供のような笑い顔をすると、それを見たシノンも少しだけ笑みをこぼす。

「これを借りてもいいかしら？」

「ええ。ですが、それをどうするんですか？」

「こうするのよ！」

☆★☆★☆★☆★

先ほどから奴に決定的なダメージを与えられていない。
このままじゃ、ジリ貧は目に見えている。
それでも、キリトが諦めずに戦うのは作戦があるからだ。
その隙はおそらく一瞬が限界だ。
だが、今のキリトにその一瞬を決められるのかそこが一番の問題だ。
無謀と冒険は違う。
今、キリトは無謀をしているんじゃないかと不安になってくる気持ちがある。
それを拭い去る為に必死に喰らいつくが、その一瞬をどのように活かすかが思いつかない。
一体どうしたらいいのか？
そんな刹那のなか、ある声が聞こえる。

「「キリト!!」」

幼い頃に聞きなれた二つの声が同時にキリトの名を呼ぶ。
自分の名を呼ばれて何度目かわからない鍔迫り合いを無理やり弾き飛ばすと、そこには両手を口につけて応援しているユウキと弓を構

えているシノンの姿があった。
だが、シノンの弓には弓矢ではなく剣が構えられていた。
その剣はリリがいつもキリトの為に預かっている予備武器だ。

「受け取りなさい！」

放たれるその剣に気をとられていると、弾かれて体勢を崩していたミノタウロスがすでに攻撃を繰り出していた。
先に剣をとれるか、攻撃を喰らうか。
かなり微妙なタイミングだ。
だが、ここでこれを受け取れなければこの状況を変えることはできない。
賭けるならここしかない。

『ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!』

「っ!!!」

キリトはミノタウロスの身体の右側に回りこめるように右手の剣でうまく受けつつ、左手で肩から剣を抜き取るような構えをとるとそこに飛んできた剣を掴みそのままミノタウロスがもつ大剣の側面を左手の剣で弾き飛ばす。
大きくのけぞったミノタウロスを追撃するためにキリトは前進するが、ミノタウロスもなんとかかわそうとからだをよじる。
そこで、キリトは無理をせずある狙いを完璧にするために今まで狙い続けたあるところへ攻撃をする。

「ちっ！バカが！あの野郎今ので決めれなきゃ勝機なんざ一生来ないぜ！」

「気づいていないのかい、ベート？」

「あん？」
フィンに言われるもなんのことだと言わんばかりの顔をするベート。
「なら、これからの展開をよく見てたほうがいいね。」
ベートは怪訝そうな顔をしながら戦闘をみると、先ほどとは戦況が大きく変化していた。
キリトが両手に剣を持つことで、今までのパワー不足を補うことに成功していた。
ミノタウロスの上段から繰り出される攻撃をキリトが二本の剣をクロスさせて受け止める。
今まで押されていたが、その二本の剣でしっかりと受け止めることができている。
その受け止めた大剣を二本の剣で弾きとばす。
そして、ミノタウロスは追撃を恐れてか後方に飛び退き距離を取る。
ーここだ！
この距離なら、次の攻撃をする時必ず突進攻撃をするしかない。
この時を待っていた。
両手の剣を構える。
それに呼応するように両手の剣が光り出す。
以前反応しなかった二刀流の剣芸ソードアートのスキルが発動する。
今回なぜ発動したのかなんて今はどうでもいい。
この場面で狙う剣技はひとつしかない。
キリトとミノタウロスが睨み合う。

緊迫した時が流れる。
おそらくミノタウロスもここで決着がつくのをなんとなく察しているのだろう。
ダンジョン内が一瞬の静けさで包まれる。
そして、両者一斉に突っ込んでいく。
この時点でキリトは既に剣技を発動させている。
その証拠に突進のスピード先ほどより遥かに早い。
それを見てミノタウロスも驚いているようで早いタミングで大剣をキリトに向けて振り下ろす。
だが、突然ミノタウロスが体勢を崩し始める。
それはキリトにとって狙い通りでもあった。
決定的な一撃を与えられないと悟ったキリトはその大きな一撃を入れるための布石として奴の左ヒザを執拗に狙い続けたのだ。
そして距離をとることで奴を走らせ、膝に負担を掛ける状況を作り出すことでその決定的な隙を生み出したのだ。
既に体勢を崩した状態での奴の攻撃などキリトには効かない。
左の剣を前に突き出し、ミノタウロスの大剣の軌道をずらす。
そして、ミノタウロスの右脇にキリトがその左の剣を突き出した勢いで身体を時計回りに捻りながら潜り込む。
この時点でキリトの剣技はまだ終わっていない。

「ー終わりだ!!!」

身体を捻じることで勢いをつけたまま右手の剣をミノタウロスの右腹に食い込ませ、そのまま真横に剣を切り込ませる。
しかし、ミノタウロスの肉は断ちにくいらしく徐々に剣の入りが悪くなるのをキリトは感じた。
ここで今持てる全ての力と魔力を右手の剣に込める。
込める魔力が風という形で変化する。
それは、足りない切れ味を補うように剣に纏っていく。

「うおおおおおおおおおおお!!!」

キリトの剣がミノタウロスの右腹から左腹に抜けていく。
二刀流剣技突進二連撃技《ダブル・サーキュラー》
ここで、完全に勝ちを確信していたキリトは驚きを隠せなかった。
なぜなら、ミノタウロスはそ右手にある大剣を持ち上げて振り被っていたからだ。

「なっ?!」

スキル直後と魔力を大量に使用したせいか身体が上手く動かない。
この構図、まるでミノタウロスの初めて対峙した時に似ていてデジャブを感じた。
あの時の絶望と一緒に。

ーここまでか…

キリトがゆっくりと目を閉じてその一撃を待つ。
だが、その一撃は待てどもやってこなかった。
恐る恐る目を開くとそこには斬ったところからゆっくりと上半身と下半身がずれていき、そしてついには上半身だけが地面に落ちていった。
それに合わせてミノタウロスの身体は灰に変貌して消えていき、奴の象徴であるツノが一つ落ちていた。

☆★☆★☆★☆★

「キリトさーん!」

戦闘が終わり、キリトに向かっていくリリ。
だが、他のものは信じられないといったようにその場から動けな

かった。

「まじかよ…」

「レベル1であのミノタウロスを倒すなんてね。」

この言葉が全てを表していた。
レベル1でミノタウロスを撃破。
これは瞬く間にオラリオ中に知れ渡るだろう。
それぐらい、驚くべき事実なのだ。

「おい、お前らあいつのこと知ってるんだろう？あいつは一体なんなんだよ？」

「なにって…言われてもね～…」

シノンがどうにも言い淀むと、ユウキが自信を持って答える。

「なにって、僕らの師匠みたいなものだよ！」

「師匠だぁ～？」

ベートがユウキの言葉を聞いてありえないといったように声音を発する。

「あんな奴を師匠だなんて思いたくないけどね。」

シノンが不機嫌になってユウキは苦笑いをしか出ない。

「君たちの師匠とは、今後が楽しみだ。それで、彼の名前はなんていうのかな？」

エルフの女性が尋ねると、これまで無言だった彼女が普段中々見せない笑みを浮かべて答える。

「キリト…。キリト・クラネルよ、リヴェリア。」

そんな笑みを浮かべるアイズに少々驚きながらもリヴェリアと呼ばれたエルフの女性もつられて笑みを浮かべる。

「キリトか、覚えておこう。」

涙を浮かべるリリに文句を言われて困ってる彼の姿を一度見たあと、ロキ・ファミリアの面々はその場をあとにするのだった。

# 第２３話

「キリト君、サポーター君から聞いたよ。随分と無茶したそうじゃないか。」

「いやー…あはは…」

あのあとシノンやユウキ、それにアイズにお礼を言おうとしたが既に遠征にいってしまったらしく言いそびれてしまった。

今日はもうこれ以上の探索は無理だと判断し、地上に戻ることにした。

帰る間、リリにひたすら説教もとい文句をたらたら言われ続けながら移動した。

ホームに着いてからも、ヘスティアが待ち構えなにやら不機嫌だと思いきや既にリリから報告済みでこれまたきつく絞られた。

どうやら、ギルドでシャワーを浴びたり魔石の換金などをしている間にリリが伝えていたらしい。

とにかく、その日はなんとも厄日であった。

ー次の日

ヘスティアに頼んでステータスの更新をしてもらうことにした。

その変化に自身の予想通りの結果だった。

「ラ、ランクアップしてるぅぅぅぅぅぅ！」

「あぁ、やっぱりですか？」

「君はもうちょっと驚きなよ！なんだいそのリアクションの薄さは！」

「いやぁうれしいのはうれしいんですけど、もうすでにミノタウロス

を倒したときに喜んだのでランクアップ分の嬉しさを使い切っちゃたというかなんというか。」

「と・に・か・く・だ！」

ここでヘスティアが、わざとらしくコホンと咳払いをする。

そして、腕を腰にあてて仁王立ちにするとその豊かな胸をこれでもかと張って宣言する。

「これで我がヘスティア・ファミリアも新たな一歩を踏み出したというこことだ！そこは大いに喜ぼうじゃないか！」

「そうですね。今日はぱーっとおいしいものでも食べましょうか！」

「それはいいね！早速出かける準備をしようじゃないか！」

☆★☆★☆★

おいしいものを食べに行こうと出かけたものの、キリトはそんなにお店のレパートリーがなく結局《豊穣の女主人》に来ることになった。

いつもは一人なので、例によってシルが最初に勧めた一番奥のカウンター席に座っているのだが、今日はヘスティアもいるので向かい合えるテーブル席に座ることにした。

そして食事しながら昨日の戦闘のことを事をヘスティアに細かに聞かれてキリトも少し喋りつかれてきた頃、ふと先ほど更新をしてもらったステイタスの紙を見てみた。

キリト・クラネル

Ｌｖ．１

力：ＳＳ１０３２→ＳＳＳ１１４７

耐久：Ｓ９２７→ＳＳ１０３１

器用：Ａ８９７→ＳＳ１００１
敏捷：ＳＳ１００３→ＳＳＳ１１２５
魔力：Ｃ６８７→Ｂ７９７
片手剣：ＳＳ１０６８→ＳＳＳ１１８９
体術：Ｂ７２３→Ａ８０１
二刀流：ｉ０→Ｇ２７９
《魔法》
【剣魔ソードマジック】
・武器に魔力を纏わせる
《スキル》
【剣芸ソードアート】
・武器に応じた剣技を発動できる
・各々の技の熟練度によって威力が増す
・使用武器のアビリティが追加され、熟練度によって使用可能な技が増える
【心意インカーネイト】
・事象の上書き
・自らの存在そのものを保ち、守ろうとする意思

これがレベル１での最終ステイタスか。
それにしても二刀流に心意って…

「この二つのスキルって今回の戦闘で得たものなんですよね？」

「いや、その二刀流ってのは前からあったよ？」

「えっ？」

「正確に言うと、昨日の朝ダンジョンに行く前にステイタス更新したときにはすでに発現していたよ。」

「な、なんで教えてくれなかったんですか？」

「僕は一応呼び止めたんだけど？」

そういえば、声を掛けられたような気がする。

けど、リリとの待ち合わせに遅れそうになってたから気に留めなかったんだ。

どうやらそのことを思い出したのかヘスティアはどんどん機嫌が悪くなっていく。

「そ、そういえば《心意》ってどんなスキルなんでしょうかね？」

ここで、なんとかヘスティアの話題への興味を変えようとキリトは誤魔化しに入る。

それが意外にもヘスティアも心意については気がかりらしく、すぐに意識はその新しいスキルの話に変わった。

「うーん…それが、僕にもよくわからない。事象の上書き、なんてそんなことが出来るとしたらそれはもう一種の反則みたいなものだ。だが、もう一つの説明にもあるように発動には何か特殊な条件があるのだろう。君はモンスターとの戦いの際になにか今までとは何か異なる考えで戦わなかったかい？」

「うーん…」

ヘスティアにそうは言われても、キリト自身あの時はまさに死に物狂いで挑んでいてあんまり覚えていない。

せいぜい確か死を意識して生き残ることを考えてからはなんだか身体の痛みが消えたりしたような気がする程度だ。

それでも十分おかしいということにキリトは気づいていない。

「わからないなら、実際に試してみた方が早いな。発動条件がなんにせよ、それは君のスキルだ。君にとって不利益になるものではないだろうしね。というか、ステイタスの話を外であんまりするもんじゃないよ！まったく、もう！君はいつも少し緊張感が足りないよ！今だって、こうして僕と一緒に食事しているというのに…って、聞いてるのかい、キリト君？」

心意…

一体どんな能力なのか、一刻も早く知りたい。

そうと決まれば、早速明日からダンジョンに行かないと！

ヘスティアの心の叫びもキリトには届かず、それに気づいたヘスティアはまたしても文句を言いはじめる。

そこで、ようやく気づいたキリトはそのあとひたすら謝る羽目になったのだった。

シルに助けを求めて目線を向けたが、笑顔をもらえるだけで何もしてくれなかったのはここだけの話だ。

☆★☆★☆

早朝のダンジョン。

まだ、オラリオの都市は静かな空気を纏っている。

連日の早朝訓練のおかげか身体はかなりキレがいい。

さっそく目の前にいるゴブリンでその《心意》というスキルを試してみることにした…のだが、

「ダメか…」

やはり発動条件がわからない。

こんな緊張感のない戦闘ではやはりこのスキルの正体は掴めないのかもしれない。

諦めて帰ろうとすると、いつの間にか背後に人がいた。
その者は青いコートとフードを被っている。
顔が見えないので体格で性別を判断しようにもそのものはキリトと同様線が細く、また背丈的には女性なら少し大きいと感じさせられるためにその者が男か女かわからない。
ただ、キリトは気配を感じさせずに自分の背後にいたこの人物になんとも言えない不気味さを感じさせていた。

「やぁ、あんたも早朝からダンジョン探索か？」

警戒を怠らず軽口を言いながら様子をみようとする。
しかし、その者は腰に携えている剣を抜き取る。
その者の剣はとても美しかった。
青白く光るその剣の柄にはバラの装飾があり、神秘的な雰囲気が一層際立たせている。
キリトもそれに一瞬目を奪われたが、目の前の闘志に一気に現実に引き寄せられて剣を抜く。

「お前…一体？ーっ!!!!」

一瞬の出来事だった。
まるで、瞬間移動したような…
いや、キリトにとってはその通りだった。
見えなかったのだ。
その者の左拳がキリトの鳩尾に決まりキリトは後方に一気に吹っ飛ばされる。
ランクアップしたキリトは自身の肉体の性能の差をはっきりと感じている。
レベル1の時とは比べものにならないステイタスの違いを。
だが、奴の強さはそんなこと些細なものとも云わんばかりの強さだ。

一瞬の土煙に包まれるが、そこからキリトは飛びだす。
そして、片手剣剣技重突進技《ヴォーパル・ストライク》を発動させて奴に反撃を企てる。
視界が遮られてるこの条件なら、当たらずとも隙くらいを作れるはず。
そんな淡い期待はこの者には無意味であることを薄々気づいていたのにだ。
その者は剣を持たない左手で剣を受け止めたのだ。

「どうした？この程度か？」

「え？」

突然の問いかけに驚くキリト。
そして剣ごと持ち上げられて投げ飛ばされる。
地面を転げながら距離を取って体勢を整える。
先ほど声から、なんとなくだが男である可能性があると推測したキリトは会話をしてきたことから話す余地はあると感じて口を開く。

「あんた一体何者だ？なぜいきなり俺を襲う。」

「なに、簡単な理由さ。ランクアップした君の力を試してみたくなったのさ。」

「なんでそれを?!」

ランクアップしたことはまだギルドに報告していないため、キリト自身とそれを更新したヘスティアしかしらないことだ。
それをなぜあいつが知っているのか。

「もっと見せてくれよ。レベル2になった君の力をさ。」

そういうと、今度はゆっくりとこちらに近づいてくる。
ゆっくりと言っても彼にとってのことだ。
キリトにとってはあのアイズとの特訓時でさえこんあ速さを見たことはない。
それでもランクアップしたおかげか身体はなんとか反応できる速さだ。
彼の振り下ろされる剣を辛うじて剣で受けるが、その重さに身体が持ってかれる。
まるで大岩をそのまま受けているようだ。
剣で受ける度に身体が小石のように吹っ飛ぶ。
この状況を打破することはできないのか？
そもそもここになにしに来たのか？

ー事象の上書き
ー自らの存在そのものを保ち、守ろうとする意思

そうか…そういうことか。
そうだ、まだ死ねない。
イメージしろ。強く。より強く。
相手の剣が大岩のようなものなら、それを割るほどの力で叩けばいい。
選ぶ剣技は単発でいい。
それが一撃で仕留める必殺にすればいいのだ。

「なんだ…それは？」

彼は驚くそれは当然だ。
なぜなら、彼の剣が大きく形状を変化させていたのだ。
そして、キリトは剣技を発動させる。
片手剣剣技垂直技《バーチカル》

「いっけえええええええええええええ！」

それを青コートの男に向かって振り下ろす。
それを受け止めようとする彼は咄嗟に回避行動に行動を移す。
そして、一気に後方に退避しその光景にさらに驚かさせられた。
ダンジョンの地面に穴が空いているのだ。
しかも、かなり巨大な。
力を使い果たしたのかキリトはその場で膝をついていた。

（今日はここまでかな？面白いものもみれたしね。）

青いコートの男はその場を後にした。
青コートの男が立ち去るのを見たキリトは大きく息を吸って吐き出す。
嵐のような出来事にもうこんなこと二度と起きて欲しくないと願うキリトだった。
それにしても、彼は一体何者なのだろうか？
いつか、強くなったらまた戦ってみたいなどと先ほど殺されそうになったとは思えない感想を抱くキリトだった。

☆★☆★☆★

「随分と暴れたわね。ここまで響いていたわよ。」

バベルの最上階。
ここに美の神フレイヤが青コートの男に向かって少し意地悪そうに話しかける。

「予想以上に面白いものを見れたからそれでチャラでいいだろ？」

「あら、それはなにかしら？聞いてもよくて？」

「すぐにまた見れるさ。お楽しみは後に取っておけよ。」

今日の彼は機嫌がいいとフレイヤは感じた。
よほど、いいものをみれたらしい。
そう思うと、余計気になるものだ。

「それは、早く見たいものだわ。」

すぐに見れる。
神にとって時間はさほど問題ではない。
けれど、やはり楽しみを待っている時はやはり長く感じるものだ。

（次はなにを仕掛けようかしら？）

バベルの最上階で疲労しているのか足取り重くダンジョンから帰路に着くキリトの姿を見ながら美しく、そして悪魔的な笑みをこぼすのだった。

# 最後の一人
## 第２４話

その日オラリオ中がある話で盛り上がった。
世界最速でのランクアップ。
僅かひと月でのランクアップはそれほどにも衝撃だったのだ。
なにせ、あの《剣姫》でさえ1年かけてランクアップしたらしく、キリトのアドバイザーであるエイナもあまりの衝撃の事実にギルド内で叫んでしまったくらいだ。

「なんだかいつも以上に視線を感じる気がする…。」

「その言い方ですと普段から視線を感じてるみたいな感じですね？」

「いや、あはは…って、いつの間に背後にいたんですかシルさん？」

「たった今ですよ♪」

あの青コートの男との戦いの後、妙に身体に重みを感じながらも豊穣の女主人でリリと今後について話し合うために集まったのだ。
そこにシルが時折入ってきて、なんとも話が進んでいない。

「お店でもキリトさんの話題で盛り上がっていますよ！《黒ずくめの男》こと《ブラッキー》って感じで♪」

「黒ずくめって…そんな黒ばっかりみたいに、」

「いいえ、キリトさんはいつも黒ばかりですよ。それはリリが保証できます。」

「むしろそれしかないのでは？」

リリとシルに二人でそう言われ、さすがにキリトもそんなことはない！と、否定したくなった。

けれど、今一度ホームのクローゼットを思い浮かべると黒もしくは黒が基調の服しかない。

おまけに剣まで黒いのだから言い返す言葉を失った。

先ほどシルに言われた《黒ずくめの男（ブラッキー）》とは神が行う集会、通称神会（デナトゥス）にてキリトが神様達につけられた二つ名だ。

ヘスティア曰く、かなり無難なのを勝ち取ってきたと胸をはって報告してくれたのだが、黒ずくめってなんだか悪者みたいで印象としてはあまり好ましくない。

だが、ブラッキーという響きは少し気に入っている。

どうにもキリト自身の情報が少なく、見た目でのネーミングになった為にこの二つ名なった経緯を言われて今後黒いのは控えようと心に決めたはずなんだが、今日もまた黒をきているキリトだった。

「それで、今後の予定なのですが…」

「俺は中層と呼ばれる１３階層への攻略を今後していきたいと考えてる。」

「やはり、そうですか…。ですが、ここは厳しく言いますと今のままでは中層へのダンジョン攻略は厳しいと思われます。」

「え？どうして？」

キリトは単純に疑問を持った。

なぜなら、自分自身がランクアップしたことで中層域での適正レベルには到達している。

それなのに、一体なぜ？

「それは、中層と上層ではモンスターの出現率が急激に変化するからです。」

疑問に答えてくれたのはシルの後ろから現れたリューだった。

その答えを聞いたリリも頷いて補足していく。

「中層と呼ばれる13階層以降はモンスターの数が今までとは比べものになりません。加えて、リリのレベルとステイタスではキリトさんについていけません。また、いくらレベル2になったキリトさんでも中層で現れるモンスターの数を相手にしては現在のパーティーでは不十分としかいいようがありません。」

「つまり、現状必要なものは新たな戦力というこことです。」

リリとリューが言う戦力。

つまり、新たなるパーティーメンバーというこことだが、生憎そんな都合よくオラリオに今すぐ一緒にダンジョン攻略に行ってくれそうな人はいない。

シノンやユウキに頼むという手もないことにはないが、現状難しいだろう。

違うファミリアということもあるが、なによりレベルが離れすぎている。

あの二人に甘えるようなことになっては自身の成長に支障が出かねない。

さて、どうしたものか。

「なんだ?そこにいるのは最近噂の《ブラッキー》じゃねぇか?」

キリトが頭を悩ませていると、不意に隣のテーブル客から話しかけらた。

どうやら、むこうも冒険者らしい。

「随分とかわいいウエイトレスを囲ってるじゃねぇか。どうだ？俺たちがパーティーを組んでやる。その代わり、この娘たちを分けてくれねぇか？」

随分と分かりやすい下心がみえみえのやつらだな、と思うキリト。

今の彼らの言葉にシルやリュー、リリに至ってはもはやゴミを見る目で彼らを見る。

キリト自身も彼等の誘いに乗るつもりもなく、

「その提案には乗れないな。彼女たちはこのお店の店員であって、俺がどうこうできるわけじゃない。そして、そんな下心丸出しの奴らに背中を預けるなんてことできないしな。」

「なんだと?!」

キリトのその飄々とした態度が気に入らなかったのか、彼等は一斉に立ち上がってキリト達に近づいてくる。

お店で騒ぎを起こすのはまずいな、思うキリト。

その主たる理由としては、

「なんの騒ぎだい？」

彼女だ。

豊穣の女主人の店長、ミアさん。

正直これからランクアップをしていって、どんなに強くなっても彼女には頭が上がらないだろうなと思う。

加えて、

「失せなさい。この下衆どもが。」

リューもまた以前は冒険者である。
レベルはわからないが、今のキリトより上であることは間違いない。
彼等はリューによって店の外まで吹っ飛ばされ、加えて支払いをミアに取り立てられて散々な目に遭う彼等をキリトは心の中で手を合わせることしかできなかった。

★☆★☆★

あの後、話合う雰囲気にならなかったんでキリトは中層に行くのはもう少し先にすることにしてしばらくは上層で様子を見ることにした。
その原因はパーティーメンバーのこともあるが、ミノタウロスの戦いで防具や戦闘服（黒のロングコート）がボロボロになったので新しく新調しなくてはならない。
よって、キリトは先日エイナに紹介してくれたバベルの中にある《ヘファイストス・ファミリア》のお店に行くことにした。
店に入って早速目に入るのは、黒のロングコートだった。
それにしても、

「なんか…前より種類が多くなったような？」

確かに最近ここでロングコート、主に黒いものを購入していたが明らかに前より種類が増えている。

「おい、また来たぜ。」

「あれだろ？噂の《ブラッキー》っていう冒険者。」

「まさか、あの黒のロングコートばっかり買っていくやつがこんなに

話題を呼ぶとはな。」

「おかげで最近売り上げいいぜ。」

などなどと、ランクアップしてよくなった聴覚から聴こえてくる言葉はどれもなんとも言えない気持ちにさせた。

だが、やはり他のものに今さら移るのもどうかと思ったので結局ここにある黒のロングコートを買った。

それと、いつものとおり胸防具も買っておかないと。

前に使っていた《ヴェルフ・クロッゾ》の防具。

この辺りの防具ではかなり頑丈で、加えて付けていてもあまり重荷にならないあの軽量さはとても魅力的だった。

キリトは以前に見つけた場所を探してみたのだが、なかなかみつからない。

キリト的には店員に聞くなどという行為は苦手なのだが、見つからない以上を店に置いていない可能性があるので聞いて確かめる必要があると感じ探してみると、店員となにやら揉めている現場に遭遇した。

「あのー…」

「だから、なんで俺の作ったものを置いてくれねぇんだよ！」

「あー、はいはい。なにをお探しですか？冒険者さん？」

「無視すんなや！」

この店員普通にスルーしてるけど、大丈夫かな？

「《ヴェルフ・クロッゾ》の防具を探しているんですが、置いていないんですか？」

キリトのその言葉に店員と揉めていた人が急に動きを止める。
数秒の沈黙のあとに、揉めていた赤髪の青年が店員に向けて言い放つ。
「ほら、見ろ！俺にもこうしてリピートで買ってくれる顧客がいるんだよ！」
「ちっ！」
「？」
キリトが頭にハテナマーク浮かべてみると、青年が自分を指差してこう名乗る。
「俺が、ヴェルフ・クロッゾだ。よろしくな、黒いの。」
なんだか、長い付き合いになりそうなそんな予感をキリトは感じていたのだった。
☆★☆★☆
あの後、場所を変えてヴェルフと話すことにしたキリト。
まさかあの防具の作成者本人と出会うとは思いもしなかった。
鍛治師とこうして話すこともなかなかないので、少し楽しみだ。
「いやー、まさか今話題の《ブラッキー》に買われているとは鼻が高いぜ。」
「そう言ってもらえてこっちこそ光栄だよ。それよりも、クロッゾさんはどうして店員と揉めていたんだ？」

「あー…まぁ、いろいろだな。あと、そのクロッゾって呼ぶのとかしこまるのはなしだ。」

「そうか？なら、ヴェルフって呼ばせてもらうよ。」

ヴェルフはキリトにとって話しやすい存在だった。
がさつなところがあるものの兄貴風な雰囲気がキリトにとって新鮮だった。
ここオラリオに来てから、同性の知り合いがいなかったことから色々なはなしをした。
そうしていると、いつのまにか時間が経過をしており、ヴェルフは本題に入ってきた。

「ところで、キリトに折り入ってお願いしたいことがあってよ。俺を、お前の専属鍛治師にしてくれないか？」

「専属鍛治師？」

「なんだそんなことも知らないのか？」

そこでヴェルフが説明をしてくれた。
鍛治師が一人の冒険者と契約して専属になることでその冒険者の装備を整えたり開発していってくれるらしい。
そのかわり、鍛治師のメリットとしては冒険者が鍛治師の装備を使って活躍することでの宣伝効果を期待しているのだ。
キリトは世界最速ランクアップの記録保持者だ。
宣伝効果は十分らしい。
なんにせよ今のキリトにとってはこれ以上ない提案だった。

「俺でよければ契約してほしい。」

「おいおい、頼んでるはこっちだ。それは俺の台詞だぜ！」

笑いながら答えるヴェルフ。

もしかしたら、彼なら冒険の頼もしい仲間になってくれるかもしれない。

「それで俺も頼みが…」

☆★☆★☆★☆

「それで…」

「よっ！ヴェルフ・クロッゾだ。家名で呼ばれるは好きじゃないから、ヴェルフって呼んでくれ。」

次の日から早速ヴェルフとダンジョンに来ていた。

なんでもヴェルフもランクアップ後に取れる上鍛治師（ハイスミス）と呼ばれる発展アビリティの取得がしたいらしく、しばらくはパーティーメンバーとして同行してくれるみたいだ。

だが、同じパーティーメンバーのリリの反応はというと、

「そういう大事な事はリリにも相談していただかないと困ります！」

「ご、ごめん。」

どうやら、彼の加入の独断は芳しくなかったようだ。

そう言えばリリは冒険者嫌いの気があるのをすっかり忘れていた。

けれど、キリトはリリもヴェルフとは仲良くなれると信じて疑わない。

彼には冒険者特有の傲慢さがさほど強くないと感じたからだ。、

しばらく行動を共にすれば気にならなくなるだろう。

「とりあえず、ダンジョンの探索を進めよう。パーティーメンバーが必要なのは絶対なんだし、一度一緒に冒険してから判断しても遅くはないしな。」

「そういうことだ、チビ助。よろしくな、」

「チビ助ではありません！リリはリリルカ・アーデという名前があります！」

「なら、リリ助だな。」

「いちいち助を付けないと呼べないんですか…？」

なにはともあれ、三人での初のダンジョン探索が始まった。

果たして、彼の加入はリリに認められるのだろうか？

# 第２５話

ヴェルフとの冒険はキリトにとってとても新鮮だった。
リリと共にパーティーを組んだ時にも似たような感覚を持ったが、やはり共に戦ってくれるというのはとても心強かった。
今までのダンジョン攻略とは明らかに自身の負担が減り、パーティーの重要性を認識した。
この日の魔石の量は過去最高で、３人で分けても多い。

「いやぁ、ヴェルフが加入しただけでここまで変わるなんてな。パーティーってのは凄いって思い直したよ。」

キリトが抱いた感想を素直に述べると、ヴェルフも悪い気はしないようで景気良く返事をする。

「俺でよければいつでも加勢するぜ。」

男二人で盛り上がっている中で、一人未だに納得してないリリがムスッとした声で答える。

「確かに、今日はいつもより格段に効率が上がりましたがリリはまだ認めていませんからね。」

「なんだリリ助？まだそんなこと言ってるのか？これからパーティー組んでいくんだし、仲良くやっていこうぜ。」

少しガサツなところがあるヴェルフにしっかり者のリリ。
なんだかんだでこの二人はいいコンビになれるかもしれない。
リリが聞いたらまた反論されそうだが、キリトは勝手にそう思っている。
この二人がいれば１３階層の攻略もいけるような気がしている。

「それで、大変申し訳ないのですがリリは明日下宿先の仕事を手伝わないといけなくなったので明日の探索は…」

「わかったよ、リリ。それじゃあ、次の探索は明後日いつもの場所で待ち合わせしよう。」

「わかりました。」

リリの先日に事件の後からお世話になってる下宿先のおじいさんは先日腰を痛めたらしく、思うように仕事ができないみたいなのだ。

リリもはやくヘスティアのファミリアに入れればいいのに、と思うキリトだが現状ではなかなかに厳しいだろうとも考える。

もっと強くなる必要がある。

レベル2程度では満足していられない。

「それじゃあキリト、明日はお前の装備でも作ろうか？」

「ほんとかヴェルフ？それは助かるよ！」

今後下の階層にいくには今の装備では心許ない。

明日はゆっくりと装備の整備に努めることにしよう。

「なら、明日俺の工房に来てくれ。」

「わかった。」

みんなと別れたあとすぐにリリがキリトの元に駆け寄る。

何か伝え忘れたのだろうか？

「リリ？どうかしたの？」

「えーと…ヴェルフ様について少しお話があります。」
「パーティーに認めないって話のこと？」
「そのことに関して、耳に入れたいことがあるのです。」
それからヴェルフについてリリから色々聞かされることになった。

★☆★☆★☆★

鍛治師のファミリアとも呼ばれる大規模ファミリアである《ヘファイストス・ファミリア》。
その鍛治師一人一人に工房が与えられるらしく、ここヴェルフの工房もまたヘファイストスから貸し与えられたものだ。
「へぇ～！ここがヴェルフの工房か！もっと散らかってると思ったけど、意外と綺麗だな！」
「ここは俺の誇りと信念もって打ち込む仕事場だからな。物の整理くらいはするさ。」
仕事場に入ってからのヴェルフはいつもの兄貴のような雰囲気ではなく、一人の職人を感じさせた。
キリトは早速この間のミノタウロス戦で手に入れたドロップ品をヴェルフに渡す。
それを元に新たな武器を作ってもらおうとしたのだが…
「え？足りない？！」
「あぁ。ナイフとかならこれで作れるんだが、キリトが使う片手剣と

なると少し材料が足りねぇな。」

なんてこった。

武器を作るのにどれだけの材料が必要なのかわからないばっかりに、ここまで来て武器が作れないなんて。

気落ちするキリトにヴェルフは笑いながら、

「そんな気落ちするなよ！他のを混ぜていいなら、それでも作れるんだからな。」

「え？そうなのか？！いや、でも俺今手元にそんなもの…」

「俺の持ち合わせの金属でよければそれで作るがそれでもいいか？」

キリトにとって目から鱗の提案に二つ返事をすると、ヴェルフは早速作業に取り組み始めた。

何か手伝えることはないかとヴェルフに聞いたが、ここからは鍛冶師の仕事だといってそれ以来キリトはただ黙って見守ることしかできなかった。

だがそれは決して退屈な物ではなく、普段攻略で使う武器がどのように作られるのかを間近に見られるいい機会だった。

しばらくして、キリトの新しい武器は姿を現した。

「できたぜ！」

ヴェルフが持つその剣はあの特殊の赤いミノタウロスを彷彿させる赤色に、ヴェルフが今回用いた金属によって黒色が混じったような刀身の色をしていた。

そして、剣自体にも今打ち終わったばかりだけではない熱を感じる。

「よかったら少し振って感触を確かめてみてくれ。」

「ああ！」

キリトはゆっくりと構えると、何度か剣を振るう。
そのずっしりとした重さにキリトは大いに気にいった。

「気に入ったよこの剣！ありがとうヴェルフ！」

「いいってことよ！」

自分の装備を間近で評価されたことがうれしかったらしく、ヴェルフも上機嫌のようだ。
だが、そこでヴェルフは急に黙りこくった。

「どうかしたのか？」

キリトがヴェルフに尋ねると、意を決したようにキリトに問う。

「キリトよ。お前、あの話聞いているんだろう？」

「クロッゾ一族のことか？」

「リリ助やお前んとこの神様から聞いてるんだろう？」

「聞いたよ。」

「なら、なおさらだ。お前は俺に『魔剣』を求めないのか？」

そう、あの日リリから聞かされたこと。そしてヘスティアがヘファイストス・ファミリアのお店でバイトしながら聴いたこと。

それはヴェルフの家系、クロッゾ一族が引き起こした惨劇。
初代は上記のスキルが発現しなかったが、世代を重ねるうちに魔剣を作れるようになる
しかし、ある世代が魔剣を王国（ラキア）に売り込んだことで貴族の地位を得た事から一族は驕り始め、大量の魔剣を送り出した事で数々の国を滅ぼした。
特に国を焼き払われた事でエルフ全体がこれを蛇蝎の如く嫌悪しており、結果として精霊の住処も焼き払った事で彼らの怒りを買い、戦争の最中に全ての魔剣が砕け散り一気に連戦連敗を喫し、一族も魔剣を作れなくなる。
王国は敗北の責任をクロッゾ家に押し付け、魔剣を作れなくなったクロッゾ家は没落する。
そんな忌まわしい過去が彼、ヴェルフの家系にはあった。
しかし、なんの因果かヴェルフにその魔剣を作る力が宿っていた。
そのせいで彼に魔剣を作るように依頼する客が後を絶たなかったようだ。
けれど、ただ一つとしてヴェルフは魔剣を作らなかったそうだ。
その訳はキリトにはわからない。だが、それは今は問題ではない。

「俺はヴェルフに魔剣を求めない。少なくとも今はな。」

「なんだ、それ？」

キリトの返答にヴェルフは納得いかず、再度理由を問う。
キリトはただ剣士であるが故に当たり前だと言わんばかりにこう答える。

「俺は魔剣がなんなのかよくわからない。けれど使いきることで、その形を失うこと。それは、剣士としてとても悲しいことだと思う。剣っていうのは、剣士にとって戦いの中での相棒みたいなものだからな。だからこそ、剣が折れた時なんかとても悲しい。そんなところか

な。」

「……」

「だけど、俺はレベル2なんかで満足してはいられない。俺はもっと強くなってダンジョンの奥底にいかなきゃならない。そのためには自分が強くなるのはもちろん、仲間が必要になる。その時に、ヴェルフが作る魔剣が仲間を窮地から救えるかもしれない。だからこそ、俺はヴェルフにはいつかその時までに魔剣を作ってくれるように信じて待つだけさ。」

キリトが一通りに話し終えると、ヴェルフはある想いとの板挟みで悩んでいるように見えた。

キリトもこれ以上を掘り下げるのは厳しいと思い、話題を変えるように話しかける。

「さて、この剣に名前をつけなきゃな！」

キリトの陽気な態度につられてたか、一度思考を止め名付けの作業に入る。

「ミノタウロスの剣だから『牛鬼』か…いや、『ミノタン』とかどうだ？」

「なぜ、最初の名前で納得しないんだよ！」

「なんだ？『牛鬼』でいいのか？」

「むしろそっちで頼む。」

ネーミングセンスのなさは多分これからずっと付き合わなければ

ならないだろうとキリトはこの時思ったのだった。

★☆★☆★☆

「それで、結局ヴェルフ様は私たちの正式なパーティということになったわけで。最初のダンジョン攻略がまさかの中層攻略なんて、展開がはやすぎませんか？」

「俺はもっと早くてもいいと思ってるけど？」

「ははは！俺たちは置いて行かれないようにしねぇとな、リリ助？」

赤いローブを身に纏った三人の冒険者。

『精霊の護符』とよばれるローブで、精霊が作成に手がかりその効果も絶大だ。

この先『ヘルハウンド』とよばれるモンスターが使う火炎を防ぐために今回は『サラマンダー・ウール』とよばれる火の精霊サラマンダー製のものを身にまとい、いよいよキリト達の中層攻略が始まる。

# 第２６話

キリト達一行は１３階層に到達後、慎重にダンジョン内を探索している。
リリが先日言った通り、モンスターの数が上層とは違いとても多い。
このパーティーはキリト以外はレベル１であり、基本アタッカーであるキリトは前衛で遊撃がヴェルフ、そしてリリが後方からサポートするといった連携が基本だ。
今はこの連携が崩れるほどの事態には陥ってはいないが、これが崩れた時、おそらくこのパーティーは一気に崩れる可能性がある。
その時は即座に撤退をすることにして中層攻略を始めた。
１３階層はどうにも洞窟のような雰囲気があり、湿気も多い。
そのためか、どうにも陰気な気分にさせる。

『ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！』

雄叫びの主である『ヘルハウンド』。
１３階層から現れるこのモンスターは『放火魔（バスカヴィル）』の異名を持つ犬型のモンスター。
口からの火炎攻撃はまさに中層攻略に先駆けて最初の難関とも言える。
パーティーの前に現れた一体のヘルハウンドの雄叫びに呼応してかヘルハウンドが何体か集まってくるのがわかる。
キリトはヘルハウンドが集まりきる前に背中にある『牛鬼』を抜いて向かっていく。
剣を右肩で構えると、剣が光を帯びていく。
それに合わせて、左足を蹴って一気にヘルハウンドに詰め寄る。
右肩に構えた剣を斜めに振り下ろしヘルハウンドに斬りかかる。
雄叫びをあげ終わった直後で虚を突かれたのか、ろくに動けずにへ

ルハウンドは灰に変わった。
片手剣剣技突進技《ソニック・リープ》を繰り出し、技の硬直が解け終わる頃に、先ほどの雄叫びに反応したヘルハウンドが3体こちらに向かってくる。
それに反応したヴェルフが大剣を持って、奴らに向けて横に剣を振るう。
三体のうち一体がそれに反応出来ずにヴェルフの攻撃をくらい、もう二体はそれを躱して後方のキリト目掛けて襲いかかる。

「悪い！二体逃した！」

「任せてください！」

これに応じたのはリリ。
手に持つボウガンでヘルハウンドに狙いをつけ、その眼球目掛けて矢を放つ。

『ぎゃう！』

短い悲鳴をあげたヘルハウンドはその場で止まって、目に刺さった矢を取ろうとして立ち止まった隙に、キリトはもう一体との対峙をする。

「せい！」

ヘルハウンドの首元に剣を刺したまま、跳躍し、首を跳ねた。
魔石を残して灰になると、残りの一体はヴェルフが仕留めてくれたらしい。

「お疲れ！」

「おうよ！これなら楽勝じゃねぇか？」

キリトの労いの言葉にヴェルフは強気な言葉で返す。

「言っときますけど、中層の恐ろしさはこんなものではありません！なめてかかるとすぐ死にますよ。」

ヴェルフの言葉に反応して、リリは脅すように忠告する。

「はいはい」と返すヴェルフにホントにわかっているのかとリリが怒鳴るというやりとりがここに来て何回目になるかわからないくらい行っている。

すると、

「ん？なんだ？こいつ？」

目の前にいるもの。

どうみても兎にしかみえないこのモンスター。

『アルミラージ』と呼ばれるモンスターで、長い耳に白と黄色の毛並みとふさふさの尻尾。

頭には鋭い一角が生えていて後ろ足で地面に立っていた。

はたして、倒しても構わないのか？

「なんだこいつ？」

「なんだか、愛嬌があってかわいいです！」

二人もこのモンスター大してどう対処したら、いいのか困っている。

すると突然角を向けて襲ってきた。

「うわっ！」

「見た目に騙されてはいけません！モンスターはモンスターです！」

ヴェルフは間一髪のところで躱した。
それをリリが気を引き締めるように促す。

「にゃろう！」

ヴェルフが大剣で応戦するが、身軽な動きになかなか捉えられない。

「なにやってるんですか！しっかり狙ってください！」

「っていわれても、こいつなかなかすばしっこいぜ。」

「キリトさんはもう片付いていますよ。」

「ん？なんだ？手を貸そうか？」

ヴェルフが少しだけ目をキリトの方に向けると、何食わぬ顔をして周りには大量の魔石がドロップしていた。

「ははは…流石だぜ。」

こうしてキリトと協力してヴェルフはアルミラージを討伐した。
そのあと、奥に行きすぎないように気をつけながら攻略を進める。

「それにしても、この辺にいくつか空いている穴ってなんだ？」

キリトが何気なく質問したものだったが、二人ともなんとも言えない顔しながらキリトの方をみる。

それに気づいたキリトはバツが悪そうに、

「な、なんだよ？」

「いえ、なにも。この穴は下の階層に繋がっている縦穴です。しかし、この縦穴がどこに繋がっているかは複雑で緊急時かレベルが高い冒険者以外はあまり落ちないことおすすめします。」

「へぇ～。」と感心するキリトにリリは小さくため息をつく。
ヴェルフもこれには苦笑いするしかなかった。
どうにもこの人は少し緊張感が少ないように思える。
すると、突然目の前から一つのパーティーが走ってきた。
ひどく慌てている様子で、よく見ると男が女の子を抱えている。
どうやら怪我をしたらしい。

「まずいですよ…。」

「あぁ、あれはひどい怪我だな。はやく手当しないと。」

「そうでは、ありません！」

「へ？」

キリトが何か検討違いなことを言ったのかと思ったが、やはり怪我をしていることに間違いない。
だとすると、別なことを言っているのかと再度先ほどのパーティーを見ようとした。
しかし、その前にパーティーが現れたところから音がする。

「まだわからないんですか！モンスターを押し付けられたんです！」

その瞬間先ほどとは比べようもない数のモンスターが現れた。
気がつくのが遅かったキリト達はもう逃げるという選択肢を失ってしまった。

「やべぇ！どうする?!」

ヴェルフが応戦しながら打開案がないか聞いてくるが、キリトもリリもこの状況をすぐさま打破する作戦は未だに見いだせていない。
その間にモンスターは連れられたもの以外にもどんどん溢れてくる。
ここで今のキリトでは二人を守りながらこの数を相手にするのは現実的ではない。
しかし、ここで逃走しようにも道をうまくかいくぐることはできないだろう。
となると残る選択肢は、

「二人とも！あの穴に飛び込むぞ！」

おあえつらむきにあるあの下の階層に繋がっている穴。
それに飛び込んで逃走を図ることが今打てる最善策。
しかし、ヴェルフとリリは抗議する。

「おい！今のこのパーティーで下の階層にいくのかよ！」

「生き残れる可能性は低いです。それでも行きますか？」

これだけ激しい戦闘の中で一瞬だがキリトは二人と目が合う。
そして、口角を吊り上げてこう言い放つ。

「生きてここから出るぞ！」

その言葉に二人は覚悟を決めて言い返す。

「おう！」

「はい！」

その言葉に二人はもう迷いはない。
一気に穴に向かって走りだす。
そのタイミングで後方からヘルハウンドが口から火炎攻撃の態勢に入る。

「やべぇぞ！」

「止まるな！いけ！」

キリトが先を促す。
しかし、モンスターがいるの中で思うように前に進めない。
そして火炎攻撃がキリト達に向かって放たれる。

「ちっ！」

キリトは手に持つ剣を前にかざす。
そして、剣を高速で旋回させて目の前にかざすことによって剣は盾のように火炎を防ぐ。
片手剣剣技防御技《スピニングシールド》
剣の盾とダンジョンに潜る前に買っておいた《サラマンダー・ウール》のおかげでダメージを最小限に抑える。

「よし！飛び込め！」

そして、穴にようやくたどり着いた三人はキリトの指示で勢いよく

飛び込んでいった。

★☆★☆★☆

「……みんな生きてるか？」

「なんとかな…。」

「リリも生きてます…。」

あの後、縦穴に落ちたパーティー一行は思ったより深かった為に落下によるダメージでしばらく動きが取れなかった。

いまはポーションで幾分かは回復したが、この先の戦闘を考えるとこれ以上の使用は避けるべきだ。

しかし、この先は全くの未知の世界だ。

イレギュラーな事態にいくつも出くわす危険がある。

「さて、ここからどうやって下の階層にいくかな？」

今後の方針としては安全層である１８階層目指して移動していくわけになるのだが、なるべくモンスターとの戦闘は避けたい。

ここで、知識が豊富なリリにキリトは相談する。

「そうですね、このまま縦穴を利用しながら下の階層を目指した方がいいでしょう。急な落下だったので、今ここがどの階層でどの辺りにいるのかが把握できていませんからね。」

感覚的には２階層程度落下したような気がするが、気がするだけで全く根拠がない。

よって、ここがどの階層なのかさえわからないのだ。

ここはリリの言う通り縦穴を使っていくのが最善だ。

「そうとわかればさっさといこうぜ！」
ヴェルフは気合十分な感じで先頭を歩いていく。
「陣形を乱さないでください！まったく、もう！」
「あはは…」
その後、１８階層までの逃避行は順調に進んでいった。
途中ヘルハウンドの群れに遭遇した時はキモが冷えたが、ヴェルフの対魔魔力魔法《ウィル・オ・ウィスプ》。
この効果で、敵が魔法及び魔力属性の攻撃を発動させる際、タイミングよくあわせることで強制的に魔力暴発イグニス・ファトゥスを誘発させ、自爆させることによってなんとか危機を乗り越えていた。
しかし、途中で魔法酷使による精神疲弊マインドダウンによりヴェルフが戦闘不能になってさらにパーティーは危機に立たされた。
「キリトさん。もう残りのポーションも少ないです。このままでは…。」
「くっ…。」
感覚的には１６階層辺りまではきている。
１７階層は階層主がいる階層で現在遠征向かっている《ロキ・ファミリア》が倒してくれたおかげであと数日は現れないだろう。
だとすると、ここが踏ん張りどころだ。
「諦めるな、リリ。もう少し行けばきっと次の縦穴が…。」
すると、目の前には縦穴を発見した。
なんとも幸運なんだろうかと安堵したのも束の間だった。

『『ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!』』

いくつものモンスターの咆哮が重なったものがダンジョン内に響く。

縦穴付近にはヘルハウンド、そしてミノタウロスがいた。

「そんな…あと少しで…。」

「下がってろ、リリ。ここは俺がやる。リリはヴェルフを頼んだぞ。」

キリトはゆっくりと背中にある剣を抜く。
今度は二本その両手にはあった。
右手には《牛鬼》、左手には《黒い剣》。
赤と黒の剣をゆっくりと構えて、モンスターたちと対峙する。
一瞬の静寂は、すぐに破られヘルハウンドが火炎ブレスで攻撃してくる。

後方にはリリとヴェルフがいる。
ここで躱したら二人に当たってしまう。
なら、一体どうすればいい?
せめて、魔法を剣で斬れるなら…。
そう考えたキリトは数回剣を振り回して、右肩に剣を構える。
青白く光を放ち始めた剣にさらに冷気が纏っていき、それをキリトはヘルハウンドの火炎に向かって振り下ろす。
《魔法付与》により、剣の斬撃自体が魔法効果を持ったことにより魔法を相殺しようとキリトは考えたのだ。
一撃、二撃とキリトは剣で火炎を切っていく。

「うっそぉ…」

その光景を見たリリはあまりの光景に開いた口がふさがらない。
魔法を剣で切ろうなんて誰が考えるのだろう。

そして全て斬り終えた直後に一気にモンスターとの距離を詰める。
ヘルハウンドが追撃をしようと、ブレスのモーションに入る。
そこを狙って、先ほどこっそりリリから拝借しておいたボウガンの矢をヘルハウンドの目にめがけて投げる。
ヘルハウンドがひるんだ際にミノタウロスと対峙することをキリトは選んだ。

『がああああああああああああああ』

前回は大いに苦しめられたこのデカブツ。
だが、前とは違う。
振り下ろされる天然の大剣をキリトは右手の剣でバリィすると、左手での剣で追撃する。
ランクアップした能力なら片手の剣でも相手の大剣の側面を狙えば十分に防げる。
余った左手はその隙をついいて確実にタメージを与えていく。
しかし、ミノタウロスに時間を掛ける猶予はあまりない。
ここで一気にカタをつける。
両手の持つ剣が黄色に光り、ソードスキルを発動させる。
右手の剣で左斜めに切り下げ、すぐに左に持っていた右手の剣を右下に切り下げる。
そして、左手の剣を右下に切り下げ、下げた左手の剣を左上に再び切り上げる。
ここでのけぞったミノタウロスに追い打ちと言わんばかりに両手の剣を上段から振り下ろし切りつける。
二刀流剣技７連撃技《ローカス・ヘクセドラ》

「いまだ！穴に飛び込め！」

ミノタウロスを打破したキリトはすぐさまリリに指示を出す。

リリはヴェルフを抱えて必死に走りだす。

キリトたちはこれで最後であると祈りつつ再び暗い穴へと飛び込んでいった。

# 第２７話

「…っ」

どうやらうまく下の階層に来れたようだ。
あとは、この階層を抜けるだけだ。

「リリ？ヴェルフ？」

「んっ…リリはなんとか。」

リリは無事みたいだ。
ヴェルフもリリが持つバックパックがクッションになり助かったみたいだ。
あとは、この階層を抜ければ安全地帯である１８階層に行ける。
現在遠征中のロキ・ファミリアがここの階層主を倒して進んだので、復活にはもう少し時間がかかるはず。
キリトたちは気力を振り絞って最後の階層踏破に挑む。
しかし、

「なんで…このタイミングで…」

そこに見えた光景は階層主が今まさにダンジョンの壁から生まれ落ちようとするものだった。
あと一歩でこの階層を安全に抜けられたものを。
ダンジョンはひたすらにキリトたちを排除しようとするような意思があるようにすら思える。
けれど、キリトは諦めない。
生き残る可能性があるなら、貪欲に生にしがみつく。
そのための可能性として、

「リリ、俺が奴のタゲを取る。その間に安全地帯に向かってくれ。」
「そんな！一人で階層主なんて無理です！」
「頼む！なんとか時間を稼ぐ！その間に応援を呼んできてくれ！」
キリトは必死にリリに頼み込む。
だが、タゲを取るといっても簡単じゃない。
奴の狙いを確実にキリトだけに向けさせなければ、リリたちにも危険があるのだ。
「……」
一緒目をつぶって考えたのち、リリは答える。
「…絶対、死なないでください。」
「死ぬ気なんて毛頭ないよ。ただ、死ぬ気で挑まないと耐えられる相手でもないけどね。」
「この状況でまだそんな軽口いえるなら大丈夫そうですね。いいです。その作戦でいきましょう。」
そして、巨大な体を持つ階層主がキリトたちに立ちふさがる。
キリトは背中にある二本の剣を抜いて構える。
「いいか？俺がある程度引きつけてから向こう側に走るんだ。いいか、今できる全速力でだぞ。途中で何があっても止まるな。」
「わかってます。」

「3カウントで戦闘を開始する。3、」

緊張が走る。

階層主も雰囲気を感じ取ったのか、動きを見せない。

「2、」

手に持つ剣に力が入る。

額からはうっすら既に汗が滲んでくる。

「1、」

つま先に力を込める。

体を前傾にし、

「GO!」

一気に加速し、階層主に突っ込んでいく。

階層主は向かってくるキリトに目標を定めて向かってくる。

この階層主であるゴライアスは巨人のモンスター。

その巨大な手や足から繰り出される攻撃は今のキリトにとってはかなりの脅威だ。

一瞬でも気を抜けばすぐにあの世いきだ。

ゴライアスは足を大きく上げて、そのままキリトめがけて踏みつけようとしている。

それをキリトは大きく転がって回避する。

回避したあとに、踏み込んできた足にむかって斬撃を食らわせる。

『ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!』

人間でいう足の健の部分を斬ったせいか、ゴライアス大きな叫び声を上げる。
だが、切り込みが浅いかそれでゴライアスが倒れこむ様子はない。
追撃しようと再度距離を詰めるが、腕を地面に向かって叩きつけるゴライアスの足になかなか近づけない。
ならばと、振り下ろした腕を狙って斬撃を繰り返す。
攻撃を加え続けるキリトにゴライアスは狙いを完全に絞り狙ってくる。
タイミングを見計らってリリが、ヴェルフを抱え18階層への入り口へ向かう。
キリトもそれを感じ取ってかひとまず安心する。
あとは、このままこいつを足止めすればいい。
逃げ切ったリリを追えばそれで終了だ。
そのはずだった。

―――――――――――――ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ!!!!!!

突然の地震にキリトも驚く。
直後地面に大きな割れ目が生まれ、ゴライアスは手を入れる。
そこから出てきたのは、

「…剣？」

それは巨大な剣だ。
まさかとは思うがあんなものを振り回されたらとてもじゃないが回避も防御も無理だ。
少なくとも”今のまま”では。
現状、キリトのレベルでは階層主をソロで絶対倒せない。
それがこの世界での普通だ。
だが、それはキリトには当てはまらない。
なぜなら、彼にはどんな逆境をも跳ね除ける神のような力を今身に

つけたからだ。
《心意》。それがこの世界でレベルという圧倒的な力の差を埋めるキリトはイメージする。
強く。今より強く。
ゴライアスが大きく剣を振りかざす。
それをキリトは二本の剣を交差させそれを受け止める。

「ぐっ!!!!」

凄まじい重量感にキリトはすぐにでも潰れてしまいそうになる。
けれど、キリトはやめない諦めない。
今度は明確にイメージする。この大剣を跳ね除けるイメージを。

「……うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!」

二本の剣が黄色の光を放つ。
徐々に交差していた剣の均衡が崩れていく。
キリトの剣がゴライアスの大剣を押し返していく。
しかし、跳ね返すほどまで力が湧いてこない。
いや、事象を上書きできない。
ここ数日のダンジョン探索による弊害からなのか。

「ぐっ……この!」

剣でこのまま受けきるのは不可能だと感じたキリトは、少しづつ身体を右にずらしていく。
そしてタイミングを見計らって力を緩め、全力で右に回避する。
しかし、ゴライアス攻撃の余波がキリトを襲う。
右に避け、直撃は免れたがその余波を受けて身体がうまく動かない。

キリトは剣を杖代わりにして、身体を支えるがこのままでは明らかなジリ貧だ。
撤退を即座に行わなければ、明確な死が待つだけだ。
リリとヴェルフの姿があるか横目で確認し、すでに視認できないところを見るとうまく逃げ切れたようだ。
キリトは今ある力全てを使ってゴライアスからの撤退をする覚悟を決めた。
ただ、ここから出口に向かって走ったところで必ず追いつかれる。
なので、

（マインドの疲弊が怖いが、全力の心意を乗せたソードスキルを奴の足にぶつけるしかない。）

全力の心意攻撃によって足を攻撃し、一瞬の動きを止めての脱出。
キリトにはもうこの手しか生き残る可能性がない。
覚悟を決め、奴にもう一度接近するしかない。
その際、相手の攻撃を心意で防いだら攻撃に回すマインドが足りない。
必ず奴の攻撃を回避し、攻撃を加える。
レベル２になったばかりのキリトがこれを成功させるのは至難の業だ。

（それでも…やるしかない！）

キリトは一気に走りだす。
先ほどの衝撃でイメージよりうまく足が動いていない。
それを考慮に入れ、回避しなければならない。

『ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!』

ゴライアスが大剣を横に大きく振るう。

それを姿勢を低くして、回避する。
攻撃はそれだけでは終わらず、何度も大剣を振るってくる。
一撃でももらえば終わり。
そんな恐怖が頭によぎる。
だが、キリトは止まらない。
まだ、こんなところでは死ねない。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

紙一重で回避し続け、ついに足元にやってくる。
止まってる時間はない。
キリトは突進しながらソードスキルを発動する。
右手にある《牛鬼》をゴライアスの左足に向かって突き刺す。
さらに身体を時計回りに回転させ左手の《黒い剣》で再び突き刺した。
二刀流突進二連撃剣技《ダブルサーキュラー》
奴の足を切断するようなイメージで発動させた剣技はゴライアスの足首にある腱のような部分をきずつけれたようで、ゴライアスは膝をついて動きを止める。
その隙にキリトは今できる全速力で出口に向かった。
しかし、階層主の再生力が高いのか傷つけた箇所がどんどん治っていく。
ある程度距離を離したが、ゴライアスは再び立ち上がってキリトに迫ってくる。
しかし、今から再び対峙する余裕はない。
走る、走る、、、
あと、少し！

『ガアアアアアアアアアアアアアアアアア！』

奴の叫び声が聞こえた瞬間、背後から大きな衝撃がキリトを襲っ

た。

身体は大きく吹っ飛び、キリトは意識を失った。

# 第２８話

「う…うーん……」

キリトは気がつくと見知らぬ天井が目に入った。

「キリトさん?!」

「ん…?リリか?無事か?」

「ええ、リリは大丈夫です!それよりキリトさんは平気ですか?」

キリトは身体を動こかそうと上体を上げようとしたが、

「ぐっ!」

肋の辺りが軋むような感覚。

ゴライアスとの戦闘で少なからずダメージを負ったようだ。

しかし、よくあの状況で生き残ったものだ。

「少し休めば多分大丈夫だろう。それよりここはどこなんだ?」

「ここはロキファミリアのテントよ。」

キリトがリリに尋ねると、テントの入り口から別の声が聞こえた。

そこに立っていたのは、

「リズ?リズなのか?」

「久しぶりねキリト!こうしてオラリオで直接会うのは初めてかしら?」

そこにいたのはかつての同郷の友人リベットだった。
ユウキやシノンから話は聞いていたが、こうして顔を合わせて会うのは初だった。

「どうしてリズがロキファミリアのテントに？」

「ヘファイストスファミリアも今回ロキファミリアの遠征に鍛冶師として同行してるからよ。」

そういえば、そんな情報をアイズたちが言っていたような気がする。
キリトはどっか遠くにしまい込んだ記憶を思い起こしながら考える。

「そうだ！ヴェルフは?!」

「おう！呼んだか？」

キリトがヴェルフの所在を聞くと、再びテントの出入り口から声がした。
そこには元気になっていたヴェルフがいた。

「よかった！元気そうで！」

「おかげさんでな！」

ヴェルフが笑顔で返す。
その姿を見て安心した顔をするキリト。
リリもようやく3人とも無事に生き残れたことに実感が湧いたのか、力を抜いてぺたりと地面に座り込む。

「しっかし、ヴェルフがまさかキリトのパーティーに参加してるなんて驚いたわ。どうりで最近私との付き合い悪かったわけねー。」

「あんたに付き合ってたら自分の時間ないしな。」

「言ってくれるわね！あんたがパーティー組めないで碌に鍛冶師スキルあげられないから仕方な～く付き合ってやってたのにー。」

「頼んでねぇよ！余計にお世話だ！」

リズとヴェルフとのやりとりから察するにこの二人はどうやらそれなりに付き合いが長いみたいだ。

ヴェルフもちゃんとファミリアの中で長いいやつがいてキリトもなんだか嬉しくなった。

「二人とも仲がいいんだな！」

「よくない！」

「それで、これからどうします？キリトさん？」

今後のことをリリはどうするかとキリトに尋ねる。

キリト自身、怪我がまだ癒えずにいるし、野宿や宿を取れるお金もない。

このままお世話になりたいところだが、別のファミア同士そう簡単な話ではない。

ここは一度ロキファミリアの団長と話をしなくてはならない。

「まずは、ロキファミリアの団長と話をしてくるよ。傷の手当てなんかのお礼も言わないといけなしね。」

「それなら、私が案内するわよ。付いてきて。」

リリとヴェルフにテントに残ってもらうように言って、キリトはリズに案内してもらってロキファミリアの団長のテントに案内してもらうことになった。

道中、ロキファミリアやヘファイストスファミリアの冒険者から見られていたが、キリトはなるべく目を合わせないようにした。

全く関わりのないファミリアの冒険者がこの場にいるのだ。

よく思っていない連中もいるだろう。

なるべく刺激しないようにしないといけない。

「付いたわよ。」

そんな事を考えているうちにどうやら付いてしまったらしい。

失礼します、と一声かけてテントに入り込むとそこにはロキファミリア屈指の実力を誇る3人がいた。

まず、リヴェリア・リヨス・アールヴ。

種族はエルフ。

二つ名は「九魔姫（ナイン・ヘル）」と呼ばれ、自他共に認めるオラリオ最強の魔法使いである。

続いてガレス・ランドロック。

種族はドワーフ。

二つ名は「重傑（エルガルム）」と呼ばれ、圧倒的なパワーとその頑丈さでパーティーを支えるなんとも頼り甲斐のある武人そうだ。

そして、ロキファミリア団長のフィン・ディムナ。

種族は小人（パルゥム）。

二つ名は「勇者（ブレイバー）」。

その小さな身体でファミリアを先導し、指揮するその姿はまさに勇者だと言われている。

オラリオにさほど詳しくないキリトでもこれくらいは知っている。

それくらいこの3人は強いのだ。
今戦ったら全く歯が立たないだろうなー、なんて気の抜けた考えをキリトがしていると、
「やぁ。怪我はしているが、どうやら大丈夫そうだね。」
「は、はい。治療していただいてありがとうございます。」
「なに、僕たちは全く別のファミリアだが同じ冒険者だ。こうして余裕がある時は手を貸すのも当然さ。それに、君は僕のファミリアのユウキ、シノン。それに、今回お世話になっているヘファイストスファミリアのリズベットさんの旧友なんだ。無下にはできないさ。」
ほんと、この3人がいるファミリアでよかったと思った。
キリト自身、リリからの話や酒場での出来事などで全ての冒険者がいいやつとは限らない事を知っているからなおさらだ。
「おい、フィン?こやつが例のミノタウロスをレベル1で倒したという冒険者か?」
「そうだよ。彼の戦いは実に見事だった。」
「ああ。見ていて気持ちが昂らせるものだったな。」
ガレスがフィンに尋ねると、フィンが答える。
続いて、リヴェリアも答える。
この3人に言われるとなんだか気恥ずかしい。
「ああ、その話ユウキとシノンから聞いたわよ。相変わらず無茶してるわねー。」

「別に無茶したくてしてるわけじゃないんだけどな。」
「まぁ、私の作った剣をうまく使ってるようで何よりよ。」
「ん？リズが作った剣？なんのことだ？」
キリトが尋ねると、リズはものすごく驚いた顔でこちらを見てくる。
本気でわからないので再度尋ねると、リズは例の《黒い剣》について話をした。
「と、すると…あの《黒い剣》ってリズが作ったのか!?」
「さっきからそう言ってるでしょ！それにその剣にはちゃんと《夜空の剣》って名前があるんだから！」
夜空の剣
なんだかしっくりくる名前だ。
今まで《黒い剣》としか呼んでなかった分名前ができたことで余計愛着が湧きそうだ。
「ふふっ。どうやら積もる話もあるようだし、どうだろう？傷が癒えるまでここで休んでいかないか？僕たちも君と話がしてみたいしね。」
話が逸れていたが、ここで本来の目的であるここでお世話になるという話をなんと向こうから振ってきた。
これは願ってもないチャンスだ。
「それはこちらからお願いしようかと思っていまして。なるべく邪魔にならないようにしますので、どうかお願いします。」

「同じ冒険者だ。そう硬くなることはない。少しの間だがよろしく。」

フィンがどうやら本気でそう言っているらしい。

手を差し伸べてきた彼の手をキリトは手を握って応える。

「そういうことなら。よろしくな。」

# 第２９話

辺りは暗くなり、どうやら時間帯は夜になったようだ。
それにしても、ダンジョンの中だというのに外が明るくなったり暗くなったりするのはとても不思議感じがした。
その理由としては、ここ１８階層には時間によって光を放つ結晶体があるらしくそれにより昼夜の区分があるらしい。
夜になったキャンプでは夕食の宴で賑わっていた。

「それにしても、この間ランクアップしたキリトがもう１８階層まで踏破してくるなんてね。相変わらず破天荒なやつね。」

「まぁ、突破できたなんて言えるもんじゃなかったけどな。ってか、シノン俺に毎回当たりきつくないか？」

シノンの悪態にキリトは馬鹿正直に答えるが、毎度の悪態にこちらも負けじと攻撃してみるが、

「あら、そうかしら？私は大体こんな感じよ？」

「確かに。シノンはいつもピリピリしてるわよね。もっと肩の力抜いたら？」

シノンの後ろに寄ってきたのはロキファミリアの一人。
第一級冒険者ヒリュテ姉妹の姉、ティオネ・ヒリュテ。

「あー！《黒の剣士》だー！」

そして、キリトの背後に寄ってきたのは妹のティオナ・ヒリュテ。
しかし、黒の剣士って一体なんだ？

「く、黒の剣士って？」

「あぁ、気にしないでー。この子が勝手に英雄譚の一つにある《黒の剣士》を連想してそう読んでるだけだから。」

ティオナの発言について、ティオネがフォローを入れる。

それにしても、英雄譚から取ってくるなんてなんだか気恥ずかしいものがあるな。

「けど、私もあなたの強さには少し興味があるわねー。どう？これは何かの縁だし、教えてもらえないかしら？」

「私も知りたーい！教えて！黒の剣士！」

「えーっと……」

ただでさえ露出の多いアマゾネスが近くに寄られるとどうにも落ち着かない。

加えて、ロキファミリアの第１級冒険者だ。

それなりに圧も感じる。

どうにかして話題を逸らさないとこのままじゃジリ貧だ。

「そ、そういえば今回の遠征でどこまで行けたんだ？」

「５９階層だよ！久しぶりキリト！」

その問いに答えたのはこれまたいきなり現れたユウキだった。

しかし、５９階層とは…

今のキリトにはなかなかに想像できない領域だ。

「どんなところだった？」

「資料では寒い場所って記載だったんだけど…」
何やらいい淀んでるな。
言いたくないことでもあったのだろうか？
そのうちギルドへの報告でわかることだし、キリトは深くは聞かなかった。

☆★☆★☆☆★☆★☆★

食事を終えてキリトは少しあたりを散歩することにした。
しかし、あれからユウキとティオナに１８階層へどうやってきたのかとかゴライアスの話をしたらどうやってしのいだのとか質問ぜめにあって大変だった。
ヴェルフはリズと…あと同じファミリアの人だろうか？ 褐色で左目に眼帯をしており、そして胸が大きい人に何やら大分いじられていた。
リリはというと、なんとあのフィンと話をしていた。
同じ小人パルルゥム同士何か感じるものがあるのだろうか？
先ほどの思い出しながら、歩いているといつのまにか１７階層の入付近にいた。
このあたりは記憶にない。
何せあのゴライアスの攻撃で意識を失ってしまったからだ。
この先にあの怪物がいると思うと自然と体に力が入っていくのを感じる。
だが、何も戦うわけではない。
そう考えると力が入っている自分がなんともアホらしいとキリトは深く息を吸って落ち着こうとする。
すると入口から、
『ガアアアアアアアアアアア!!!!!』

声はさすがに入口からなので遠いが、ゴライアスの鳴き声が鳴り響いてきた。
一体なぜ？
まさか、冒険者が来てるのか？
俺たちみたいな状況ならマズイのではないか？
そんなことを思ったキリトは様子を見に行こうかとそんなことを考えていると、
「うわあああああ!!!」
どん！と入口から吹っ飛ばされて来たのはなんと、
「か、神様？」
「いててて……あれ？キリト君?!キリト君なのかい?!キリトくーん！」
そこにいたのはヘスティアだった。
突然現れ、突然飛びつかれたキリトは意表を突かれすぎてその場に押し倒される。
地面に押し倒された少しの痛みと、自身の胸のあたりに感じる柔らかさ、そして目の前にあるヘスティアの顔にキリトの頭の処理が追いつかない。
一体、
「どうして神様がここに？」
「それはね…」
頭がショートしてる間にヘスティアの後ろには何人もの人がいた。

そこにはあのモンスターをキリト達に押し付けたパーティーの人たちもいた。
これは一波乱ありそうだ。

★☆☆☆★☆★

再びフィンに話をつけて、キリト達が借りているテントに先ほど現れたメンバーとヴェルフ、リリを呼んだ。
ヴェルフやリリはモンスターを押し付けたパーティー、今回ここに来た《タケミカヅチ・ファミリア》のカシマ・桜花、ヤマト・命、ヒタチ・千草の三名に対して睨んでいた。
気持ちはわからないわけではない。
実際、あの時モンスターに襲われたせいで危うく命を落としかけたのだから。

「おい、てめぇよく俺たちの前に顔出せたな。」

「あの時お前達にモンスターを押し付けたのは悪いと思ってる。それと同時にあの時俺の出した判断は間違いではないとも思ってる。」

「なんだと?!お前のせいで俺たちは死にかけたんだ!それなのに間違ってなかっただと?ふざけるな!」

「リリも今の発言は聞き捨てなりません!こちらは死にかけたのです!謝罪だけで済むような話ではありません!」

大柄な体格の青年、桜花の発言にヴェルフもリリもついに憤りを抑えられなくなったようだ。
二人の怒声に桜花の後ろにいる長い黒髪を1つに結った少女、命や前髪が目にかかっている気弱そうな少女千草は顔を下に向け辛そうな表情だ。

キリトはこの雰囲気がどうにも苦手だ。
どうにか収めないと危険な感じがする。
「なぁ？二人とも落ち着けって。」
「キリトさんは落ち着きすぎですよ！どうしてそんなに落ち着いてるんですか？」
落ち着いている…か…
どうだろう？
もし、これで二人がもしダンジョンで死んでいたら…
そんなもしもを考えるだけで腹のなかが煮えたぎるほど怒りが湧いてくる。
それこそこの二人と同じように、いやもしかしたら何も言わずに斬りかかっていたかもしれない。
だが、彼らは生きている。
今はそれが何より嬉しいのだ。
だから、彼らタケミカヅチファミリアの人への怒りが薄いのかもしれない。
「そりゃあ、人間だから。誰だって自分の命は大切だし、他人より自分の仲間の方が大切に決まっている。」
「それは……」
キリトの言葉にリリも反論しづらくなっている。
実際リリもおそらくキリトが危険にさらされた時真っ先に彼を優先して行動するだろうと考えたからだ。
「けど……」

「それにだ、もし俺が彼の立場なら同じことをしたかもしれない。その時リリやヴェルフは俺を責めるか？」

キリトはそんなことしない。

二人はそう思ってる。

しかし、実際キリトが桜花と同じ行動をして果たして責められるだろうか？

一瞬の思考をし、ヴェルフは答えを出す。

「ふん。納得はしてやる。けど、許したわけじゃねぇ。それは忘れんな。」

「許してもらおうなんて思ってない。」

未だ微妙な緊張感はある。

二人も怒りを感じているだろう。

だが、今宵はここが落とし所だろう。

今後彼らとのわだかまりは解消されるかはわからない。

けれど、過程がどうあれキリト達生きているのだ。

いずれ時がこのことを緩和してくれるかもしれない。

今はそう信じよう。

# 予期せぬコンビ
# 第３０話

（む～～～～～～）

ある少女は唸っていた。
ロキ・ファミリアの一員であるエルフの少女、レフィーヤ・ウィリディスはこのキャンプに一緒にいる黒いコートの男を睨んでいた。
この男はあろうことか彼女の尊敬するアイズと秘密裏に特訓をしていたという情報を入手してからレフィーやは怒りを抑えられていない。

（私だってまだアイズさんと特訓なんてしたことないのに～～!!!フィルヴィスさんとの特訓は確かにためになりましたが…）

【ディオニュソス・ファミリア】のフィルヴィスとの特訓をしている中での出来事だったらしく全く把握していなかった事実を知ってしまったことで、彼女にとってこの黒い野郎は完全に敵と認識したレフィーヤはひたすら睨みつける。
他に何か行動しようとはしないのかと思うところだが、アマゾネス姉妹やシノンなどと仲良くしているところを見るとさすがに物理的なアクションを起こす勇気が持てない。
睨みつけるという行動は彼女が起こせる最大限の抵抗なのである。
先ほど彼の主神と他の冒険者たちが共に来てより一層このキャンプ場も賑わいを見せはじめた。
特に神ヘルメスとそしてその眷属【万能者】と呼ばれるアスフィ・アル・アンドロメダさんも一緒に来た時は大いに驚いた。
そして、フードとマスクをしていてよく見えなかったが同族のエルフも見かけたが、いまはどこかに移動したようだ。
色々な方向に視点を移動させていると、いつの間にかあの真っ黒男

が森の中に歩いていく。
この時間に一体どこへ？
しかし、これはチャンスなのでは？
今まで何かと他の人たちが彼の周りにいたが、一人になった今なら彼と直接話せる。
レフィーヤは彼の後を追うことにした。

??★☆★☆☆☆☆☆

彼は一体どこまでいくのだろう？
気づくとあたりは森ばかりになっており、キャンプ地から遠く離れてしまった。
装備がない状態でモンスターと遭遇した場合非常に面倒だ。
レフィーヤ自身は能力的に問題ないが、彼は流石に装備がないと危ないし、この状況ではもしもの時は自分が彼を守らないといけない。
彼のことは嫌いだが、それでも自分のファミリアの仲間の同郷とあってはみすみす見放しては気分が悪い。
そうこう考えていると、

「なぁ、あんたいつまでついて来るんだ？」

「へ？」

突然話しかけれとっさに反応ができなかった。
相手はそもそも自分に気づいていないと思ってたのでなおさらだ。

「あんた確かキャンプ場でずっと俺を睨みつけてた人だよな？俺、何か気分を悪くさせちゃったか？」

「そ、それは…」

一緒ん言い淀んだが、気づかれていた以上勇気を持って言うしかない。

「あ、あなたがうちのファミリアのアイズさんと秘密裏に特訓してたのが気に入らなかったんです！」

半ばヤケクソ気味に言い放ったその言葉。

彼はなぜか「そっちかー」てきな顔をして視線を外す。

一転して状況が有利になったレフィーヤはここぞとばかりに攻め始める。

「だいたいですね！あなたは他のファミリアであるくせにうちのキャンプに転がり込んだり、アイズさんとた、楽しい特訓するなんて図々しいんです！」

楽しい？と頭にハテナマークを浮かべながらも、彼は非常に気まずそうな顔をしていた。

「あー…えっと、その、ごめんなさい。」

自分が強くなるためとはいえ、確かに他のファミリアの人たちにお世話になりっぱなしだと自覚しているキリトは彼女の言葉に何も言い返せずただ謝るしかなかった。

そんな彼の本当に申し訳ないと感じる態度に自分も少し言いすぎたとような気がして来た。

何より、今回のキャンプは団長のフィンが決めた以上彼に文句を言うのはどうかと思って来たし、なぜか逆に申し訳なくなって来たあたり彼女の人の良さが見える。

「と、とにかく！これからアイズさんと勝手に行動しないこと！いいですか？」

「ああ、わかったよ。」

そんなやり取りを終えると、何やら森の奥から音が聞こえて来た。

「今の…聞こえたか？」

どうやら彼にも聞こえたようでレフィーヤもそれに頷く。

「この階層ではこんな音よく聞こえるのか？」

「いいえ、そんなことはありません。確かにモンスターは現れますがこんな音は初めて聞きます。」

彼にそう伝えたが、彼女にはこの音に聞き覚えがあった。

しかも、ごく最近。

嫌な予感がする。

一度キャンプに戻って報告をするか？

しかし、もし予想したものであったならばここで見失っては手がかりが失ってしまう。

ここはできる限り情報を手に入れてから戻る方がいいだろう。

「すみません。この音の調査をします。あなたは早くキャンプ場に戻ってください。」

「いや、俺も手伝うよ。あんた見たところ近接で戦うって感じではなさそうだし、魔導師か？なら、壁役がいないと満足に戦えないだろ。何、肉壁程度にはなるさ。」

確かに自分一人では魔法を撃つのに無防備になるので不安だったが、レベル２の彼に果たして壁役が務まるのかどうか。

しかし、ここで言い争っている時間はない。
ここはもう着いて来てもらうしかない。

「わかりました。それでは私から離れないようについて来てください。」

「了解！」

こうして、即席のコンビを組むことになった。

# 第３１話

音を頼りに暗い森の中を走る二人。
レフィーヤは今さながらキリトを連れてきてしまったことを後悔し始めている。
なぜなら、彼とは別のファミリアだ。
これでもし自分たちが追っている組織《闇派閥―イヴィルス》だとしたら自分一人で彼を守りきれる保証はない。
それどころか自分自身対処できるかも怪しい。
撤退の判断を自分だけではなく彼のことを含めて考えるべきだった。
二人は冒険者の恩恵で良くなった聴覚を頼りに走り続ける。
すると、１８階層東端まで来てしまっていた。

「音はこの辺りだったよな？」

「ええ、、」

今は聞こえなくなったが、確かにこの辺りから聞こえていた。
しかし辺りには何もない。

「どうする？一旦引き返すか？」

今更だがキリトの提案に乗るのが正解だと思う。
不確定な要素が大きく、リスクが高い選択をわざわざする必要がない。
むしろキャンプに戻ってファミリアのメンバーを連れてきたほうが安全である。

「そうですね、、一度引き返して、」

するとその瞬間いきなり地面がパックリ開いたのだ。

「え？」

「くそっ！」

「きゃあああああ！」

キリトは慌てて走り出しレフィーヤの手を掴もうとした。
が、間に合わない。
咄嗟に開いた穴に飛び込んでレフィーヤを掴む。
そしてそのまま二人は穴に落ちていった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「んっ、、、」

落ちてすぐにレフィーヤは自分の下に何かいるのに気づいた。
それはキリトだった。
彼は咄嗟に自分の下になってかばってくれたのだ。

「だ、大丈夫ですか?!」

「っ、、、衝撃はな。ただ、、、っ！」

「どうしたんですか？わっ！」

レフィーヤはキリトから離れて気づいた。
この場所には何か液体が溜まっていた。
そしてそれは、

「溶解液？」

液体に触れている箇所が火傷のようにヒリヒリと痛む。
このままここに留まっているのは危険だ。
だが、落ちてきたは穴はすでに塞がっていた。
一体どうやってここから脱出すればいいのか。
脱出の方法を考えようとするレフィーヤの耳に突然何やら不穏な音が聞こえてきた。

「どうやら、ここはあいつの縄張りみたいだな。」

キリトの言葉を聞いて、彼が見ている方角を見てみる。
そこには、極彩色の上半身人型のモンスターが単眼でこちらを見つめていた。
腕はまるで鞭のような触手になっており、おぞましい姿をしていた。
よくみると辺りには冒険者の死骸がいくつも転がっており、考えるまでもなくやつにやられたのだろう。
二人は装備していた剣と杖を持って戦闘態勢に入る。
殺意を感じたのか、異形のモンスターは激しく動きを見せ、触手を二人に向かって振り下ろして来る。

「来るぞ！」

「はい！」

二人は向かって来る触手をかわそうと大きく跳躍する。
地面に叩きつけられた触手が下の溶解液をはね上げて体にかかる。

「くっ、、、」

普通の人間ならそう長くは持たないであろうこの溶解液に対して、恩恵を受けている二人は今だに溶けきることなくいるがいくら恩恵を受けているとはいえどそう長くは浴び続けることはできない。
さらに、相手はあの新種だ。
黙っていては確実にやられる。
だが、

『アアアアアアアアアアアアアアア』

なんども触手を叩きつけて来るこの状況で果たして詠唱をすることが叶うのか?
しかし、共にいるキリトはＬＶ２。
彼に頼るのはおそらく難しいだろう。

(私がやらなきゃ!)

【解き放つ一条の光】

『アアアアアアアアアアアアアアア』

レフィーヤが詠唱を始めると突然魔物が暴れ始め、レフィーヤに狙いを定め触手を振りかざして来る。

(やっぱり、このモンスターも魔力に反応してくる!)

以前対峙したものと同様に魔力を放つものに対して大きくヘイトを集めるようだ。
レフィーヤは詠唱を途中で止められ、回避する。

(このままじゃ、、、)

打つ手なし。
このままジリ貧で二人ともやられる。
そんな考えが脳裏によぎる。
レフィーヤは内心とても焦ってる。
しかし、ＬＶ２のキリトがいる前でとりみだすわけには行かない。
そんなことすればパニックを起こしあっという間に全滅だ。
何か、何かいい手はないのか。
一瞬の思考の耽りが隙を生み、レフィーヤにめがけて飛んできた触手が目の前に迫っていた。

（しまっ！）

やられる！
そう思い目を閉じると

ガンッ！と音を立てて触手が弾かれる。
触手を弾いたのは言うまでもなく彼だ。
つい先日ランクアップしたばかりの黒髪の少年。

「ボーッとするな！次来るぞ！」

彼の言葉にハッと意識を再び戦闘に向け、触手をかわし大きく飛び退いた。

「あの！ありがとうございました！」

「礼ならあとだ。それより、あのモンスター。君の魔法で倒せるか？」

「ええ、でも詠唱をする余裕が、、、」

「俺が君に飛んで来る攻撃を防いでみせる。それならどうだ？」

「え？」

「あのモンスターは魔力に反応して攻撃してた。なら、君が詠唱してる間の攻撃の方向は限られる。それなら攻撃を防げるはずだ。」

ＬＶ２の彼に攻撃の全てを防いでもらう。
しかし，１００パーセント防げる保証はない。
なにせ彼女は今日初めて出会ったのだ。
信頼丸ごと預けられるはずがない。
けれども、それしかあのモンスターを倒す手立てがないのは事実だ。
このままジリ貧でやられるくらいなら、彼に賭けるべきだろう。

「、、、わかりました。あなたを信じます！」